重ネテ御書ヲ賜ヒ威子御返書ヲ獻ル

初度ノ御書御書ヲ受クル作法

々退出、」

五日、戊戌、從内有御使、藏人定經（大江）、獻御返事、於南渡殿有酒肴、上達十許（部イアリ）輩被座、同在此座（度イ）、其後入夜參内（道長）、退出、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔左經記〕三月

一日、甲午、參大殿（道長）、内御書始可有尚侍殿之由云々、仍聊有事用意、上達陪（部、下同ジ）多被參會、或布袴、或宿衣、及申刻許攝政殿令參給ヘリ、頃之藏人散位定良朝臣持御書參入、居藏人所南戸邊、左大將進出、傳取御書入簾中、頃之進出、示召之由於定良、々々進居南簀子敷座、次敷垣下人々座、高麗端疊、次着肴（羞カ）物、高坏四本、又羞肴物於垣下座、次南渡殿南面敷疊等、羞物、五六巡之後、上達陪勸盃、殿上人酌歟、賜祿勅使、女裝束一具、無御返事、定良下腋階、於庭中再拜退出、小舍人於便所勸盃之後腰挿、絹二疋、

五日、戊戌、○中略、結政ノコトニカヽル、次參大殿、尚侍殿有内御書、御使藏人式部丞大江定經、頃之南渡殿南面敷座、疊・茵、召著御使、上達陪數多被候、直衣、遞以勸盃、數巡之後、有御返事、無祿、小舍人召居文殿西板敷給盃、左京進祐基勸盃之、事了各分散、

○以上、先ツテ、天皇、威子ニ御書ヲ賜フコトニカヽル、

入内ノ日時ノ勘申

道長威子ノ直廬ヲ檢分スス

道長入内ノ無事ヲ神佛ニ祈禱セシム

直廬ハ一條院西北對

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　二月

二日、丙寅、召吉平（安倍）、令勘可參内日、尚侍○陽明文庫所藏古寫本、尚侍ヲ勘・可ノ間ニ入ル、定雜事、○中略、藤原道長ノ男同長家ノ右近衛中將新任饗ノコトニカヽル、正月二十七日ノ條ニ收ム、事了參内、見可候尚侍西北對（尚侍可候イ）、入夜退出、

三月

四日、丁酉、從夜雨降、可然僧綱許、七日可無事障可成祈由、送消息、又召神社禰宜等、仰此由、○中略、仁王會ノコトニカカル、本月四日ノ條ニ收ム、詣法性（寺イアリ）、卽還、如例供御燈、諷誦、又從今日五箇日諷誦、

六日、己亥、參太（大）内、退出、○コノ條、便宜附載ス、

七日、庚子、從夜雨降、辰時許晴、早朝參内、裝束西北對了、未時許退出、「申時許有（頭書）御使、資業（藤原）來、受祿（授イ）、女束裝（裝束イ）、無御返事、以酉（以イナシ）時入内、戌時人々被來、東南度上達部・殿上人儲座（度殿儲上達部殿上人座イ）、時剋召吉平朝臣令（反閉カ）、寢殿南階倚糸毛車、西對南面女方（房）乘車、從東院（洞）大路上北（イナシ）、

（裏書）「從陽明（門イアリ）行西（西行イ）、從小代（源倫子子）小路行北（北行イ）、從土御門着大宮大路一条院西門、式部（藏人）丞定經仰輦車宣旨、此間余幷攝政（道長）・按察大納言・源大納（後賢）言等在中門、自中納言已下在門、行輦車事、

五位十二人付輦、殿上人取突松、對南面倚之、其後上達部・殿上人等着座、兩三獻後、

威子ノ母源倫子衾覆ニ奉仕ス

余入内、攝政又立參御前、有御使、内侍、給祿、女裝束、加綾褂、卽參上、母々（倫子）供御衾、

後朝ノ御使ヲ賜フ

參皇太后宮（大イアリ）御方、候渡殿、典侍（マヽ）御持來御、臨曉退下（出イ）、（大皇太后ハ藤原彰子）

威子連夜參上ス

八日、辛丑、上達部・殿上人等被來、御使藏人頭右中弁定頼（藤原）來、上卿（公イ）等數度進盃、又女方（房）取盃、童女（子簾前イ）前簾勸酒（盃イ）、奉御返事、受祿（授イ）、女裝束、有御使、參上、

九日、壬寅、上達部・殿上人等被參、有饗事、入夜間有雨、而卽晴了（氣イアリ）、有御使、參上、

十日、癸卯、從内退出、女方（房）同之、攝政・大將（教通）・左衛門督（藤原頼宗）・新中納言（藤原能信）等連夜上下間送迎、

○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

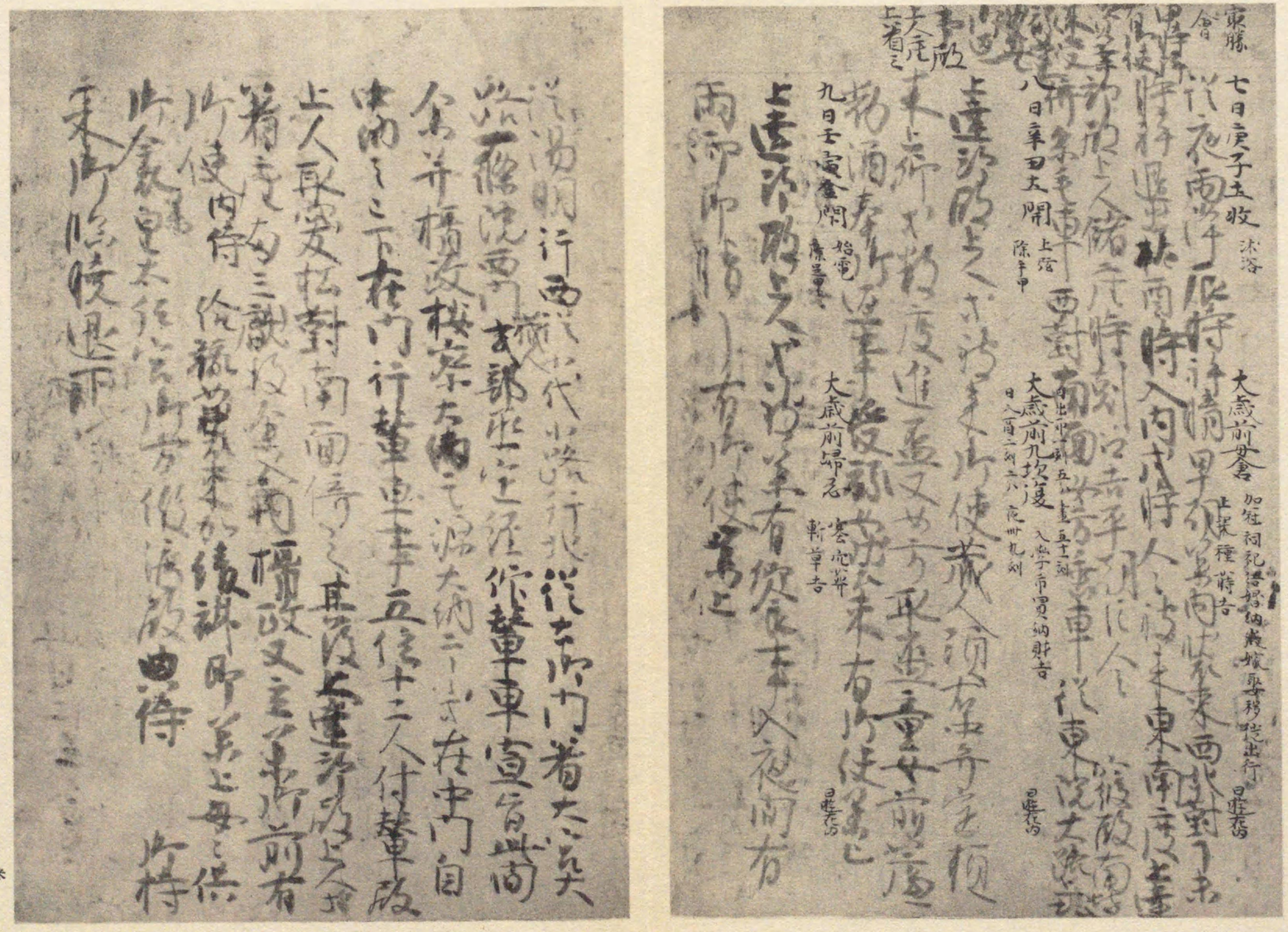
〔左經記〕三月

七日、庚子、降雨、大殿御共參内、爲覽尚侍御方御裝束也、御帳・几帳等帷織物也、自餘物等甚華美也、以酉刻尚侍令入内給、右衛門陣分留（令カ）御車、藏人式部丞定經進立門西砌上、東面、召吉上、二音歟、吉上唯、仰云、尚侍手車令入ヨ、卽退出、□（須吉カ）上唯後可告也（出カ）、次移乘御手車入陣、殿上人乘燭、五位付車、次殿上達部（上脱カ）著座、兼居物、數盃之後各分散、頃之自内早可令上給之由有御消息、掌侍使御（マヽ）、并有被物、女裝束、加綾褂、次令上給、緣道藏人諸司令候、今日午後雨晴、又從大皇（太）大后宮（太）有香子筥、又自攝政殿有御火取云々、皆美麗也、又自内有御書云々、御使藏人右少辨資業朝臣、有御返事并祿云、女裝、小舍人絹二疋、（束脱カ）

輦車ヲ聽サル、作法

御書ヲ以テ參上ヲ促シ給フ

太皇太后香壺宮ヲ藤原頼通火取ヲ贈ル



原寸　縦〇・三〇四米

御堂關白記（自筆本）

寛仁二年三月七日・八日・九日ノ條并二同月七日ノ條裏書

京都市　陽明文庫所藏

御書ヲ以テ參上ヲ促シ給フ太皇太后香壺宮ヲ藤原頼通火取ヲ贈ル

唯、仰云、尚侍手車令入ヨ、即退出、後可告也、次移乘御手車入陣、殿上人乘燭五位付車、次殿上達部著座、兼居物、數盃之後各分散、頃之自内早可令上給之由有御消息、掌侍并使御、有被物、女裝束、加綾袴、次令上給、緣道藏人諸司令候、今日午後雨晴、又從大皇太后宮有香子筥、又自攝政殿有御火取云々、皆美麗也、又自内有御書云々、御使藏人右少辨資業朝臣、有御返事并祿云、女裝小舍人絹二疋、

道長第及ビ威子ノ直廬ニ於テ饗饌アリ

威子ニ隨從スル女房童女下仕ヲ選定ス

八日、辛丑、御書有尙侍殿御方云、御使頭右中辨、有御返事幷祿等云、次有上達部・殿上人儲云々、

〔小右記〕三月

七日、庚子、主計頭吉平來也、○中略、又云、今日尙侍入內、酉刻者、或之〔云カ〕、今夕權〔於カ〕大殿有饗饌、又從今夕三ヶ日、尙侍直廬有饗饌之儲、

〔日本紀略〕後一條院 三月

七日、庚子、尙侍從三位〔マヽ〕藤原朝臣威子入拔庭、〔道長〕前太政大臣第三女、

〔榮花物語〕十四 ○梅澤義一氏所藏三條西本

寛仁二年〔三カ〕かくて二月になりぬれは、大との〻內侍のかむの殿、內へまいらせ給、よろつととの〔の事イアリ〕へさ尙侍威子入內、年廿、天皇御年十一、せ給へり、おとな四十人、わらは六人、しもつかへ〔六人〕おなしかすなり、はしめの宮々・攝政殿なとにみな人〻こみまいりて、いまはえしも〔キイナシ〕やとおほしめしつれと、いつれもはちなき人〻おほくまいりこみたり、わらはゝ、そのよの御車よするまて、えりとゝのへさせ給へるほと、をしはかるへし、ふた宮〔彰子・藤原妍子〕の御まいりのおり〻の事をそよかたりに人〻きこえさすめるを、○道長ノ女藤原彰子、入內スルコト、長保元年十一月一日ノ第二條ニ、同藤原妍子、東宮ニ入ルコト、寛弘七年二月二十日ノ條ニ見ユ、これはいますこしまさりたり、よの中の人の御心をきてきのふにけふはまさりてのみあ〔み〕

威子天皇ヨリ年長ナリ

威子ノ容姿心操

るわさなれは、よろつそれにしたかひてめてたし、みかとの御ありさまよりはかんのとのこよなくおとなひさせ給へり、御かたちいみしくおかしけにあいきやうつき、いろあはひよりはしめなへてならすみえさせ給、御くしいみしうこまやかにめてたくて、御たけにすこしあまらせ給へる、うへの御まへの御くしよりはしめ、ふた宮の御くし、よにたくひなくなかうめてたうおはしますに、この御まへのをそ心もとなけにおほしめしたるに、これはいとうつくしけにおはしますや、〻へこうはいをつゆかゝりなからをしおりたるやうなる御にほひなり、いつれのものかたりにかは人の御むすめ女御きさきをよにわろしとはきこえさせたる、そかなかにも、このおまへたちは、御かたちこそさもおはしまさめ、御心をきてありさまなとは、いかてかくこたいならすいまめかしう、さりとてはしちかにやはおはします、いかてかうさま〳〵めてたくおはしますにかとみえさせ給、まいておはしましあつまらせ給へるおりは、ゑにかきたるも○以上七字、富岡本、ゑにかきたるやうなるもゑにはニ作ル、かたくなしきもましりたり、これはきこえさすへきかたなくおはしませは、殿（道長）もうへ（倫子）も御めほかへやらせ給はす、まほりたてまつらせ給、かくてまいらせたまへれは、御しつらひありさまなと、れいのおとろ〳〵しうたまをみかきたてさせ給へり、み

威子上ニ參ル

かといとわかうおはしまいて、いかゝとよの人申おもへり、さき〳〵もおほつかなからすみたてまつりかはさせ給へる御なかなれと、かむの殿は、さしならひたてまつらせたまへることをかたはらいたうおほしめす、みかとはひたみちにはつかしうおほしめしかはしたるにしふ〳〵にのほらせ給へれは、よるのおとゝにいらせ給ほと、いみしうつゝましうわりなくおほしめされて、やかてうこかてゐさせ給へれは、あふみの三位まいりて、あな物くるをし、なとかくてはとて、御丁のもとにおはしまさすれは、うへおきゐさせ給て、御そてをひかせ給ほと、かんの殿、むけにしらせ給はさらん御中よりもはゆくはつかしうおほしめさるへし、さていらせ給ぬれは、殿のうへおはしまして、御ふすままいらせ給ほと、けにめてたき御あへものにて、ことはりにみえさせ給、いらせ給てのちの事はしりかたし、御めのとたち御丁のあたりにさふらふ、とのゝ御まへ、よろつにおほしつゝくるに、ゆゝしうて御めのこはせ給、あか月にはおりさせ給、さてよころのほらせ給て、よき夜してあへい事ともなとものせさせ給、御めのとたちのをくり物、うへの女房たち・女官まてものたまはすれは、よろこひかしこまりて、いのりましつゝくるもおかしくなむ、をそくのほらせ給おりは、よふくるまておはしましてまちつけた

威子年長ナリト雖小柄ナルニ依リ天皇ニ似合ヒ奉ル

天皇威子ノ調度類ヲ御覧ジ興ゼサセ給フ

藤原道兼ノ女威子ニ召出サレテ之ニ仕フ

てまつらせ給ほとなとこそ、なを心ことにおはしますわさなめれ、御かたにわたらせ給へれは、ならひきこえさせ給へるほと、ことのほかにいかにとみたてまつり、世人も申しを、かんのとのもとよりさゝやかにおかしけにおはしませは、なすらひうつくしうみえさせ給、うへあさましうおよすけさせ給へり、おはしましては、御くしのはこのうちよりはは(衍カ)しめ、よろつをさかし御らむするに、いとおかしうみところありて御らんしけうせさせ給、御てうとゝものめてたうおかしきをそあけくれの御あそひに御らんしける、かんのとのはなをいとはつかしう人めをおほしたれと、うへはいと心よくむつひきこえさせ給ほとも、おかしくなむ、かゝるほとに、かのあはたのひめきみおとなになりはて給にたれは、故大藏卿遠量女遠量者師輔公御子きたのかた、いかてわかあるおりに、たのもしうさへきさまにみをきたてまつらんとおほしのたまへと、さへき事のめやすくおほさるへきもなし、さりとてなへて道兼姫君參尚侍御許事、のことをおほすへきにもあらす、いかにとおほしわつらふほとに、このかんのとのよりせちに御せうそこきこえさせ給、なにかとおほすへきにあらす、つれ〳〵のなくさめにかたらひきこえさせんなとそある、とのゝうへの御せうそこなときこえさせ給を、このきたのかた、いかにせましとおほしみたれて、ひめきみに、をのかゆくすゑものこりすくなけれは、いかにも〳〵していかてうしろやすくとおもひきこゆるに、この宮わたりにかくせちにのたまはす(めイナシ)めるを、いかゝおほすと、きこえ給へは、ひめきみ、ともかくもきこえ給はて、うちそはみてゐ給へるを、みたてまつり給へは、御なみたのこほるゝなりけり、北方いとゝせきもあへたまはす、あか君や、これをよきことにはあらす、人のせちにのたまうことなれは、こ殿(道兼)のうた物かたりをかきまうけて、御てうとをしまうけてまちたてまつり給しかと、御かほをたにみたまはす○以上五字、富岡本、みたてまつりたまはすニ作ル、なりにしことゝ、いひつゝけなき給へは、おまへなる人〳〵もゆゝしきまてなきあへるほと兼隆前中納言正二位道兼公息に、二位の宰相まいり給へり、きたのかたこの事ともをきこえ給へは、○宰相以下二十五字、富岡本ナシ、宰相うちなき給ひて、かゝる事なん、いとくるしくはへる、いたうとれはといふらんやうに、こ殿の御心をきてのやうにては、すへておほしかくへきことにもあらねと、いまのよのことのいとさまことになりにてはへれは、かくせちに申させ給をいなともはへらは、なにかしなとかためにこそ便なくはへらめ、この御ありさまのつくへきよもみえはへらねは、人のためよきことはかたく、あしきことはやすくなん侍と、きこえ給へは、はゝきたのかたさるへきことなりとおほしたちて、さるへきことゝもせさせ給に、宰相、

道兼ガ豫テ女ノ爲ニ儲ケタル調度ヲ催ス涙

道長道兼ノ女ニ所用品ヲ贈ル

道兼室ノ今ノ夫藤原顯光ノ女ニ道兼ノ出仕ニ援助セズ

おとな十人、わらは二人、しもつかへさやうにてあへはへりなん、帥殿の御方（伊周○藤原）大宮（中姫）にまいり給ひし、さやうになんきゝ給へしと申給て、なひきゝこえたてまつり給ふよしの御返きこえ給つ、ひめきみをみやりたてまつり給へは、いとちゐさやかになまめかしうしたりやなきたちてゐ給へり、御てうとゝもはこ殿（道兼）のさま〳〵しまうけさせ給へりしあめり、しろかねの御くしのはこさへあるこそとて、又なき給、よにかきりなき御身とこそおもひきこえ給けめとてもまたなき給、よろつ物かたりめき（ものゝためし）、いとあはれなることゝもなり、かくて宰相いて給ぬ、おほとのには、かの御返を御らんしてけれは、よろこひなから、人の御身にいるへきものさま〳〵、おとろ〳〵しきまて、たてまつらせ給へり、さはかうにこそはと、いそきたゝせ給につけても又きたのかたともすれはいやめなることものやうにうちひそまり給（れイ）、ほりかはのおとゝに（顯光○藤原）、かゝる事なんあるときこえ給へれは、すへてまろにものなのたまひそ、なにこともおほへはへらすと、かひなき御いらへなり、かくてこ殿たひ〳〵ゆめにみえさせ給、物のけにいて給なむ（させなとイ）とすれと、さりとておほしとまるへき事にもあらぬを、ひめ君いてやあまにやなりなましと、人しれすおほしみたるれと、まめやかなる御心（にイアリ）なとのあめるに、又いまさらにけしからぬやうにやはなとおほすもあはれになん、そのよになりて、二位宰相（兼隆道兼公息）・藤中將（兼綱道兼二男）（頭イ）なとまいりあつまり給、またむかしより心さしありて、したしうおほされしこれかれなんともつかまつれり、御むかへには、大殿（○大殿、富岡本、大納言殿ニ作リ、大二條殿○藤原教通ト旁書ス、）の御車をそゐてまいれる、それにのり給、これを御いそきとおほしいそくにつけても、よの中のあはれそまつしられける、さてまいらせ給へれは、二条殿御方とて、いみしうかしつきすへたてまつらせ給て、たはやすくとの〻公達まいりより（○まいりより、富岡本、のまいりけにてはうちとけてもみたてまつりニ作ル、）給はす、いとやん事なきさまにもてなしきこえ給、この御まいりをはさる物にて、帥殿（中姫）のひめきみの御まいりあはれなることとそかし、すへてこのとの〻御するゐ〳〵つゆかゝり給はぬ人なくなりはて給ぬ、きのふのふちけふのせになる（とイ）といふ事まことにみえたり、（○富岡本ヲ以テ校ス、）

道兼ノ女二條殿ノ御方ト稱セラル

寛仁二年三月七日

〔大鏡〕

（四○東松本三氏本）

一、右大臣道兼

（○上略）御むかへはらに、ほとけ・かみに申てはらまれたまへりしきみ、いまの中宮（威子）に二條殿の御方とてこそはさふらひたまふめれ、ちゝ殿（道兼）、女子をほしかり、願をたてたまふしかと、御かほをたにえみたてまつりたまはすなりにき、かやうにあはれなることともの、よに侍しそかし、そのとの〻（道兼）御北方、粟田殿（道兼）の御のちは、この堀川殿（忠義公藤原兼通）の御子の左大臣（顯光）の

北方にてこそは、としころおはすときゝたてまつりしか、そのきたのかた、九條殿（師輔○藤原）の御子の大藏卿（遠量○藤原）の君のむすめそかし、

○以下、是ヨリ後、天皇、威子ノ直廬ニ渡御アラセラルヽコトニカヽル、

〔御堂關白記〕（○陽明文庫所藏）三月

廿四日、丁巳、○中略　攝政被來、○中略

「（裏書）廿四日、○中略　同車二條來、明日雜事相定、」

廿五日、戊午、此日主上渡御尙侍御方、宿所南面西四間爲上（公イ）卿座、西廂爲殿上人座、申時御後進酒肴、五六巡後祿、攝政女裝束、加褂、大納言織物褂・袴、中納言綾褂・袴、宰相小褂・袴、殿上人如常、入夜還御、此間女方（房）入垸飯（歟垸イ）、御乳母等送物、次女方（房）授祿、乳母女裝束、加織褂（物イアリ）・打褂、入莨、有入帷等、加吉長絹十疋、乳母三人、三位一人、

「（裏書）廿五日、典侍二人女裝束、加綾褂、常侍（掌イ）前等相加十一人女裝束、命婦十五人綾褂・袴、藏人五人綾褂、御厨（子イアリ）三人白褂、女官等必雖非可給、有事次多參入、仍給絹、內侍所傳（博ナイ）仕等・奈（采イ）女・髮上等二疋、女官各疋絹、所入絹及三百、（入絹及イ）

候上達部、攝政・按察大納言・大（太）皇太后宮大夫・侍從中納言（藤原行成）・左大將・新中納言・右（藤原實成）衞門督・二位宰相（藤原兼隆）・左大弁（源道方）・左兵衞督（源頼定）・三位中將（藤原道雅）・右大弁（藤原朝經）等也、自餘人有身障不參、」

廿七日、庚申、○中略　一夜漏女方（房）等送女裝束三具、一具加綾褂、袴一具宰相（マヽ）乳母許、

四月

四日、丁卯、○中略、藤原頼通、道長ノ許ニ來ルコトニカヽルヽ、又命（頼通）云、昨日主上渡尙侍御方給云々、（○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、）

○大鏡裏書・台記別記・婚記・應德元年皇代記等、異事ナキヲ以テ略ス、威子ヲ女御ト爲スコト、四月二十八日ノ條ニ見ユ、

九日、（壬寅）、新造內裏ニ於テ、仁王經御讀經幷ニ安鎭家國法ヲ修ス、

〔左經記〕三月

九日、壬寅、參內、今日、於造宮所、請百口僧、三个日間、有仁王經御讀經、上達陪（部）・殿上人參入、爲行香也、又始自入（今カ）夜、有安鎭御修法、其作法、中構圓壇、八方又構壇、請九口阿闍梨、各率番僧等、中壇闍梨權僧正也救（明カ）云々、

〔小右記〕（○前田家本）元年十月

十四日、己卯、○中略　宰相（藤原實成）入夜來云、大殿（藤原道長）被談律師永圓云、新宮御修法安鎭法、仰遣山座（慶

天皇威子ノ直廬ニ渡御アラセラルル

女房等ニ給フ祿物

御讀經ノ請僧百口

安鎭法ハ中央ト八方ト九壇ヲ構フ

慶圓安鎮法ノ大阿闍梨ヲ辭ス

主所、申故障不奉仕、仍被仰權僧正明救、而來觸云、於八方以八人阿闍梨可令奉仕護摩、
其阿闍梨公家可令請給者、此事往代未聞事也、心底所奇思也、山座主今般申障可然、院
御時奉仕歟者、○慶圓、安鎮法ヲ修スルコト、長和四年五月二十五日ノ第一條ニ見ユ、

御讀經ノ請僧ヲ定ム

〔小右記〕二年三月
四日、丁酉、今日臨時仁王會、○中略、本月四日ノ條ニ收ム、大納言齊信不參青宮、依定申新宮御讀經僧、
依無日次、不可被行仁王會者、件御讀經仁王經、僧數百口者、
○上略、コノ條、日附及ビ首文闕ク、七日庚子條ノ後、十三日丙午條ノ前ニ介在ス、首附ニ「季御讀經定事子細」トアリ、候新宮御讀經之僧綱已下多在請
僧、不可辭退之事、令戒仰之、

安鎮法七箇日

〔日本紀略〕後一條院　三月
九日、壬寅、於新造內裏、以百口僧、被修臨時仁王經轉讀事、又以權僧正明救、行安鎮
法、七箇日、

御讀經結願

十二日、乙巳、御讀經結願、

〔阿娑縛抄〕百二十　安鎮法日記集甲
一、淨土寺座主大和尙鎮日記明救後一條院御時、

安鎮ノ作法

但鎮夜・初夜二度、初行、次鎮亦又行、唱禮如常、不動、伴僧念誦、不動慈救呪、無後加持、二壇有、大壇・護摩
壇也、又但中方鎮穴傍、以別人神供、八方闍梨向中方、祭文中方、但息災法也、曼荼羅入匣、
清涼殿主夜オトヽ、上マキウヘ置、中闍梨大將云也、八方伴僧阿闍梨云、但幡一腰也、卽
佛左天幡、中四又地天番二、輪八寸、橛九寸、八番色本方天色也、五色ヌサ各別色、了
人一來、ミテクラ又五色也、各別ハサム、クシ五寸、横ハサム、一方各五淨衣、息災色也、
智公云、山人唯一壇修、橛半金剛也、中方ホソニ作、燒香灰熱取輪中方穴入、卽橛ホソ
以入、灰中不冷竟打、一呪一打、如是千反、但輪外三古牙令有、但鎮夜被物有、中方阿
闍梨貴食儲諸僧饗、○以上、本書百二十二、安鎮法日記集丙、亦之ヲ揭グ、依ツテ以テ校ス、

九壇護摩

九壇護摩云々、傳言云、淨土寺僧正座主和尙安鎮法也、

○次ニ、寛仁元年十月十四日及ビ寛仁二年三月九日ノ記ヲ揭グ、ソレゾレ上ニ揭グル所ノ小右記及ビ左經記ノ文ニ同ジキヲ以テ略ス、

○造宮仁王會ヲ停ムルコト、元年十月十五日ノ條ニ、新造內裏ニ遷御アラセラルヽ、
コト、本年四月二十八日ノ條ニ見ユ、

十日、癸卯、四角祭、

〔日本紀略〕後一條院　三月

十日、癸卯、宮城四角祭、

十一日、甲辰、権大納言源俊賢、著座ス、尋デ、権中納言藤原能信及ビ同藤原實成、著座ス、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　三月

十一日、甲辰、○中略源大納言（俊賢）以申時着座云々、

十三日、丙午、○中略此日、酉時右衛門督（藤原實成）着座、丑時新中納言（藤原能信）又着座云、〔云々イ〕○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔公卿補任〕七

權大納言正二位源俊賢、六十、「三月十一日（朱書、下同ジ）、甲辰、申時著座、」

權中納言從二位藤能信、廿四、「三月十三日、丙午、丑時著座、」

正三位藤實成、四十四、「同日、酉二點著座、」

○俊賢、權大納言ニ任ゼラルヽコト、元年三月四日ノ條ニ、實成、服解ノ後、復任スルコト、同年正月二十四日ノ條ニ、能信、權中納言ニ任ゼラルヽコト、同年八月三十日ノ條ニ見ユ、

十四日ニ出立セントスル祿ヲ賜フ

左少辨兼近江守源經頼太皇太后宮及ビ攝政大臣等ノ第ニ參ル

藤原道長及ビ大將大辨等ヲ訪フ

源倫子等小式部ノ下向ヲ餞ス

道長唐車ヲ與フ

使及ビ舞人ヲ定ム

左少辨兼近江守源經頼ノ赴任ヲ餞シ給フ、

〔左經記〕三月

十一日、○中略、結政ノコトニカヽル、二月十七日ノ條ニ收ム、次參攝政殿（藤原頼通）、申來四日（十四日）可下向之由、次申太皇大后宮（太）、有祿、蘇芳織物等褂一領、有拜舞、次申內、於殿上座令申、於腋陣給祿、拜舞黃袞一領、次參源大（後）納言殿（藤原顯光）并左府等申下向之由、次參左府（マヽ）申、有祿、織物褂一領、再拜、

十二日、參大殿（藤原道長）、申下向之由、給御馬一疋、次參左右大將（藤原教通・同實資）并左右大辨（源道方・藤原朝經）御許、同申此由、

○經頼、近江守ニ任ゼラルヽコト、正月二十七日ノ條ニ見ユ、美濃守藤原泰通ノ妻小式部、下向スルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　三月

十三日、丙午、○中略小式部依示下向由、千子授手（藤原嬉子カ）苞等、母々（源倫子）給物、

十四日、丁未、○中略從夜雨下、巳時許晴、美濃守泰通（藤原）妾小式部下向國、所用唐車給之、

十三日、丙午、石清水臨時祭、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　二月

十七日、辛巳、從夜雨降、巳時許天晴、臨時祭（石清水）定使（定臨時祭使イ）・舞人等云々、

試樂
御馬御覽
左馬寮ノ馬飼養佳ナルニ依リテ七匹ヲ取ル
使藤原知光
攝政藤原頼通庭座ニ著ス
還立

三月

十一日、甲辰、此日試樂、仍參入、申時許事初、候宿、

十二日、乙巳、從内出中宮（參イアリ）・院（小一條院敦明）、依有方忌（藤原妍子）、還參、此日覽左右御馬、左御馬吉飼七入、

○コノ頃、秡闕乏スルコト、五月十四日ノ條ニ見ユ、

十三日、丙午、臨時祭如常、使知光（藤原）朝臣、攝政着庭座（藤原頼通）、不取盃取花、申時使立、見物、

攝政・按察（藤原齊信）等同車、

十四日、丁未、行土御門、攝政被來、次定頼（藤原）來、使還參、給祿於場殿（ニアリ）者、從夜雨下、巳時許晴、

○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔左經記〕二月

十七日、辛巳、○中略今日、於攝政御宿所、有臨時祭定云々、

三月

十一日、○中略今日、臨時祭試樂也、

十二日、○中略

今日、有御馬御覽、明日舞人料也、

藤原道長
頼通
藤原齊信
同車シテ見物ス
府生使ノ馬ノ口ヲ取ル
初メ藤原長家ヲ使ニ豫定ス

十三日、丙午、有石清水臨時祭事、舞人、章信（藤原）・誠任（藤原）・宗（マヽ）・良頼（藤原）・經定・實康（藤原）以上五位、家經（藤原）、藏人儒者、○藏人儒者恐ラクハ家經ニ係ル分注ナラン、右衛門尉信尹（藤原）・頼平（藤原）・教任（高階）、已上二人催、○催ノ字ハ六位ノ誤ナラン、陪從、政隆王・通理（大江カ）朝臣・忠道（紀）朝臣・保命（藤原）・有光（平）・頼信（源）已上五位、高行・高教・濟通・範永（橘）・仲時（藤原）、

〔小右記〕三月

十三日、丙午、臨時祭、有所勞不參入、其由示遣藏人辨資業（藤原）朝臣許、○中略被催少女、相共見物、神泉東垣下、前太相府（藤原道長）・攝政・按察大納言同車、及上達部（興カ）見物、前相府乘唐車、使備中守知光、左府生季理（榎本）・時頼（尾張）執馬口、近代作法歟、知古事之人可彈指乎、

〔日本紀略〕後一條院　三月

十三日、丙午、石清水臨時祭、

〔榮花物語〕○十四梅澤義一氏（あさみとり）所藏三條西本

本日ノ第二條ニ收ム、

○上略、右近衛中將藤原長家、權中納言藤原行成ノ女ト婚儀ヲ行ハントスルコトニカヽル、

三月廿（十カ）よ日のほとゝおほしさためたるに、その日いはしみつのりむしのまつりのつかひにこのきみ（長家）をはすへかりけれは、殿（道長）の御まへ、こと人をさしかへさせ給ほとの御心（のイナシ）をきてを、中納言（行成○藤原）はをろかならすおほしよろこひたり、○富岡本ヲ以テ校ス、

前太政大臣藤原道長ノ男、右近衛中將同長家、權中納言藤原行成ノ女ト婚ス、

源經頼酒食馬等ヲ贈ル

源倫子長家ヲ養フ

行成ノ女ハ十二歳

行成道長ノ意向ヲ問フ

〔左經記〕三月

十三日、丙午、○中略、石清水臨時祭ノコトニカ、ル、本日ノ第一條ニ收ム、今夜侍従中納言殿（藤原行成）中將君（藤原長家）取因縁入□（婿カ）、（因カ）司聊調盃飯、裝束馬二疋・鞍等送之、依服身ル○源經頼、同雅通ノ服ヲ著スコト七月十日ノ條ニ見ユ、自不來、章任朝臣隨身來向、（參カ）（源）（參カ）

〔榮花物語〕十四　あさみとり　○梅澤義一氏所藏三條西本　かくて殿（藤原道長）の三位中將（長家）このころ十五（四イアリ）はかりにおはするに、御かたちなとう（いとイアリ）つくしう、○富岡本、コノ次ニおはすノ三字アリ、としころ殿（源倫子）のうへの○以上五字、富岡本、大とのゝ北政所のニ作ル、一本、コノ次ニとりわきノ四字アリ、御こにしたてまつらせ給、御おほえなとも心ことなるを、たゝいまいみしき人の御むこのほとにおはすれは、さやうに思きこえ給わたりおほかる（イ）へ（ナシ）けれと、えさもあらぬに、侍從の中納言（行成）の御むかひはらのひめきみ十二はかりなるを、またなうおもひかしつき給、むまれ給けるよりこゝろことにおほしわきてありけるを、この中將の君をさてもあらせたてまつらはやとおほしなりて、さへきかたより（イナシ）たよりして殿の御けしきたまはらせ給へは、ひゐなあそひのやうにておかし（てイナシ）からんなとのたまはせて、にくからぬ御けしきをつたへきゝ給て、○富岡本、コノ次ニ、殿もきたのかたもいにみしうれしうおほしてノ二十字アリ、はかにいそきたち給、としころおさなき（なにをかはイ）をかしつきくさにおほいたれは、さへき御てう（とイ）とゝもそあれは（ほあれとイ）、たゝあさやかにみよく御木丁のかたひらはかりをいそかせ給、さへき

道長家ノ石清水臨時祭使ノ豫定ヲ交替セシム

當日長家書ヲ送ル

行成ノ子息等脂燭ヲ秉リテ長家ヲ迎ヘ入ル

後朝ノ使

歌ハ道長ノ代詠

わかき人〳〵なとえりとゝのへて、三月廿（十カ）よ日のほとゝおほしさためたるに、その日いはしみつのりむしのまつりのつかひにこのきみをはすへかりけれは、殿の御まへ、ことに人をさしかへさせ給ほとの御心（のイナシ）をきてを、中納言（行成）はをろかならすおほしよろこひたり、

○本日ノ第一條參看、よろつのこととゝのへさせ給て、ひるつかた中將殿より、

ゆふくれはまちとをにのみおもほえていかてこゝろのまつはゆくらん、かうてくるゝやをそきとおはしたれは、民部大輔君（實經○藤原）實經ニ作ル、○富岡本、君ヲ・尾張權守（良經○藤原）良經ノ二字アリ、○富岡本、コノ次ニなと、しそくさしていれたてまつる、さてそのよ、殿も○殿も、富岡本、大納言とのゝニ作ル、きたのかたもなにことかあらんとけちかきほとにいもねられてあかさせ給、あはれにおほしつゝけらる、さてあか月にいて給て、すなはち御ふみあり、

けさはなとやかてねくらしおきすしておきてはねたくゝるゝまをまつ、○富岡本、結句ヲ、くれをまつらん作ル、ニとあり、殿の御まへの御くちつきとしるくおほさる、いへなりそ（家業○藤原）御つかひなる、○いへなり、富岡本、右衛門佐宗成ニ作ル、大輔君（實經）いてあひてもてはやし給、つきに女房のかはらけたひ〳〵になりけれは、いとたへかたけなり、女房のさうそくにさくらのをり物のうちきそへ給、あさみとりそらものとけきはるのひはくるゝひさしきものとこそきけ、ひめきみいと

新妻ノ返歌行成ノ筆致ヲ思ハシム

はつかしとおほしたれと、○富岡本、コノ次ニことさらにノ五字アリ、なを御てつからとおほいて、きたのかたせちにそゝのかしきこへ給けれは、わりなけれとかき給へるを、大殿御らんするに、いとゝ中納言の御てをわかうかきなし給へるとみえて、えもいはすあはれに御らんせらる、そのゝちおはしかよはせ給に、よろつにつくりあはせたるやうなる御なからひなり、女君いとおさなくおはすれと、御くしはきはかりにて、かたちいとうつくしうおはす、おとこ君の御なかいとよくおかしうおほしつゝみたる物から、○いとよく以下八字、富岡本、いとよくおはしニ、一本、いと耻しうニ作ル、あはれにこゝろさしふかけにおもひかはしきこへ給へり、されとまたこれもおさなくおはすれは、おとときみはやかてさふらひにうたゝねにふし給、女君はやかてゝならひし給まゝにふてとりなからねいりなとし給なとして、うちにもとにも人そいたきて御丁のうちにいれたてまつりける、○中略、長家、賀茂祭使ヲ勤ムルコトニカヽル、四月二十二日ノ條ニ收ム、この殿（行成）たゝこのきみの御あつかひよりほかのことなきもことわりにみえたり、このおほひめきみ・をとときむたちなとの御はゝ（をなしはらのイ）、このいまのきたのかたのあねにものしたまひしを、○行成ノ先室卒スルコト、長保四年十月二十三日ノ第一條ニ見ユ、女君二人、おとときみは民部大輔さねつね・尾張權守よしつねの君なん、なかの君はいまは近江守つね（經頼參議從三位、雅信公孫、參議扶義子、行成卿聟也、）よりのきたのかた、おほひめきみはさやうにほのめか

先室ノ物怪現ル

行成先室ノ長女ヲ惜ミテ婚嫁ヲ定メズ

しきこゆる人〳〵あれと、中納言（イナシ）これは（とイアリ）おもふこゝろありとおしみきこえ給ほとに、いたうさかりすきゆくに、このちこのやうにおはするきみの御ことをもてさはけは、こきたのかたの御ものゝけいてきて、このひめきみをあらせたてまつるへくもあらす、ゆゝしくつねにいひをとすめれは（おとせはイ）、しつ心なうおほされける、○富岡本ヲ以テ校ス、

○長家、史記ヲ讀ムコト、便宜左ニ合敍ス、

長家史記一卷ヲ讀了ス道長寛宴ニ文人ヲ召シ師ニ祿ヲ與フ

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　二月

十六日、庚辰、○中略　此日中將（長家）讀史記一卷了、仍廣業（藤原）朝臣向彼曹司、可然文人（召イアリ）召七八（召イナシ）人許、賦詩、通直（大江）朝臣作序、召公頼（弓削）、○陽明文庫所藏古寫本、頼ノ字ニ資ト傍書ス、公資ハ大江氏ナリ、給祿（祿イ）、依爲師也、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

官歴北野宮寺別當

十五日、戊申、法橋是算寂ス、

〔諸門跡傳〕○華頂要略百四十二所收　曼殊院○注略ス、

是算僧都　○上略　寛仁二年三月十五日寂、○全文ハ下ニ掲グ、

〔北野宮寺緣起〕別當次第事　是算法橋　長德元年補任、

〔僧綱補任〕乾○彰考館本

延暦寺ノ僧法橋

法橋是算　天台宗、延暦寺、寛弘元年十月廿一日敍、北野行幸次、○御堂關白記・權記等異事ナシ、彼寺別當、寛仁二年、或本今年卒、

北野宮寺別當ノ僧綱ニ任ゼラル、初

〔初例抄〕上　北野別當任僧綱例

法橋是算　寛弘元敍法橋、北野行幸別當賞也、寛仁二死去、

〔諸門跡傳〕三　○華頂要略百四十二所收

曼殊院　青蓮院門下、舊號善法院、號竹中、又竹内門跡、當室始在二條東末、白河北、後北山衣笠山麓、○中略

俗姓菅原氏花山法皇ノ法資曼殊院門跡始祖

曼殊院始祖、東尾坊、是算僧都　菅原氏、花山法皇御資、山門阿闍梨號始、天慶五年（マヽ）始補北野別當、寛弘元年異本五年、敍法橋、依北野行幸別當賞也、寛仁二年三月十五日寂、

（頭書）一本云、北野社御寺務職之事、

朱雀院御宇、天慶五年、（朱書）『是算』此御代ヨリ北野ヘ天神ヤウカウナラセ給也、○天慶五年年末雜載、神社ノ條參看、

則此ヨリ御寺務有也、同天慶九年六月九日ニ遷宮有之、○天慶九年年末雜載、神社ノ條及ビ天暦元年是歳ノ條參看、」

同門葉記曰、近代追加、

曼殊院　北野別當相承之、

法系

東南院　號竹中、

遍數

是算　北野別當始、

遍圓　本覺院、○門葉記百四十二、雜決三、曼殊院付東南院ノ條ニ收メタル門跡系圖ハ、遍圓ノ次ノ敎圓ヨリ始メタリ、

〔曼殊院門跡師跡次第〕○曼殊院文書十所收

覺惠

是算　曼殊院元祖、北野寺務最初、花山法皇御弟子、覺惠灌頂、國師、山門阿闍梨號始也、號東尾坊、

東尾坊

一條・三條　長德四年十月廿九日任天台座主、大僧正、號東陽坊、

覺慶　○本書是算ノ次ニ覺慶ヲ擧ゲタルハ、疑フベシ、

山門阿闍梨號ノ初

〔曼殊院門跡傳法師跡次第〕

是算　國師、山門阿闍梨號始之、北野寺務最初、○本書、是算ヲ、覺惠ノ次、遍敍ノ前ニ掲ゲタリ、

〔諸門跡譜〕下　曼殊院　世號竹裡門跡、院宇始在北山、後移禁中之境內、○中略

是算僧都　初祖、

遍救ノ師

遍救大僧都○注略ス、遍救ヲ北野宮寺別當ニ補スルコト、本年是歳ノ條ニ見ユ、

〔僧綱補任〕乾○彰考館本　治安元年

律師遍救　天台宗、延暦寺、五月廿七日任、○中略　或云、北野別當法橋是算眞實弟子云々、

〔權記〕寛弘六年八月

四日、丙戌、奉書北野宮額、依是算法橋示也、

〔小右記〕長和四年六月

藤原行成ニ依頼シテ北野宮ノ額ヲ書カシム

十九日、丁卯、今日苦熱、納涼泉邊、○藤原實資、第内ニ泉ヲ堀ルコト、長和三年正月六日ノ第二條ニ見ユ、中略、先是北野別當法橋是算來相逢〔逢カ〕、再三感家〔泉カ〕、良久去、

藤原實資ノ第ヲ訪フ

十六日、己酉、季御讀經、尋デ、東宮御讀經、

東宮ノ御讀經發願

内ノ御讀經結願

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　三月

十六日、己酉、大裏〔内カ〕季御讀經初、終日雨降、有雨間欲參内、無間、仍不參、

十七日、庚戌、參太内〔天イ〕、退出、參中宮〔藤原妍子〕、少雨降、

十八日、辛亥、○中略　參中宮并内、候宿、有風雨、春宮〔敦良親王〕季御讀初〔經イアリ〕、

十九日、壬子、從内退出、○中略　時々小雨降、太内〔天イ〕御讀經結願、

東宮ノ御讀經結願

廿一日、甲寅、天晴、春宮御讀經結願、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕三月

日時及ビ請僧ヲ定ム

○コノ條、日附及ビ首文闕ク、七日庚子條ノ後、十三日丙午條ノ前ニ介在ス、首附ニ「季御讀經定事子細」トアリ、十八日、辛亥、時未二點、若申二點、結願十九日、壬子、時巳二點、若午二點、廿一日、甲寅〔申宣カ〕、未二點、若申二點、○以上小字十六字、當ニ大字ニ作ルベキナラン、使〔便カ〕仰可奉例文・硯等之由、史〔進カ〕近例文・僧綱名帳・三會已講阿闍梨名帳・軸〔抽カ〕輪轉名帳等、納筥、次居〔マヽ〕大辨若〔前カ〕七年見學立義僧名并廣學立義等事、而間大辨云、昔不進見學立義僧名者、維摩會勅使辨持參、而不進者、問案内於資業〔藤原〕、申云、維摩會勅使右中辨定頼〔藤原〕也、○元年十月十日ノ條參看、只今參入者、仍召膝突問案内、申有解文由、不慥辨、仍問其名、又不覺、頗哥〔奇耳カ〕可、仰大辨以史令問綱所注進夾名、二人、令定書僧名、件色見者二、定入法印・法眼・法橋等、依有可預召〔公カ〕請之宣旨、入定文、僧數百口、而今一人可剩、仍大辨云、可上〔正カ〕〔マヽ〕嘉下寺者、余々〔云〕、滅〔減カ〕寺可爲永例、可滅〔減〕軸〔抽カ〕一人歟、大辨諾、止東寺一人、僧綱少可複本也、書畢進々〔之カ〕、余見了、定文・日時勘文相加納筥、以資業奉〔藤原實資〕政〔攝政カ〕、即返給了、十六日可行者、定又〔文カ〕・日時勘文下給資業、々々加太禰申、先日時僧名、次令撥〔撤カ〕〔藤原頼通〕筥并硯、呂〔召カ〕外記、仰堂童子事、料物事問辨之〔云カ〕、越前夫〔未カ〕進、周防申可進由者、仰可催越前之由、候新宮御讀經之僧綱已下多在請僧、不可辭退

研學立義ノ僧名ヲ進メザルニ依リ去年ノ維摩會勅使ヲ喚問ス

僧數百口ニ一人ヲ剩スニ依リ抽請ヲ減ズ

料物未進ノ國ヲ督促ス

之事、令戒仰之、攝政廿一日有被參春日、○本月二十二日ノ條參看、仍興福寺僧綱已下不可參上歟、
大僧都林懷・小僧都扶久（公カ）皆寺司、亦仍不可參上歟、但春季御讀經有御論議、道僧綱必祗
候、兩僧都若不可參入者、律師明憲・經理等間一人可令參上之由、以書狀可遣林懷許之
由、仰資業畢、夫定（未カ）請僧之間、宰相資平（藤原）從大殿（藤原道長）來云、攝政被座大殿、其御消息云々（行カ）、御
讀經且可被定、只今參入者、
十九日、壬子、今日御讀經結願、依有所勞不參入由、示遣藏人辨資業、○中略
宰相（資平）從內退出云々（行カ）、御讀經結願、大納言公任（藤原）卿著陣、令申卷數、一家例令奏、而被用九（藤原師輔）
條殿例如何、申大納言、被答云、忌（忌奏カ）答聞事、令申文、奇思不少、先年令奏卷數、今日改
其儀、是心外事也、但故殿（藤原頼忠）三條被注兩儀者、我所案者、三條殿可被用故殿（藤原實頼）口傳、不可用
他人古實歟、
廿日、癸丑、○中略
大納言書狀云、昨日參內、依上薦不被參、令申卷數、思失返給於史、兩家口傳、苦（共カ）載二
說、就中故殿（頼忠）下被注云、季御讀經者、以之爲恒例云々、然而年來猶依被（彼カ）口傳、召苦（宮カ）令奏
侍（れ脫カ）ともかゝ比云し天侍らんに有何事、然而ゝも不思侍、慮外所爲、奇思侍者、余（實資）答云、故殿（實頼）納筥被
奏、先日依其例被奏、而後度更改、返給史令申文、以後度可爲善歟者、申歟（文カ）故殿只納筥
被奏者也、東宮（春）亮（屬カ）忠信（宇治）申云、明日御讀經（結脫カ）願、可參入者、稱所勞、

〔小記目錄〕四　季御讀經事

同二年（寛仁）三月十六日、季御讀經始事、
同十八（マヽ）日、季御讀經定事、僧名下辨官事、

〔小記目錄〕九　佛事上　臨時御讀經事　付院宮御讀經
○九　條家本

寛仁二年三月十二日、補御讀經闕請事、
同月廿日、御讀經結願事、
同日、奏御讀經卷數儀事、

〔日本紀略〕後一條院　三月

十六日、己酉、季御讀經始、

〔年中行事祕抄〕三月

前後齋有無事
○中略、石清水臨時祭ノ前後齋ノ有無ヲ勘ヘシムルコトニカヽル、承安三年三月十四日ノ條ニ收ム、

石清水臨時祭ノ前日ニ佛事アリ

師尚(中原)申云、

寛仁二年三月十二日、被補季御讀經闕請、同十三日、石清水臨時祭也、○本月十三日ノ第一條參看、下略、

〔參考〕

〔北山抄〕六臨時御讀經事　○前田家本　畢日、結願後、大臣著陣座、○中略大辨著南座、目大臣、々々小揖、即史奉卷數、上卿見了、留前、召筥入之、令殿上辨若藏人奏、返給々外記、或見了返給、仰申給、其儀如申文、史付内侍奏之、季御讀經以之爲恒例云々、

六萬九千三百餘燈法華經ノ文字ニ充ツ

行圓、行願寺ニ於テ、萬燈會ヲ修ス、

〔日本紀略〕後一條院　三月

十六日、己酉、○中略是日、皮聖人(入ィナシ)、名行圓、於建立寺、號行願寺、始修六萬九千三百餘燈事、充法華經文字、

參詣ノ人多シ

〔小右記〕三月

廿四日、丁巳、○中略(藤原資平)宰相來、臨昏向行願寺、奉拜萬燈會、少時歸來云、上下成市者、

行圓行願寺ニ於テ四部講ヲ行フ

○行願寺ハ堂前マデ車ニ乘ルヲ得

法華經及ビ塔各八萬四千書寫造立ノ願

○行圓、四部講ヲ行フコト、便宜左ニ合敍ス、

〔小右記〕○前田家本　閏四月

九日、辛丑、行圓仙、從去五日、行四部講、今明當俗日、仍宰相同車、詣行願寺、資(藤原)高(藤原)・資賴(藤原)・資基(宰相童子)、等相從、乍乘車到堂前、雖恐罪報、彼寺例也、即遇行圓仙結緣、即退歸、欲書寫八萬四千部法花經、造立八萬四千堂塔(脫アルカ)之願、各令書寫一部、來月可奉供養者、已有期日、令書記了、未有參會之人、

四部講ハ僧尼男女各二日ニ分ツ

五月

廿二日、癸未、○中略

法華經二部奉送行願寺、一部余新、一部小(少)女新(藤原實資)、四部講始自昨日、廿一・二日法師、廿三・四日尼、

廿五・六日俗、廿七・八日女、

廿六日、丁亥、未刻許、宰相同車、向行願寺、乍車奉拜、此間講師說經、然而其程甚遠、仍即退歸、只爲結緣、昨今俗日也、資賴・資高別車相從、余經幷少女經等先日奉送了、各法華經一部、

藤原實資等ノ參詣

十八日、辛亥、盜、右大臣藤原公季ノ厩ニ入ル、

〔小右記〕三月

検非違使容疑者ヲ捕フ

十九日、壬子、○中略去夜盗到右府（藤原公季）閑院、廐、執櫪馬持在（去カ）、依此事、使官人等分手尋求、捕嫌疑者云々、奸上達部櫪馬、往古不聞、可謂亂代、

二十二日、乙卯、攝政内大臣藤原頼通、春日社ニ詣ス、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　二月

十三日、丁丑、○中略（藤原頼通）攝政來命云、參春日・山階（興福寺）寺日近、有不堪氣色、爲之如何、命（答イ）、延日參宜歟、

參詣ノ期ヲ延ス

十四日、戊寅、從攝政許、以章信（藤原）、有參春日（參春日在イ）問、三月廿五日者、返事云、能程也、先々多詣（三月詣イ）三月、

三月

廿日、癸丑、天陰、不雨降、攝政來見馬、點馳馬・隨身等、

廿二日、乙卯、寅初許、攝政被來、只今詣春日者、天晴、

廿四日、丁巳、○中略政攝被來云、（廿一日）二日午時許着佐保殿、酉初許詣社頭、此間微雨時々降、舞間・供神物間等無雨降、夜終神遊、神馬一疋奉神云々、（廿三日）三日雨降、着馬場殿如常、先（如）日如定、寺（先日定イ）（マヽ）賜爵、依家司申、○以上、陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

興福寺ノ衆徒ノ濫行ニ及リ別當ニ依ビ權ヒ引出物ヲ與ヘズ

追捕使

（裏書）廿四日、賜祿各有差、抑林懐・扶公等不引物（出脱カ）、是二日（廿二日）佐保殿遣爲令裝束爲時宿禰（豐原）・頼祐（藤原）朝臣等申云、今朝御裝束奉仕間、殿領（預）男一人不參、令召、申不候由、仍又召遣、使男法師一人隨身來、申云、領（預）男家侍法師召云々、仰云、無仰以事召法師、極無便事、早歸遣了、後大童子六七許來、一人領（預）男付事候、搦打侍、問案内、又法師五六人許爲時等爲施言（放カ）申奇事申、問案内、申云、林懐使來、寺法師令召事極無便、其使者搦來者と云て、上廊上申施言（放カ）時、件召法師無事早歸參と申、仍法師等歸去後、以追補（捕）使正滿、林懐許示内案、返事云、其下手者早可送と云、無便事等申云々、其後又法師二人來申云、以正滿所示下手者早可被送、大愁也云々、彼間殿（マヽ）行非可申云々、仍三日（廿三日）無着馬場思侍わしあと、源大納言（後賢）ゐと乃尚可着由相示侍わしか着侍（は脱カ）わ云々、林懐所爲甚不當、後々有事、可成戒也云々示者、如聞奇事也、又々能實正聞定、可戒者也、件人自本非平人者也、○中略入夜時爲來、問案内、申件便無加事、只如申攝政殿、其事非可申盡、須件法師・童部等隨能不知後召戒、而方々思給事侍、以無事爲前と思、只申案内也云々、

〔小右記〕三月

○上略、コノ條、日附及ビ首文闕ク、七日庚子條ノ後、十三日丙午條ノ前ニ介在ス、首附ニ「季御讀經定事子細」トアリ、攝政廿一日有被參春日、仍興福

寺僧綱已下不可參上歟、大僧都林懐・少僧都扶久皆寺司、亦仍不可參上歟、〇下略、全文ハ本月十六日ノ第一條ニ收ム、

廿二日、乙卯、攝政初度今曉參春日御社、余厩馬右大辨朝經・右中辨定頼借用、右大辨者子少持誠任料者、

廿三日、丙辰、今夜々半許、攝政自春日入京、昨今兩日風雨、事煩尤多、威儀虧損云々、御共卿相源大納言俊賢・左大將敎通・源中納言經房・新中納言能信・右衞門督實成・二位宰相兼隆・左大辨道方・左兵衞督頼定・右兵衞督公信・右大辨朝經、衞府相卿皆有權隨身、大將隨身馬寮、自參也時、可具馬寮歟、此事一日位四條大納言御許被示送事也、彼大納言案如下官、然而聟公不承引歟、

廿四日、丁巳、式云、於佐保殿、攝政忠馬於源大納言、々々卽與藥師寺別當輔靜云々、又於宇治志大將云々、攝政未被佐保殿之旨、前武藏守爲時與山階寺所司有鬪亂、爲時先向佐保殿、今裝束之間、宿院別當藤原重時□假屋、不鋪設裝束、隱籠山階寺下所宅、爲時召遣之間、逃隱不應召、仍搦取宅主法師持來、寺家法師・童子六七十人許、到佐保殿、四馬辱爲時、次及濫吹、爲時無所陳、忽令拷搦所司公使者、奇事於使者濫吹所爲歟、寺家雜人見其事、有和氣退歸、未聞之事等也、別當林懐依所司愁差遣雜人云々、權別當扶云々公令裝束馬場之間、不白寺家、以中安令加制止、今依此事、攝政不與引出物於兩僧都云々、後日、林懐僧都云、寺家方聲師登美助樹、年八十有餘、於馬場敍位五位下之由、仰右少辨資業、令傳大納言俊賢、々々仰左近將監光高、々々者助樹因緣、助樹不堪行步、被扶人進出拜禮者、

〔左經記〕二月

五日、己巳、〇中略今夜、於御宿所、被定春日詣事等、

〔日本紀略〕後一條院三月

廿二日、乙卯、攝政內大臣被參春日社、

〇衆徒ノ濫行ニ依リ、興福寺別當林懐ノ釐務ヲ停ムルコト、四月三日ノ第一條ニ見ユ、

大納言藤原實資ノ姉名闕ク、卒ス、

〔小右記〕三月

攝政初度ノ參詣

風雨ニ依リテ威儀ヲ損ズ

追從ノ公卿

頼通馬ヲ源俊賢等ニ與フ

豐原爲時佐保殿ヲ裝束セントスルニ宿院別當ニ事ヲ從ハズシテ興福寺ノ僧ノ家ニ下司ノ隱ルヲ爲時下司僧ヲ勾引スルニ依リ衆徒

爲時ニ濫行ヲ加フ

興福寺ノ方磬師登美助樹ヲ從五位下ニ敍ス

定

腫物
諸僧ノ看病

十九日、壬子、○中略、藤原實資家寢殿等ノ立柱上棟ノコトニカ、ル、年末雜載社會ノ條ニ收ム、申尅許、内供(良圓)自天台來(延暦寺)、爲訪申老(實資)
姉(腫)尼種物、證源師云、今日見瘡體可難治歟、尼君爲避犯土今曉渡宰相宅(藤原資平)、定延師自播(磨)万歸來
云々、差惟光呼、怙(姑カ)來、含子細奉尼君御許、内供云、振苦給者、定延告可被慎由、○中略
黄耆帖

實資具平親王御作ノ貼藥ヲ求メテコレヲ送ル

黄耆帖故中務(貞平親王)宮所被作、在被(彼カ)邊歟、示達左兵衛(源頼定)督許、有可案内之報、
廿日、癸丑、早旦、從左兵衛督許送黄耆帖、卽奉尼君御許、内供來云、去夜頗休息、苦痛少
減、然而不可憑思、此病以無告病(苦痛カ)不可謂平愈(癒)云々、可用石治・蛭喰云々、○中略修法間、致
信(マヽ)塾内供云々、尼公悉似可被慎者、又送連錢帖云々、件帖定延所作云々、

定延作ノ連錢帖

廿二日、乙卯、○中略侍醫(和氣)相成至西殿(實資姉)、歸來云、已不治、至今可在三寶冥助、醫療不可及
侍醫和氣相成不治ヲ告グ

者、未時許、尼君已(亡カ)逝、春秋六十九、今日依衰日、爲不知、但内供在其處、以彼所令給
年六十九

實資衰日ナルニ依リ葬事ニ關ラズ

也、既有難憑之氣色、仍昨日召陰陽師笠善任、兼仰事由、今日内供召仰雜事云々、不記
子細、宰相・左中辨(藤原經通)等來、

〔小右記〕○前田家本　四月

一日、甲子、○中略
四條大納(藤原公任)言重問送云、尼君假汝可請姉假者、○請姉ノ二字、原ト闕ク、京都御所東山御文庫本ヲ以テ補塡ス、吾可請姑假歟、

藤原公任服假ニツキテ實資ニ問フ

姉ハ實資ト共ニ祖父藤原實賴ノ戸ニ入ル

昨日於大殿(藤原道長)上達部問此事、尼君入故殿(藤原實賴)御戸之由有消息、仍可請姑假者、彼是云、女者入
戸乎者、答何不入乎、余(藤原實資)答云、先日申入故殿御戸之由了、而重有此問、若被疑慮歟、太
奇々々、仍下官幷尼君入故殿御戸之由、有正筆御□、奉見彼御書、又見御處分文、報云、專
無□者、返送故殿御筆書、被付御帳之仰書之寫給也、

實賴自筆ノ證書

三日、丙寅、今夜西殿移般若寺邊、作屋假納、其事内供良圓一向行之、
八日、辛未、○中略昨日直物事等○四月七日ノ第二條參看、問遣大外記文義(小野)朝臣、○中略右大臣(藤原公季)承引(行カ)直
物等事云々、可有故尼君假□(歟カ)、尼君入故殿御戸、右府者九条丞相(藤原師輔)子也、可謂從父姉歟、
十一日、甲戌、○中略呼懷(源)信朝臣問大殿被惱案内、○中略、藤原道長ノ病ノコトニカカル、四月九日ノ第二條ニ收ム、依假間
不參由、有便可洩事相含訖、就中依未著服、不調鈍色裝束、有如此之障不參由等也、

般若寺ノ邊ニ葬ル

十三日、丙子、請姉喪假、廿日、書樣、請假廿箇日、右依姉喪所請如件、年月日、按察大納言(藤原)齊信、使侍從經任(藤原)被訪
尼君事、次云、故老堂入故殿御戸、亦故老尼(藤原敦敏女カ)同入御戸、昨日四條大納言公任、被談自假事、
件假案内先日問送下官、卽見送故殿正筆御書尼君入御戸文具前日記、者、今倩案可請姨假、日來更不
覺寤、執行齋宮事、○下略、藤原齊信、齋宮行事ヲ辭スルコトニカ、ル、四月十四日ノ條ニ收ム、

實資姉ノ喪ノ請假文ヲ上ル

藤原齊信己ノ姨ニ當ルコトヲ忘失ス

「戌刻、出北門著帶、」(頭書)

著服

既ニ逆修ヲ終ヘタレドナホ佛事ヲ營ム

廿七日、庚寅、故居君（尼カ）小佛事於西殿修之、
余調尼裝束、今日無忌之日、仍令修之、逆修法事被修早了、沒後更不可修之由、度々被示、
然而默而依不可銷忌景、內供良圓令圖佛養（供脫カ）、如寫經云々、〇中略
尼君服小女可著、仍今日申剋於北門外令著帶、余同車、

七々日佛事

閏四月
十一日、癸卯、今日故尼君七々日、依衰日不口入、內供以教圓大德令釋經云々、設小僧
供云々、姫君與少布施云々、內供來云、今夕登山者、

實資ノ除服

五月
廿一日、壬午、早朝宰相來云、今日可除服者、小（少）時退去、巳剋出河頭除服、給公兼宿禰
鈍色直衣・指貫等、依爲解除師、

〔御堂關白記〕〇陽明文庫所藏　四月
十二日、乙亥、〇中略　按察大納言云、右大將（實資）妹（姉カ）假可有姑、是彼清信（實賴）公養子也、仍四條大納
言甚（其イ）假如此云々、〇陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕〇九條家本　永祚元年三月

室町殿ノ藤原忠平ノ玉帶ヲ傳領シテ實ニ入ル

二日、癸未、室町殿（實資姉）白玉隱文巡方帶（藤原忠平）貞信公御帶、故殿（實賴）傳給之御帶也、年來在永賴（藤原）朝臣許、今日出取了、
置貫百貫之、又爲功德被致千石、卽辨其直所令留也、

實資請出ス

四月
三日、癸丑、早旦詣室町、先年室町尼君鑄造銀阿弥陀佛・脇侍二躰、書寫十部法花經、
〇中略　三部者奉爲二親及故太相國（藤原齊敏、同尹文女）、〇中略　殊發其願所鑄造・書寫也、〇下略、全文ハ永祚元年年末雜載、諸家ノ條ニ收ム、兄藤原懷遠、後ニ懷平、室町第ニ於テ、兩親ノ爲メニ佛事ヲ修スルコト、天元五年年末雜載、諸家ノ條ニ見ユ、

室町尼君兩親及ビ養父ノ爲メニ銀佛寫經ヲ供養ス

〔小右記〕〇前田家本　寛弘二年二月
十日、戊子、〇中略　詣町尻殿見辨腹小童（觀藥）、小（少）時歸、

町尻殿

四月
十四日、辛卯、〇中略　今夜亥剋、尼君始渡給西宅、本是厩地、相替東地所奉、御前高器物・
女房垸飯令調奉了、
十七日、甲午、〇中略　辨腹小童（觀藥）、自西殿送給也、卽見返送、入夜詣西殿、深更歸、〇實資、小兒ヲ見ントシテ室町ニ赴クコト、寛和元年年末雜載、諸家ノ條ニ見ユ、

西殿ノ宅ニ移ル

〔大貳高遠集〕〇圓寮本

西殿實資ノ子ヲ置ク

兄藤原高遠ニ菊ヲ送ル

むろまちとのより、きくのうつろへるをおりてたふとて、小貳（少）のあまきみに、

秋のつゆかたみとをきしはなゝれときみますやとにうつろはすかな

返

うつらふにつけてそおもふきくのはなこゝろのほとの色に見ゆれは

○實資、室町ニ赴クコト、天元五年・永觀二年・寛和元年・永延元年・永祚元年ノ各年年末雜載、諸家ノ條ニ、實資ノ室、室町ニ渡ルコト、永祚元年及ビ正暦元年ノ年末雜載、諸家ノ條ニ、實資、室町第ノコトニ就キテ、源重光ト交渉スルコト、正暦四年年末雜載、諸家ノ條ニ、實資ノ姉、病ムコト、永祚元年年末雜載、諸家ノ條ニ、太皇太后昌子内親王ノ御書ヲ賜ルコト、長保元年十月二十五日ノ第一條ニ、實資ノ年分經供養ニ加ハリテ寫經スルコト、長和四年年末雜載、宗教ノ條ニ、盗、西殿ニ入ルコト、同ジク社會ノ條ニ見ユ、

御脛ニ熱物アリ

二十六日、己未、東宮御惱、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　三月

廿六日、己未、東宮（敦良親王）御脛有小熱給（イナシ）物、仍召醫師問案内、殊事不御座者、若暫惱給歟申、

雄黄等ヲ付ク

以雄黄・牛失（矢イ）等奉付之、入夜退出、女方（房）同之、（源倫子）

廿七日、庚申、參内、東宮熱物今日頗宜御座、退出、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

二十八日、辛酉、太皇太后宮所充、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　三月

廿八日、辛酉、○中略　太皇太后宮（藤原彰子）行所充云（云イナシ）、大夫參入者、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、（源俊賢）

二十九日、壬戌、前太政大臣藤原道長、公卿ヲ隨ヘテ、白河邊ニ遊ブ、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　三月

廿九日、壬戌、攝政（藤原頼通）被來間、中宮大夫・源大納言（俊賢）・左大將（藤原教通）・新中納言（藤原能信）等來會、翫庭前櫻花、相示可見花由（イ）、可見花由相示、欲出、按察大納言（藤原齊信）來會、殿（上人イアリ）十許來、於花下上鞠後、行大白河（大イナシ）・小白河等、猶不興盡（興不盡イ）、從此乘馬行雲林院、返來、以能花二（一イ）枝、太皇太后宮（藤原彰子）・尚侍方（藤原威子）來（來イナシ）、以朝任送奉之、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、（源）

藤原頼通等參會ス

先ヅ庭前ノ櫻花ヲ賞シ蹴鞠ヲ行フ

白河ヨリ更ニ雲林院ニ至ル

太皇太后等ニ花枝ヲ上ル

〔左經記〕三月

廿九日、大殿（藤原道長）・攝政殿并他卿相共歷覽東山邊云々、

〔權中納言定頼卿集　異本〕

藤原教通白河ニ遊ブ

寛仁二年二月、雪のいみしくふるに、大將(教通カ)白川におはして、馬にのりて山つらをゝふに、たるひのつたにかゝりて、はたのやうなるをとりて、藤中將にいふ、しら糸のはたのかゝると見えつるはきしの氷のむすふ成けり

○二月、藤原教通、白河ニ遊ブコト、便宜合敍ス、

正月以降ノ降雪

是春、寒氣甚シク、牛馬ノ斃死スルモノ多シ、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　正月

十一日、乙巳、○中略　雪下、

十四日、戊申、雪降、

十五日、己酉、雪降五寸許、

廿三日、丁巳、○中略、藤原頼通ノ大饗ノコトニカヽル、正月二十三日ノ條ニ收ム、此日終日雪降無晴時、○中略、同上、立樂間雪止云々、

廿四日、戊午、雪降三寸許、

卅日、甲子、○中略　今朝雪降、

二月

一日、乙丑、雪降、

三日、丁卯、雪降一寸許、

五日、己巳、雪下二寸許、終日、〃〃〃

七日、辛未、朝間雪降、

八日、壬申、朝間雪降、午上上後雨下、去月從十日許連々雪降、風又烈、〃〃

軒ノ氷柱數尺ニ及ブ

十二日、丙子、○中略日來風雪無晴日、簷垂氷二三尺及四五無間、年來未如此事、從正月十五雪未盡、

寒氣稍緩ム

十四日、戊寅、○中略昨日頗似春、

廿五日、己丑、○中略雪時々少々降、

三月

二日、乙未、雪在屋上、其後雨相加下、

四月

四月ニ入リテ櫻花猶盛リナリ

一日、甲子、天晴、○中略昨今日間、櫻花猶盛開、○藤原道長等、櫻花ヲ賞シテ白河ニ遊ブコト、三月二十九日ノ條ニ見ユ、年來之間、無及四月時、若是二月間寒氣盛、依氷雪烈歟、此二月・三月間牛馬多以斃、京并外國如此云々、是又依天寒云々、

〔左經記〕二月

十二日、時々降雪、參大殿（藤原道長）、自去年以後、連日雪下、宿雪多積、寒氣無障、屋妻等垂氷毎夜一二尺、爲希有記之、

十四日、戊寅、○中略昨今纔和暖、氷雪漸解、

四月 小盡 甲子朔

一日、甲子、旬平座、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

一日、甲子、天晴、○中略旬、無御出、是御元服後、〔依イアリ〕○御元服ノコト、正月三日ノ條ニ見ユ、未出旬、而日依不宜也、〔依イナシ〕○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕○前田家本　四月

一日、甲子、將曹正方（紀）云、今日旬不可聞食由□□俄被仰之者、問不可出御之案内、申云、不承依何事不可聞食之由者、〔夜部カ〕

俄ニ出御ヲ停ム

○中略

資業（藤原）云、旬停止、昨日上達部被申云、御元服之後、未聞食旬、當凶會日不可出御□、□〔著カ〕停止者、

御元服後初度ナルニ凶會日ニ當ルニ依ル

〔日本紀略〕後一條院　四月一日、甲子、平座、見參、

右近衛少將藤原兼房、尚侍藤原威子ノ直廬ニ於テ、藏人頭藤原定頼ヲ凌辱ス、仍リテ、前太政大臣藤原道長、之ヲ勘當ス、

殿上人ノ群飲ノ間

兼房定頼ヲ面罵シテ座前ノ菓子ヲ足蹴ニスル定頼宿所ニ逃ル投ジ宿所ニ石ヲ投ジ殿上ニ罵聲ヲ放ツ藤原實定ノ無氣力ヲ難ズ

道長父藤原兼隆ニ命ジテ兼房ノ參内ヲ停メシム

宥免

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

二日、乙丑、○中略　參太内、候宿、人々云、夜部殿上人來尚侍御方、數巡間、兼房爲定頼頭并人々○下闕ク、

三日、丙寅、從内退出、

〔小右記〕○前田家本　四月

二日、乙丑、○中略

或云、昨日藏人頭定頼及侍臣數多會尚侍直廬、群飲之間、兼房朝臣罵辱定頼、不可敢云、以足蹴散定頼前菓子、右少辨資業云、事太狼藉、可被起退者、仍定頼起座、次侍從悉起、兼房欲取定頼冠、仍定頼逃走入宿所、以石打宿所如雨、其後兼房昇殿上、彌以放罵辱之詞云々、面罵藏人頭未聞事也、雲上之威重不如藏人頭者也、雖驚罵者之藍吹、被罵之人和甚哉、

今日兼隆宰相參大殿、子兼房事被命云々、又不可令參内之由被命宰相云々、兼房彼日所爲如狂者云々、

廿一日、甲申、○中略、前太政大臣藤原道長、賀茂社ニ詣スルコトニカヽル、本月二十一日ノ條ニ收ム、今日兼房朝臣候大殿御共、兼房者吉朝臣罵辱藏人頭定頼、依其事大殿勘當不令參内、而今日從、被優免歟、

宣旨ヲ下ス

藤原頼通春日詣ノ際衆徒濫行ノ責ヲ問フ

林懐藤原實資ニ執成ヲ請フ

三日、丙寅、興福寺別當大僧都林懐ノ釐務ヲ停ム、尋デ、之ヲ宥ス、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

三日、丙寅、○中略　源大納言（後賢）・右大辨（藤原朝經）等來云、興福寺別當大僧林懐（都イアリ）停理務長宣下者（者イアリ）、○藤氏長者ハ藤原頼通ナリ、是指春日々濫事也、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕○前田家本　四月

三日、丙寅、○中略

今日興福寺別當大僧都林懐停寺務之宣旨下之云々、因佐保殿濫行事云々、長者最初參春日之日有此濫吹、隨又被停別當釐務、不吉事歟、

六日、己巳、○中略

臨昏山階（興福寺）別當僧都來云、被停釐務之宣旨今日持來、右大辨朝經傳宣、可宜之樣可漏達也、此如之事、中人所申自被信用者也思慮所來觸也者、報答依服親不可出仕、○藤原實資、姉ノ服ヲ著スルコト、三月二十二日ノ第二條ニ見ユ、隨亦不可謁兩殿（藤原道長・頼通）、若相逢近習人、隨狀可含之由、

六月

十二日、癸卯、興福寺權別當僧都（扶公）來談次云、去七日午剋、入興福寺、頻有此恠（マヽ）者、

權別當扶公入寺ス

十六日、丁未、大納言（藤原公任）被示雜事書端書云、山階寺召進堂達僧被免、宣旨書、依公家被免輕犯者免之、○炎旱ニ依リテ、左右獄ノ輕犯者ヲ赦スコト、六月四日ノ條ニ見ユ、但所行不輕、解却堂達云々、頗難得意、付別當僧都林懷含怨下向云々、日來堂達法師於勸學院被問之由云々、（後カ）彼聞、依非下手人、無問被免遣也云々、今有此旨、果而有實、

興福寺ヨリ捕進ノ僧堂達放免ス

勸學院ニ於テ糾問スル件ノ僧ハ下手人ニ非ズトノ說アリ

廿五日、丙辰、○中略

右大辨朝（經）任示他事次云、今日權大僧都林懷如舊可知寺務之由、被下宣旨了者、

再ビ寺務ヲ行ハシム

〔日本紀略〕後一條院　四月

三日、丙寅、山階寺別當大僧都林懷被停釐務、去月廿二日攝政（頼通）被參春日社之間、於佐保殿有鬪亂事之故也、

○興福寺衆徒、攝政藤原頼通ノ春日詣ニ際シテ、濫行スルコト、三月二十二日ノ第一條ニ見ユ、

右近衛府、伊豫守源頼光ガ同府大粮米使ヲ抑留スル由ヲ奏ス、仍リテ、頼光ニ命ジテ、ソノ拘留ヲ解カシム、

〔小右記〕○前田家本　四月

一日、甲子、○中略

招藏人右少辨資業（藤原）、含付伊与大粮米百五□（千カ）石、新司頼光（源）、乍在京未着任、下聽宣□官人令檢封事、但以府（右近衛府）奏狀可奏由、同相示□（了カ）、且爲令知事情、奏狀可作之由、先日仰正方（紀）了、追可送資業許、

頼光京ニ在リテ大粮米百五十石ヲ檢封セシム

大將藤原實資藏人辨ニ事情ヲ內示ス

二日、乙丑、府奏持來、令取捨返賜正方、仰可附資業朝臣之由、請印之戴之（マヽ）文也、令加持（將）付由仰之、

奏狀ニ中將幷ニ六位官人加署ス

三日、丙寅、○中略　正方持來府奏、加中將兼住（經）署（藤原）、○右近衛府、中將藤原兼經ヲシテ、粮所ノ事ヲ行ハシムルコト、元年八月九日ノ第二條ニ見ユ、仰加六位官人一兩署、早可付資業朝臣之由、

攝政藤原頼通拘留ヲ解クベキ由ヲ命ズ

五日、戊辰、○中略

將曹正方申云、府奏一昨付右少辨資業、今朝取案內、資業云、早可令免上之由、有攝錄（籙）命、隨則仰遣伊与守頼光、卽申可免由了、向彼朝臣所可案內者、罷向問事由、頼光他行、問目代伍倫朝臣、申云、今明不宜日也、明後日可參來者、可奉免文歟、

八日、辛未、○中略

伊与大粮使新司拘留事、依宣旨可免上之廳宣正方持來、使姓相誤之上、不載精代車力、仍返遣國司所、

伊豫國廳宣ヲ府ニ渡ス文面錯誤ニ依リアルニ之ヲ返却ス

四日、丁卯、廣瀨・龍田祭、

〔日本紀略〕後一條院　四月

四日、丁卯、廣瀨・龍田祭、

七日、庚午、擬階奏、

〔日本紀略〕後一條院　四月

七日、庚午、擬階奏、

〔小右記〕○前田家本　四月

一日、甲子、○中略

擬階奏持來、不加署、因假間、○藤原實資、姉ノ服ヲ著スルコト、三月二十二日ノ第二條ニ見ユ、

藤原實資服忌ニヨリ加署セズ

直物、小除目、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　三月

廿八日、辛酉、從夜雨降終日、直物云々、攝政（藤原頼通）物忌候別納者、今日直物兩大臣（藤原顯光・同公季）不參延引者、從

左右大臣ノ不參ニ依リテ延引ス

攝政以定良（源）示送此由、又云、以大納言令行如何云々、返事云、近代大納言不行直物、除書日依非近座歟、以後日以大臣令行宜歟、

藤原頼通大納言ヲ以テ直物ヲ行ハシムルコトノ可否ヲ藤原道長ニ問フ

四月

七日、庚午、此日直物、右大臣（公季）行之、有左大臣（有イナシ）顯光不參、諸衛佐兩三・民部丞等任、又叙人有（有叙人イ）

兩三、是諸宮未給云々、入夜參太（大イ）內、女方（源倫子）同（房）之、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

上卿右大臣藤原公季衛府佐等ヲ任ズ

〔小右記〕三月

四日、丁酉、○中略

左中辨經通（藤原）云、資頼（藤原）成功事、今日申攝政、命云、可奉申文也、

藤原資頼成功申文ヲ上ル

〔小右記〕○前田家本　四月

七日、庚午、今日直物云々、

八日、辛未、○中略　昨日直物事等、問遣大外記文義（小野）朝臣、直物次有除目、○中略　後聞、除目次有敍位云々、右大臣承引（行カ）直物等事云々、可有故尼君假□（歟カ）、○藤原實資ノ姉卒スルコト、三月二十二日ノ第二條ニ見ユ、尼君入故殿（藤原實頼）御戸、右府者九条丞相（藤原師輔）子也、可謂從父姉歟、

敍位

〔左經記〕三月

廿八日、辛酉、参大殿(藤原道長)、次参内、今日可有直物、而左府忽被申障、仍令(以カ)藏人定良只今参入可被行直物之由、右府御許ニ有摂政御消息、然而同有御障、仍直物延引云々、

左近衛陣ニ於テ行フ位記請印

四月

七日、庚子、右府被参著左仗、有直物事、此次有小除目幷敍位、十七日、庚辰、○中略、結政ノコトニカヽル、本月十日ノ第二條ニ收ム、次参陣、源大納言(後賢)被参左仗、被行位祿・位記請印事、

〔日本紀略〕後一條院　四月

七日、庚午、○中略今日直物、

藤原定頼ヲ兼ネテ近江權守ニ任ズ

〔公卿補任〕七寛仁四年　参議正四位下藤定頼、廿(廿六イ)四月七日兼近江權守、○辨官補任・中古歌仙三十六人傳同ジ、

太皇太后宮御給

〔公卿補任〕七長暦三年　参議正四位下同(藤)經輔、卅四、寛仁二年四月七日敍從五位下、太皇太后(藤原彰子)宮御給、

八日、辛未、灌佛、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

御導師日觀

藤原實資服中ナルヲ以テ布施ヲ獻ラズ

實資家灌佛布施ノ上書ノ書キ樣

八日、辛未、御灌佛如常、御導師日觀候、從尚侍(方獻)布施物、○陽明文庫所藏古寫本、方ヲ御方ニ作ル、御手水南間女方(房)取之、太皇大(太)后宮(藤原彰子)御御手水間、太后御方朝(源)任朝臣鳴鉢、其聲甚大也、

〔小右記〕○前田家本　四月

八日、辛未、内御灌佛、依服親假間、○藤原實資、姉ノ服ヲ著スルコト、三月二十二日ノ第二條ニ見ユ、不奉布施、宅灌佛如例、○中略左兵衛督頼定(源)、問送灌佛布施上書銘事、參議書名、納言已上書官號、古傳如此、答對了、

〔殿暦〕天仁元年四月

八日、戊子、天晴、○中略今日御灌佛也、○中略

事了參院(白河法皇)、其儀如内裏、○中略余布施紙六帖(藤原忠實)、以同紙裏、其上其名(書カ)、書内大臣、寛仁元・二、宇治殿(藤原頼通)爲攝政時、内大臣と被

藏人頭攝政ノ布施ヲ執ルトノ説

書付、彼例今度用也、

〔中右記〕天仁元年四月

八日、戊子、天晴、内○中略皆有御灌佛云々、○中略

裏書後聞、民部卿(源俊明)談云、御灌佛之間殿(忠實)下令候給、件布施藏人頭(藤原)爲房可取進殿下之由、令存給之處、爲房朝臣遂不取、以藏人辨顯隆(藤原)令取進也、○中略

此事相尋舊例之處、去寛仁二年御灌佛之日、宇治殿爲攝政令参給之時、頭中將(マヽ)公成(ヽ)

○寛仁二年ニハ、頭中將ナシ、藤原公成ハ當時右近衛中將ナリ、取布施進殿下之由、見故經頼(源)左大辨記云々、然者藏人頭舊例皆進也、但爲房又有所見歟、可尋知事也、

九日、壬申、平野祭、

[日本紀略] 後一條院　四月

九日、壬申、平野祭、

前太政大臣藤原道長、病ム、

[御堂關白記] ○陽明文庫所藏　四月

六日、己巳、○中略　參內・中宮(藤原妍子)、日來熱發動、無他行、而依宜、是以身令冷也、

九日、壬申、從內參中宮、○中略　參院(小一條院敦明)、又參內、与女方(房)參中宮(源倫子)、從亥時許惱胸病甚重、丑時許頗宜、攝政(藤原頼通)他子等皆來、

十日、癸酉、辰時許、与女方(房)從中宮出、後終日有惱事、無其所心神不覺(指事ィ)、不知爲方、○中略、道長、梅宮祭ニ奉幣スルコトニカカル、本月十日ノ第一條ニ收ム、其後入夜請僧等、上達部多來相問、

十一日、甲戌、通夜心神猶不覺、從今朝頗宜、終日雨降、午後深雨、

十二日、乙亥、按大納言(藤原公任)・四條大納言(藤原齊信)・侍從中納言(藤原行成)等來、終日被座、仍心神雖不宜、相合、清談雜事、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

[小右記] ○前田家本　四月

十日、癸酉、○中略

大殿(藤原道長)去夜被惱胸病、雖有平氣猶背尋常、入夜宰相(藤原資平)來云、聊有可云事、向源中納言(經房)許、有大殿重惱給之告、馳參者、思慮余(藤原實資)候近處不申事由如何、仍送書札源納言許、即有返報、彼殿御消息、從去夜所煩難堪者、私問云、只今頗宜云々、

十一日、甲戌、○中略　呼懐(源)信朝臣問大殿被惱案內、從一昨夜、俄於中宮惱胸給、臨曉更平復、昨巳剋許、座給二条沐浴、被奉幣(梅宮祭)、○本月十日ノ第一條參看、依假間○藤原實資ノ姉卒スルコト、三月二十二日ノ第二條ニ見ユ、不參由、有便可洩事相含訖、就中依未著服、不調鈍色裝束、有如此之障不參由等也、

○中略　晚頭冒雨重來、傳彼御消息、頗宜坐者、猶未復尋常歟、

[左經記] 四月

十日、癸酉、早旦參大殿、自夜中有御惱氣云々、○中略　及午後參攝政殿、○中略、攝政內大臣藤原頼通第三度上表ノコトニカカル、本月十日ノ第三條ニ收ム、余(源經頼)入夜歸宅、大殿猶有御惱云々、仍攝政殿令參給、

○道長、病ニ依リテ、法性寺五大堂ニ參籠スルコト、閏四月十六日ノ第二條ニ見ユ、

十日、癸酉、梅宮祭、

〔日本紀略〕後一條院　四月

十日、癸酉、梅宮祭、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

十日、癸酉、○中略　梅宮奉幣、使与陽陰師遣河原令立、

〔小右記〕○前田家本　四月

十一日、甲戌、○中略　呼懐信朝臣(源)問大殿(藤原道長)被惱案内、○本月九日ノ第二條參看、中略、昨巳剋許、座給二条沐浴、被奉幣、

政アリ、

〔左經記〕四月

十日、癸酉、○中略、藤原道長ノ病ノコトニカカル、本月九日ノ第二條ニ收ム、次參結政、右衛門督(藤原實成)被著座之後、權中納言藤原實成、著座スルコト、三月十一日ノ第一條ニ見ユ、始今日被行政、有申文、而中辨已下各申障不參、仍有定、余(源經頼)一人立申文、有儀(議、止カ)上外記法申、申文并請印等了、被著南所、次參陣、右大辨(藤原朝經)被著廳、十七日、庚辰、參結政、

藤原道長奉幣ス

辨一人ノミ申文ニ立ツ

請印

○十七日、結政ノコト、便宜合敍ス、

攝政内大臣藤原頼通、三タビ上表ス、之ヲ聽シ給ハズ、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

十日、癸酉、○中略　攝政(藤原頼通)獻表云々、勅答不被免(許イ)者、此度三度、源大納言(後賢)承勅答、(事イアリ)使公成(藤原)云々、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕○前田家本　四月

十一日、甲戌、昨日攝政上表、第三度、呼懐信朝臣(源)問大殿(藤原道長)被惱案内、○中略、藤原道長ノ病ノコトニカカル、本月九日ノ第二條ニ收ム、攝政上表事、懐信所陳、

〔左經記〕四月

十日、癸酉、○中略　及午後參攝政殿、今日有上表事、作者資業、御使四位少將顯基(源)、入夜有勅答、不免所請、勅使右近權中將公成、主人親進(頼通)中門取勅答、相跪取之、歸入便所之後有催使、使著倚子、主人進庭中拜舞、此間使下候砌、□拜舞之後、撤倚子敷平座、有催使著座、主人取祿授之、使下庭再拜退出、余(源經頼)入夜歸宅、

〔公卿補任〕七　攝政内大臣正二位同(藤)頼通、廿七、四月十日又上表、勅答不許、

表ノ作者藤原資業上表使源顯基

頼通拜舞ス

勅答使藤原公成

表ノ作者第三度ニハ祿ニ預ラズ

〔殿暦〕康和四年十月

七日、戊午、天晴、辰剋許(渡脱カ)東三條、是依第三度上表也、(右大臣藤原忠實)○中略作者敦基(藤原)、不賜祿、是以前二度預祿之故也、○右大臣藤原忠實初度上表ノコト、康和四年七月五日ノ條ニ、第二度上表ノコト、同年九月十七日ノ第二條ニ見ユ、故宇治殿(頼通)御時如此、○宇治殿御時トハ、是日ノ上表ヲ指シタルモノナリヤ否ヤ、必シモ詳ナラズト雖、姑ク玆ニ掲グ、

○頼通、上表スルコト、元年十二月二十七日ノ第三條ニ、再ビ上表スルコト、本年二月二十四日ノ條ニ見ユ、

十三日、丙子、吉田祭、

〔日本紀略〕後一條院　四月

十三日、丙子、吉田祭、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

十三日、丙子、出東河奉幣、

藤原道長ノ奉幣

〔小右記〕○前田家本　閏四月

廿日、壬子、○中略大外記(小野)文義語云、近日公事甚難行、去二(四)月、吉田祭內侍(マヽ)進之、以無實事愁申攝政(藤原頼通)、去月十五日勘問、同廿六日、使部二人被禁獄所、更被下可拘禁之宣旨、未知其由、經十餘个日被免、○下略、奉幣使ヲ催スニ外記ヲ以テセザルコトニカヽル、閏四月十六日ノ第一條ニ收ム、

祭內侍ノ訴ニヨリ使部禁獄セラル

○吉田祭內侍ノ愁訴ニ依リテ、使部ヲ拘禁スルコト、便宜合敍ス、

十四日、丁丑、造宮行事ヲ改替ス、尋デ、新造內裏遷御ノ日ヲ定ム、

外記モ事由ヲ知ラズ

赦免

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

十二日、乙亥、按大納言(藤原公任)・四條大納言(藤原行成)・侍從中納言(藤原齊信)等來、終日被座、仍心神雖不宜、○藤原道長ノ病ノコト、本月九日ノ第二條ニ見ユ、相合、清談雜事、遷宮當滅門(日イアリ)、○本月二十七日ヲ指シテ言ヘルナラン、可忌歟如何、人々云、不知內事、付文(案イアリ)似可忌(也イアリ)者、又々召吉平(安倍)問案內隨申(可イアリ)、按察大納言云、右大將妹(藤原實資姉カ)假

滅門ノ日遷御ノ可否ヲ議ス

行事藤原齊信ノ服假

○藤原實資ノ姉卒スルコト、三月二十二日ノ第二條ニ見ユ、可有姑略○中云々、

安倍吉平滅門ヲ忌マズト申ス

十三日、丙子、○中略召吉平(安倍)問幸(行)行日、○陽明文庫所藏古寫本、行ノ字ノ右傍ニ顚倒符ヲ附ス、申云、先々件滅門日所不忌也、又有勘申遷宮、仰云、先例等可勘申仰由、○有勘申以下十五字、陽明文庫所藏古寫本、勘申遷宮例者仰可勘申先例之由ニ、作攝政(藤原頼通)被來、相示云、按察行幸幷齊宮(齊)行依假申(事イアリ)非可奉仕由、爲之(ヲイアリ)如何、命云、可然定(定可然イ)人可仰也、示云、行幸行事右衞門督(藤原實成)○中略、齋宮行事ヲ改替スルコトニカヽル、八月十九日ノ第一條ニ收ム、云々、

藤原頼通行事ノ改替ニ就キテ同道長ノ指示ヲ仰グ

藤原實成ヲ行事ト爲ス

十四日、丁丑、○中略造宮行事被仰(イナシ)右衞門督云々、

遷御ヲ二十八日ト定ム

十五日、戊寅、○中略　遷事大略廿八日改定、〔宮イアリ〕〔改定廿八日イ〕○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕○前田家本　四月

昭陽舎造營工ノ事故死ヲ祕ス

十三日、丙子、○中略　按察大納言齊信、使侍從經任（藤原）被訪尼君（實姉）事次云、○中略　今日以資業（藤原）朝臣、令申不可行齋宮幷造宮等之由、於攝政訖者、

入夜退候、相公（藤原）通任、來談次云、大和國造昭陽舍工、一日落自舍上大木打壓卽死去、祕藏不漏、諸人同陳此由、○造宮工死スルコト、便宜附載ス、

十四日、丁丑、宰相（藤原資平）來云、遷宮事不定云々、今日卿相兩三於大殿（藤原道長）被議定、是理（平）義朝臣說者、

二十八日ハ道長上東門第ニ移徙ノ豫定日

十五日、戊寅、○中略

遷宮幷大殿御移事等、○藤原道長、新造上東門第ニ移徙スルコト、六月二十八日ノ條ニ見ユ、問達大納（公任）言御許、其報書狀云、

先日前（道長）太相府宣、廿七日滅門、遷宮如何、若是不快、廿八日私移〔徙〕從非無憚、○道長、初メ上東門第ニ移徙ヲ四月二十八日ニ豫定スルコト、六月二十八日ノ條ニ見ユ、彼此被申滅門例、只忌三寶事、他吉事多用之、但如本條者、

可忌萬事、其字不宜、又吉平申、今年公家可愼給火事、去年鹿入新宮、是火事也、○元年十月十六日ノ第一條參看、可愼給之期、今年四・五・六月也、又々能可被定行者、昨日依召參入、此事

滅門ノ字不吉ナリ

吉平ノ勘文滅門ニ入宅ヲ忌ムハ庶人ノ儀

被定、吉平奉勘文、滅門日不可忌之由、可忌入宅之由、雖見本條、是庶人事也、又大禍・滅門先々不被忌之由、過六月遷御太好事也、然而此日以後無日、明年西・坤當御忌、仍成御祈猶可遷御、但滅門日王者庶人無所指、廿八日遷御可無思〔忌カ〕者、大略一定也、私御度彼日有晝時者、其時有行幸、夜時度々〔之カ〕如何者、未被一定、大略如此者、

二十八日宜シ晝間ニ遷御シ夜間ニ道長移徙セバ如何

十六日、己卯、○中略、新造內裏遷御御祈ノ諸社奉幣ノ日コトニカヽル、本月十六日ノ條ニ收ム、造宮事、按察大納言齊信依服不行、仍實成卿行之、

廿七日、庚寅、○中略

（頭書）「滅門」

陰陽寮ヲシテ遷御ノ日ヲ勘ヘシム

〔左經記〕二月

三日、丁卯、參內、按察大納言於左仗召陰陽寮、令遷宮日奏云々、四月廿日、六月（マヽ）

○陰陽寮ヲシテ、新造內裏遷御ノ日ヲ勘ヘシムルコト、便宜合敍ス、造宮行事藤原公任ヲ罷メ、同齊信ヲ以テ之ニ替フルコト、元年六月十九日ノ條ニ、新造內裏遷御ノ無事ヲ祈リテ、八社ニ奉幣スルコト、本月十六日ノ條ニ、遷御アラセラルヽコト、同月二十八日ノ條ニ見ユ、

十五日、戊寅、信濃守源道成、前太政大臣藤原道長ニ馬ヲ獻ズ、尋デ、駿河守源忠重モ馬ヲ獻ズ、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

十五日、戊寅、○中略　信濃守道成（源）獻馬一疋、頗宜馬也、

十八日、辛巳、駿河守忠重（源）獻馬二疋、

十六日、己卯、新造内裏ニ遷御アラセラルベキニ依リテ、大神宮以下ノ八社ニ奉幣使ヲ發遣ス、

〔小右記〕○前田家本　四月

十六日、己卯、今日諸社奉幣使立、告遷宮由之使歟、右衛門督實成（藤原）行之云々、造宮事、

上卿藤原實成トノ説

按察大納言齊信（藤原）依服不行、○本月十四日ノ條參看、仍實成卿行之、

閏四月

廿日、壬子、○中略

大外記文義（小野）語云、○中略、吉田祭ノコトニカヽル、本月十三日ノ條ニ收ム、兩度○今一度ハ、閏四月十六日、祈年穀奉幣ヲ云ヘルナラン、源大納言俊賢、行奉幣吏（使）事、○下略、全文ハ閏四月十六日ノ第一條ニ收ム、

上卿源俊賢

〔左經記〕四月

十六日、己卯、依有還宮被奉幣云々、伊勢・石清水・賀茂上下・松尾・平野・稻荷・大原野・春日、件使々於八省被立云々、上源大納言、

〔日本紀略〕後一條院　四月

十六日、己卯、奉幣八社、依遷宮御祈也、

○新造内裏ニ於テ、仁王經御讀經幷ニ安鎭家國法ヲ修スルコト、三月九日ノ條ニ、新造内裏ニ遷御アラセラルヽコト、本月二十八日ノ條ニ見ユ、

十九日、壬午、賀茂齋院選子内親王（選子内親王）御禊、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

三日、丙寅、○中略　右大將（藤原實資）依服、○藤原實資ノ姉卒スルコト、三月二十二日ノ第二條ニ見ユ、以源大納言（後賢）爲齊院（齊子）行事云々、

藤原實資ノ著服ニヨリテ禊祭行事ヲ源俊賢ニ改ム

十九日、壬午、人々申馬、仍送之、渡狹（挾敷イ）食見物、人々被來、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

物ヲ勘濟ス

〔小右記〕三月

十九日、壬子、○中略

今朝齋院長官光清（源カ）朝臣持來院奏、仰可付辨之由、前安房守時棟（大江）禊祭三年一請物不請院勘畢勘文、稱候文書進官、關加階、可被召取奏ヲ奏スル由

藤原道長見物ス

齊院前安房守大江時棟ガ三年一請物ヲ勘濟ス

ト偽リテ加階ニ預ル由

狀也、

〔小右記〕○前田家本　四月

一日、甲子、○中略資業云、○中略賀茂祭事、大納言俊賢承引□、

八日、辛未、○中略昨日直物事等、○直物ノコト、本月七日ノ第二條ニ見ユ、問遣大外記文義朝臣、○中略又被定御禊前駈、皆注送之、不遑記、

十九日、壬午、今日御禊、臨昏宰相云、密々見物、被催愛子者、

今年禊祭行事大納言俊賢・參議兼隆・權左中辨重尹、後聞、上卿著南座云々、前例不然、須著北座、可謂違失、

〔左經記〕四月

七日、庚子、右府被參著左仗、○中略、直物ノコトニカヽル、本月七日ノ第二條ニ收ム、又被差御禊前駈云々、

〔日本紀略〕後一條院　四月

十九日、壬午、齋院禊、

○賀茂禊祭行事辨ヲ改替スルコト及ビ禊祭料ノコト、元年十一月二十七日ノ條ニ、

前驅ヲ定ム

藤原資平ノ見物

賀茂祭ノコト、本月二十二日ノ條ニ見ユ、

二十日、癸未、御惱、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

廿日、癸未、參太內、御風發給、是日來依召氷也、然無殊事、仍退出、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

御風日頃氷ヲ召シ給フニヨル

二十一日、甲申、前太政大臣藤原道長及ビ攝政內大臣同賴通、賀茂社ニ詣ス、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

四日、丁卯、小雨時々降、從攝政御許被送唐鞍・引馬等具、自來見馬、

六日、己巳、可詣賀參定雜事、停東遊、以音樂可奉、自如常、攝政依調東遊也、

廿一日、甲申、詣賀茂、攝政早朝被渡、同詣、具東遊、東廊儲舞人座、余只具十列、自餘如常、參着社頭、祓後入間、樂人等亂聲、奉幣、攝政又奉幣、各廻馬了、供音樂、各三舞、是我所奉也、次又東遊、是攝政也、

「廿一日、例年奉遊、相借所奉也、又人々饗、例上社儲之、今年在下社、」○陽明文庫所藏古寫

賴通馬具ヲ道長ニ贈ル

雜事定道長ハ音樂ヲ賴通ハ東遊ヲ獻ズ

奉幣

饗ヲ下社ニ儲ク

寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕○前田家本　四月

廿一日、甲申、○中略右衛門督（左）（藤原）頼宗、自女房消息云、今日料大賀茂（道長）殿、参前駈馬二疋不足、極無便事也、返々無便事也、然而思煩令達也、馬若借與乎、須自男方示消息、事極無便、仍密々自女房所達也者、櫪馬三疋皆借人々了、但章信（藤原）朝臣有他馬之由云々、問遣案内、隨彼申從茲可申達由、且示達了、章信報給大殿御馬之由、仍差隨身武晴（荒木）、送左金吾許了、有大悦之返事、左大辨（源道方）先日依借馬今朝遣之、即返送云、上達部此度不騎馬、仍返送者、今日大殿謂大殿、是前摂政也、世號大殿、被参賀茂、其道經（洞）東院東大路、其程咫尺、依少女催、同車見物、未時許被参、乗唐車、御幣、次神寶、納長横、神馬二疋、并十列、次摂政引率上官、御幣・神寶・神馬如大殿、但舞人十人左右近府生以上、著青摺、袴同、此外有松尾走馬二疋、車後陪從發歌笛聲遊行、

追從卿相大納言俊賢（源）太皇太后宮大夫・中納言行成（藤原）侍從・教通（藤原）左大將、・頼宗左衛門督・經房（源）中宮權大夫・能信（藤原）右衛門督・參ー兼隆（藤原）（議）・道方左大辨、・頼定（源）左兵衛督・通任（藤原）修理大夫・朝經（藤原）右大辨、納言以上皆有前駈、衛府卿相有權隨身、左大將有馬寮、獨參之時可具馬寮歟、但參議無權隨身、今日兼房（藤原）

藤原頼宗前驅ノ馬ヲ同實資ニ借ラントス

憚リテ女房ノ消息ヲ送ル

實資見物ス

行列次第

松尾社ノ走馬ヲ具ス

扈從ノ公卿

納言以上ハ前驅アリ

藤原兼房及ビ道長ノ隨身等勘當ヲ免サレテ扈從ス

朝臣候大殿御共、兼房者吉朝臣（告朔日カ）罵辱藏人頭定頼（藤原）、○本月一日ノ第二條參看、依其事大殿勘當、不令參内、而今日從、被優免歟、又大殿隨身等、依罵播万守廣業（藤原）（磨）、追却左府生爲國（秦）・右府生公忠（下毛野）・番長光武（下毛野）・近衛貞安（播磨）、○二月二十六日ノ條參看、而公忠外皆被免勘事、但公忠爲摂政舞人、或云、公忠更不可被召仕、至今只可令從本府事者、公忠濫行張本之故云々、

賴通等道長第ニ於テ料馬ヲ選ブ

公卿ハ乘車

〔左經記〕四月

廿日、參大殿、摂政殿并可然上達部多被參候、頃之召覧所々厩并所飼御馬等、被撰定祭（賀茂）日使々料○本月二十二日ノ條參看、并御物詣舞人等料御馬、

廿一日、甲申、大殿・摂政殿相共令詣賀茂給、其次第、先大殿、神寶、神馬二疋、十列各諸衛官人・内舎人乘之、諸大夫、殿上人、御車後使官人二人、次摂政、神寶、神馬、舞人、左右近將監以下府生以上、諸大夫、史、外記、辨・少納言〇以上四字、當ニ大字ニ作ルベキナラン、御車後使官人二人、次上達部十人（マヽ）、大納言一人・中納言六人・宰相四人（マヽ）、納言各有前駈、上達部皆乘車、於下御社祓所有御祓、次令參御社、有東遊并唐・高麗舞・音樂等、余有憚不參社頭、及晩歸宅、

〔日本紀略〕後一條院　四月

廿一日、甲申、前太政大臣（道長）并摂政内大臣被參賀茂社、

二十二日、乙酉、賀茂祭、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

十四日、丁丑、太皇太后宮賀茂使大進敦親（藤原）有觸穢云々、大夫未不示（源俊賢）（ナイ）此由、

十八日、辛巳、○中略　從廣業（藤原）許使（送イアリ）新褐（褐）布入（入イナシ）、不用物、仍勿（易イ）以他物可用、從酉時許雨下、（忽カ）

廿二日、乙酉、長家（藤原）奉仕近衛府使、二條西對出立如常、無童、雜廿七人（色イアリ）、長二人有中、舞間和琴不持來、仍只拍子、參內、召餝馬・引馬、不覽舞云、（タイアリ）是依晚景云々、（ナイ）与女方（房）（源倫子）

（マヽ）渡狹食（敷）（來イナシ）、來上卿（公イ）等皆來、攝政又同（藤原頼通）、右大臣（藤原公季）被來、

（裏書）「廿二日、爲見長家、近衛門（源明子）御作（レ）狹食渡（敷）、院（小一條院敦明）も渡給め、女車、事了、先院還給、後与女方（房）還來、」

廿三日、丙戌、与女方（房）見物（出）、院還給極遲々、長家還、下人不改裝束、公成（藤原）朝臣・敦親等雜色裝束改（改裝束イ）、是從兼非可改（定カ）是了、爲奇々々、還來入夜、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕○前田家本　四月

六日、己巳、與宰相同車向一條狹敷宅、資高（藤原）領、乍車見之、無垣如道路、迺歸、

十七日、庚辰、密々宰相車見狹敷宅、資賴（藤原）・資高等乘車相從、

廿一日、甲申、早朝沐浴、出河頭解除、依服（○藤原實資ノ姉卒スルコト、三月二十二日ノ條ニ見ユ、不奉幣由也、）

廿二日、乙酉、早旦密々向狹敷、宰相・資賴・資高等相從、宰相子童（ママ）少女・々房等先送（選子內親王）狹敷、酉剋許齋王渡給、次々車等臨暗渡狹敷前、秉燭後歸宅、

內藏寮使助貞、近衛府丈（使）右近中將長宗（家）、今日內御物忌、仍不召御前、以藏人給御衣云々、非御前傳給御衣、未聞事也、傾奇而已、馬寮使右馬助正言、太皇大后（太）宮使大進敦親、右兵衛佐、東宮使亮公成、右中將、次第使代官中務少輔賴淸・右馬允長明、典侍藤原子（美カ）、當帝御乳母、春宮亮惟憲妻（藤原）、典侍前駈小納言（少）惟光（藤原）、未聞見事也（レ）、惟光者惟憲弟也、被催惟憲歟、爲母可無難、其外不可然、上官前駈大臣外未見聞事歟、就中於女房前駈乎、不足言、依大殿（道長）命所爲云々、右衞門權佐章信（藤原）者惟憲聟也、可爲前駈由、又云、大殿無指命云々、（倫子）惟憲懇切相勸、而確固不聞、大殿及北方（倫子）頻被命可前駈之由、果而不承、以廷尉爲前駈、往古又不聞、可謂狂亂事歟、

廿三日、丙戌、近衛府使中將長家神館宿所、上達部訪來云々、近代間有此事、卿相作法不異凡人、會合卿相侍從中納言行成（藤原）・中宮權大夫經房（源）・新中納言能信（藤原）・二位宰相兼隆（藤原）・右大辨朝經（藤原）及殿上人・諸大夫等云々、

〔左經記〕四月

廿日、參大殿、攝政殿幷可然上達部多被參候、頃之召覽所々厩幷所飼御馬等、被撰定祭日使々料幷御物詣○藤原道長、賀茂社ニ詣スルコト、本月二十一日ノ條ニ見ユ、舞人等料御馬、

〔日本紀略〕後一條院　四月

廿日、癸未、警固、

警固

廿二日、乙酉、賀茂祭、

典侍賀茂祭使裝束料

〔魚魯愚鈔〕六下藏人方丁下勘文下名替　典侍祭使功名替

越中介安倍永邦停前典侍藤原基子（マヽ）寛仁二年賀茂祭使裝束新所任粟田海明改任、

〔榮花物語〕十四　あさみとり　○梅澤義一氏所藏三條西本　○上略、藤原長家、權中納言藤原行成ノ女ト婚スルコトニカヽル、三月十三日ノ第二條ニ收ム、

藤原行成室長家ノ祭使ヲ勸ムルヲ喜ブ

そのとしのまつりのつかひに中將殿（長家）いて給へは、大殿にもこの殿（行成）にもさらなり、攝政殿まておほしいそかせ給、したてたてまつらせ給て、左京大夫泰清女（夫泰清○源女）しうとめのきたのかたみたてまつりにいて給て、なにともなく、たゝかひをつくり給へは、さふらふ人〳〵おこかましなとわらひきこゆるもおかしうなん、この殿、たゝこのきみの御あつかひよりほかのことなきもことはりにみえたり、

左京大

○賀茂齋院選子內親王御禊ノコト及ビ賀茂禊祭行事ヲ改替スルコト、本月十九日ノ條ニ見ユ、

二十四日、丁亥、前太政大臣藤原道長、小一條院ニ馬ヲ獻ズ、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

廿四日、丁亥、○中略　從院（小一條院敦明）日來召馬、仍奉馬五疋、四疋置鞍、

馬五疋

五月

三日、甲子、以車・牛等獻小一條院、依未候有召、獻耳、

道長車及ビ牛ヲ獻ズ

○五月三日、道長、小一條院ニ車及ビ牛等ヲ獻ズルコト、便宜合敍ス、

二十五日、戊子、前太政大臣藤原道長及ビ攝政內大臣同賴通等、新造內裏ヲ巡檢ス、

所々ノ改修ヲ命ズ　公卿七八人同行ス

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

廿五日、戊子、參太（內）裏見造作所々、無便所々可猶（直）由仰置、（藤原賴通）攝政被參（來イ）、又上仰（卿イ）七八人許同道、還參內（同イ）、候宿、

廿六日、己丑、從內退出、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕○前田家本　四月

藤原實資服假中ニ參內ス

廿五日、戊子、假後○藤原實資ノ姉卒スルコト、三月二十二日ノ第二條ニ見ユ、今日可參內、而假限未了、仍可召之由、昨今可遣頭辨、(マヽ)定頼(藤原)、先參謁大殿(藤原道長)、申承雜事之間、從內有喚、定頼以書札告召申、即參入、依御物忌不參上殿上、詣攝政御宿所拾謁(給カ)、良久清談、以後復陣、大殿被巡檢內裏、攝政同被參會、余(藤原實資)依有憚不能追從、未終退出、○實資參內スルコト、便宜附載ス、

○新造內裏ニ遷御アラセラルヽコト、本月二十八日ノ條ニ見ユ、

藤原公季卿ヲ召ス

二十六日、己丑、定ヲ延引ス、

新任十餘國ノ申請條事定

〔小右記〕○前田家本　四月

廿五日、戊子、○中略向晚召使來云、明日可有定者、答可參入之由、右大臣(藤原公季)催、

廿六日、己丑、冒雨參內、先是、右大臣・右大辨朝經(藤原)參入、大臣云、去今年新吏十餘國申請事可定申、而諸卿不參、源大納言俊賢同稱所勞、相扶可參入之由仰遣了、左右衞門督可參入者、余答云、十餘个國事、卿相數少可難定申乎、源大納言雖參入、不可定申歟、不可强召哉、雨脚頻降、已及薄暮、至申二剋、左右金吾不參、縱雖參入、可難□□(定申カ)歟、大臣諾云、日昏雨降、諸卿不參、不如不及秉燭退出者、即被退出、右大臣相續退出、

參入ノ者少キヲ以テ定メ難シ

○陣定ヲ延引スルコト、元年九月八日ノ第二條ニ、陣定ヲ行ヒ、諸國申請ノ條事ヲ議スルコト、八月九日ノ條ニ見ユ、

秉燭以前ニ退出ス

二十七日、庚寅、右近衞府、相撲使ヲ定ム、

〔小右記〕○前田家本　四月

廿四日、丁亥、院(小一條院敦明)以永信(藤原)朝臣下給御隨身府掌高向公方申山陰道相撲使申文、仰云、可然者差遣乎者、令申將監保春(六人部)、依宣旨可遣一道、番長武方(秦)、賭射三度射的三、爲賞其藝、可定遣也、大□道(宰カ)無所望申者、仍差遣隨身近衞元武(紀)、今一道可可(行カ)遣番長守富、々々者不論書夜致驚(警)衞勤者也、略可遣一道之由、仰中將兼經(藤原)了、又年來前(藤原道長)攝政隨身、依彼消息差遣、已如恒例、又有彼消息者、不可背年來例、畿內・土佐使更無殊事、令蒙此仰依奉仕乎、明日參大殿(道長)、候氣色可一定、院仰云、相撲事問前攝政、答云、可被仰大將、仍所消息也、事之案內明日申大殿可進止也、

小一條院ヨリ御隨身府ノ相撲使ニ申文ヲ給フ

廿七日、庚寅、○中略今日相撲使可定由、以將曹正(紀)方令仰廻、或稱障、或可參者、大宰使先日定隨身紀基(元)武了、又以將監保春、有可差遣一道使之宣旨、保春望申南海道使、攝政(藤原頼通)隨身番長武方賭射々半矢數、雖無定旨、前々有遣相撲使之例、仍可遣一道、番長守富恪勤勝輩、欲定遣一道使、而大殿御隨身必有差遣、仍以懷(源)信朝臣令申事由、有可差遣隨身

宣旨ニヨリ一道使ヲ立ツ

射藝優長及恪勤ノ者ヲ選ブ

藤原道長ノ隨身ヲ差ス

大宰使

南海道使

山陰道使
山陽道使
畿内紀伊使
土佐使
藤原頼通ノ隨身ヲ差定ス

近衛守(伊)武之命、即以正方、仰遣將等、山陰・山陽・南海・大宰等使外、今二人將等可定遣、畿内・紀伊國一人、土佐一人、紀伊國者南海道、然而多差□□(衆内カ)使耳、入夜府生良(勝)眞持來相撲使定文、權中將公成(藤原)・少將師經(藤原)等定、將等消息云、攝政仰云、隨身武方若可差遣者、止彼可定遣三池保忠者、仍以保忠定遣一道使者、定文明日可下給也、

定文ヲ下ス

廿八日、辛卯、相撲使定文下賜之、大宰相撲府牒持來、加署返給、件牒昨進、而有文字落、仍返給、今日持來、猶有落誤字、摩直加署、帥子少將良頼(藤原隆家)(藤原)加署如何、件牒文有大府之不催相撲人之句、

大宰府ニ下ス右近衛府牒ニ帥ノ子ノ將加署ス

閏四月

二日、甲午、大宰相撲使隨身近衛紀基武(元)申今日罷由、賜胡錄(錄)、昨日出門者、

大將藤原實資隨身ノ罷申ニ胡錄ヲ給フ

○相撲召合ノコト、七月二十七日ノ條ニ見ユ、

二十八日、辛卯、太皇太后藤原彰子ト共ニ、一條院ヨリ、新造内裏ニ遷御アラセラル、東宮モ亦、同院ヨリ、凝華舍ニ移リ給フ、是日、尚侍藤原威子ヲ女御ト爲ス、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

廿八日、辛卯、早朝行新造太裏(内)、与攝政(藤原頼通)御裝束(催行イアリ)等事催行(イナシ)、還參(内脱カ)、行幸時申時也、仍人々遲參、催仰間、右近將等不參、仰陣令召、一兩參入、仍(仍イナシ)御南殿、後少納言(源)未參者、問案内、可參少納言經貞(源道方)一者、(入也イ)左大弁隨身可(不イ)參(者イアリ)、以少將爲代官、少將等又不參、

近衛將少納言等遲參シテ行幸遲引ス

行幸ヲ亥時ニ改ム

御巡路

清涼殿ニ太皇太后先ヅ入リ給フ

五菓ヲ供ズ

東宮ニ輦車宣旨ヲ下ス

攤尚侍威子藤壺ヨリ御前ニ參上ス太皇太后ハ弘徽殿ニ渡リ給フ

女御ノ宣旨氏ノ公卿ノ奏慶

〔裏書〕「廿八日、申四點左大弁隨身子(經貞)參、奇思無極、若有所思不參歟、吉平(安倍)申云、申時已過、以亥時可有行幸者、殿南御所(イナシ)御座、侍(待イ)亥時行幸、出自西門、入自陽明門・建禮門等給、率(率イ)黄牛、又吉平讀府(符イ)、件府(符イ)事不(不イナシ)仰奉仕也、鈴奏間、太后(大皇太后藤原彰子)渡清涼殿、次御渡、御着書(畫イ)御座、供五菓、乳母藤(マヽ)子倍膳(陪イ)、御臺一雌(雙イ)、女藏人二人供之、件五菓事、未前問案内吉平、申云、必可供者也者、勿令儲之、用御輦宣旨与(下カ)、余(忽イ)候御車、次供書(畫イ)御飯、此參東宮(後イアリ)御迎、同時入御、入自陽明門北陣給、爲(敦良親王)

傅參會陽明門、是下宣旨暫留候也、次參侍尚(尚侍參イ)、如常候藤(壺イ)、御前召上卿、有難(難イ)事、了依召侍尚參上、太后渡御弘徽殿、申時以前源大納言(後賢)・左大將(藤原教通)・新中納言(藤原能信)・右大弁(藤原朝經)也、自餘人々參(○入イ人々アリ)(藤原威子)(尚侍イ)

第二日

行幸以前、以侍尚(尚侍イ)可爲女御宣旨、右大臣(公季)承之、氏人々奏慶由如常、欲(我欲イ)我立(立列イ)、攝政相比、仍不立、」

廿九日、壬辰、上達部參入後御出、有攤事、參上、心神不宜、不座(候イ)即退下、

第三日

春宮坊藤原實資ニ馬ヲ要ム

太皇太后御同輿

吉時ヲ過ギタルヲ以テ御輿ヲ一旦退カシム

源頼定實資ニ雑具ヲ借ル

閏四月

一日、癸巳、上卿參入、召御前、臨攤期、從鬼門(間イ)御障子戸着座、奉仕攤事、右大臣以下參入、

二日、甲午、出從內、參中宮(藤原妍子)、退出、入夜女方(房)(源倫子)從內參中宮、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕○前田家本　四月

廿七日、庚寅、○中略

春宮屬ム來云、明日可有行啓、亥・子時許可進馬一疋者、令申可奉之由了、入御內裏歟、

廿八日、辛卯、○中略

今日遷宮、昨日一兩卿相告送云、申時可有還宮者、而亥剋遷御云々、母后(彰子)同輿云々、

青宮今夜入御云々、依昨日告奉馬於東宮、是鞍調、尚侍同被參云々、

今日行幸以前、尚侍藤原威子女御宣旨下、氏上達部奏慶、

後日源大納言云、御輿持立中門內、次右大臣已下進出之間、及申終剋、著御新宮可及酉剋之由、吉平□、仍退御輿、右大臣已下還入、未見聞之事也者、

廿九日、壬辰、左兵衛督(源頼定)返行幸雑具之書札云、夜部亥剋遷宮、次東宮・尚侍入給之間、

道長行幸ノ遲引ヲ怒ル

新宮初參ニハ歸忌日ヲ避クベシ

道長當日源經貞ノ遲參ヲ怒リテ父同道方ヲ勘當ス

實資初メテ新宮ニ參ル諸殿ノ造作ニ粗漏違例多シ

已及曉更、極難堪侍、昨日以申剋可遷御也、而依近衛次將幷少納言遲參、及亥剋也、大(道)殿長大腹立給、尤道理歟、凡公卿遲參之由、皆含薑耳、

閏四月

六日、戊戌、○中略、藤原實資、觀音院ニ詣スルコトニカ、ル年末雑載、宗教ノ條ニ收ム、日來籠居、依輕服○實資ノ姉卒スルコト、三月二十二日ノ第二條ニ見ユ、不參新宮、仍爲送永日、密行而已、

九日、辛丑、○中略　辰剋許、宰相(藤原資平)初參大殿、不束帶、忽無可參新宮之日、歸忌日可忌避之由、吉平所陳、仍今日只可參大殿者、向晩來云、參中宮・大殿、又參攝政殿、依御物忌、從門外退歸者、行幸日大殿勘當左大辨道方、于今不從事、依子少納言遲參、行幸時剋入深更云々、

廿七日、己未、今日初參新宮、輕服、吉平擇日也、宰相同初參、先著仗座、昇紫宸殿廻見、不似度々造殿、極以不便、殿幷廊等煩倚(傾カ)殊甚、就中紫宸殿不足言、虹梁打附木、當御帳上、敷政門內有無例之鴨柯、大見苦々々、依御物忌、而參(不カ)殿上、參入太后御方、依御上御直廬退歸、即罷出、

〔左經記〕四月

御竈神ヲ奉遷ス　御禊東宮凝華舎ニ入リ給フ　道長ノ直廬ハ飛香舎　太皇太后御在所ハ麗景殿　宜陽殿ノ饗

廿八日、辛酉〔四カ〕、午剋許參内、申二點可有還宮事、而依御綱少將幷少納言遲參、延其剋、以亥二點還宮、太皇太后宮令同輿給、以同剋奉渡御竈神、上新中納言幷余少納言制給供奉、仍無他少納言、皆假、六衛將監、（源經賴）（マヽ）

尉以下例供奉、奉遷内膳□〔司カ〕後、宮主奉仕御禊、非中臣祓、次參内、以子剋東宮令入凝華舎給、殿上有饗、

同剋女御殿令入飛香舎給、今朝被下女御宣旨、仍外戚公卿參殿上口、被奏慶之、次上達部參御前、賜衝重一兩、黄後〔其カ〕

賜紙、先奉御料、次集擬、次賜八〔公〕卿白大褂、殿上人黄衾、次被參大殿御宿所、飛香舎、次參太皇大〔太〕

后宮御方、麗景殿、皆有饗、無祿、及丑剋退出、

廿九日、參内、先上達倍〔部〕被參大宮御方、次被參御前、作法如昨日、但无祿、

閏四月

一日、癸巳、晩景參内、上達部依召參御前、衝重幷基〔基〕手等事皆如昨夜、々及深更退出、

〔日本紀略〕後一條院　四月

廿八日、辛卯、天皇與大〔太〕后同輿遷幸新造内裏、東宮遷坐凝華舎、今日尚侍從三位（マヽ）藤原朝臣威子爲女御、

閏四月一日、癸巳、遷宮之後第三日也、於宜陽殿、有羞膳事、

〔榮花物語〕十四　○梅澤義一氏所藏三條西本

一条の宮には、四月（マヽ）つこもりに御ふくぬか

新造ノ内裏

天皇入御新造内裏、太后同輿、せ給てしかは、よろつもあらたまりはなやかなり、○上下略、全文ハ閏四月二十二日ノ第一條ニ收ム、

〔大鏡〕七　太政大臣道長　略

○上又つきの女君（威子）、これも内侍のかみにて、○中略、天皇御元服ノコトニカヽル、正月三日ノ條ニ收ム、その三月七日まいり給ひて、○三月七日ノ條參看、おなしとし四月十八日（廿）、女御の宣旨くたされき、この日、内裏つくりいたしてわたらせ給ふ日なり、

〔今鏡〕一　すへらきの上　くも井

う月の廿八日には、おほうちやう〳〵つくりいたして、わたらせ給、しろかねのうてな、たまのみはし、みかきたてられたるありさまいときよらにて、あきらけきみよのくもりなきも、いとゝあらはれはへるなるへし、みかうしも、みすも、あたらしくかけわたされたるに、雲のうへ人の夏ころも、こたちのよそひなと、いとゝすゝしけになむはへりける、おほみやもいらせ給、春宮もわたらせ給て、むめつほにそおはします、入道（道長）おとゝの四のきみは、威子の内侍のかみときこえ給し、こよひ女御にまいり給て、ふちつほにおはします、

〔扶桑略記〕二十八　後一條天皇

四月廿八日、辛卯、天皇向（自カ）一條院、移幸新造内裏、與母后同輿、同日、皇太子遷凝花舎、

〔百練抄〕四　後一條天皇

四月廿八日、遷幸新造内裏、

白虎足日ノ遷幸

〔陰陽博士安倍孝重勘進記〕上

一、白虎(移徙)足日例

○上略

寛仁二年四月廿八日、辛卯、白虎足日、天皇遷幸內裏、回祿之後新造也、

〔陰陽吉凶抄〕○東京大學史料編纂所所藏

四、犯土造作條

年吉凶○中略

戊子、戊午、己酉、己卯、雖不當梁應天中仲、一名四擧歲、築室不利、禁也、出群忌隆集、

寛仁二、戊午、四廿八、辛卯、遷御內裏、四擧歲、

○台記別記久安三年七月二十八日條・大鏡裏書・一代要記・類聚雜要抄等、異事ナキヲ以テ略

ス、內裏燒亡スルコト、長和四年十一月十七日ノ條ニ、造內裏定ノコト、同年十二月

二十七日ノ第一條ニ、造內裏木作始ノコト、同五年四月七日ノ第四條ニ、造內裏ノ

日時等ヲ改定スルコト、同年九月二十一日ノ條ニ、內裏立柱・上棟ノコト、寛仁元

年二月二十一日ノ條ニ、造宮行事ヲ改定スルコト、同年六月十九日ノ條ニ、新造內

裏ノ檜皮葺始ヲ延引スルコト、同年七月七日ノ第三條ニ、同檜皮葺始ノコト、同年

九月七日ノ條ニ、藤原賴祐ヲシテ、新造內裏ノ左兵衞陣・內記所幷ニ桂芳坊ヲ造營

セシムルコト及ビ前攝政藤原道長・攝政同賴通等、新造內裏ヲ巡檢スルコト、同月

九日ノ第三條ニ、道長及ビ賴通、新造內裏ヲ巡檢シ、遷御ヲ延引スルコト、同年十

月十五日ノ條ニ、造宮所、覆勘ヲ行フコト、同年十一月二十九日ノ條ニ、新造內裏

ニ於テ、仁王經御讀經幷ニ安鎭家國法ヲ修スルコト、本年三月九日ノ條ニ、造宮行

事ヲ改替シ、尋デ、新造內裏遷御ノ日ヲ定ムルコト、本月十四日ノ條ニ、遷御ノ無

事ヲ祈リテ、大神宮以下ノ八社ニ奉幣使ヲ發遣スルコト、同月十六日ノ條ニ、道長

及ビ賴通、新造內裏ヲ巡檢スルコト、同月二十五日ノ條ニ、遷御後ノ政始ノコト、

閏四月十一日ノ第二條ニ、新所旬ノコト、七月七日ノ第一條ニ、造宮敍位ノコト、

同月十一日ノ第一條ニ、尙侍威子、入內スルコト、三月七日ノ條ニ、威子ヲ立テ、

中宮ト爲スコト、十月十六日ノ條ニ見ユ、

二十九日、壬辰、贈太皇太后藤原安子國忌、

〔小右記〕○前田家本

四月

廿七日、庚寅、○中略

内裏遷御後三箇日内ナルニヨリテ付シテ寺ニ修セシム宣旨ヲ下ス

藏人頭右中辨定頼(藤原)來、傳攝政(藤原頼通)命云、明後日國忌何寺(付カ)可令修之由、可宣下也、依遷宮間者、

○新造内裏ニ遷御アラセラルヽ、コト、本月二十八日ノ條ニ見ユ、即召外記(西寺)、順孝入夜參來、仰宣旨趣了、

閏四月　小盡　癸巳朔

選子内親王ヲ道長ニ消息ヲ送リ給フ検非違使ヲシテ日記セシム

二日、甲午、前太政大臣藤原道長、鬪亂ノコトニ依リテ、賀茂齋院長官源光清及ビ同院次官榮光ヲ召問セシム、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　閏四月

二日、甲午、○中略　從齋院(選子内親王)有御消息、長官光清与次官榮光問(問イアリ)(源カ)、(問イナシ)各有申、相定者、各召之等令問、有皆申事(皆有イ)、仍召宗相(藤原)・宣明(紀)、令日記、

三日、乙未、○中略　宗相等持來日記、々云、光清・榮光等從者院中鬪亂(戍)、榮光從者面并所々被打破(損イ)、後光清此事相定(相定此事イ)間、榮光引從類參院、光清從者死許令打者、仍前兩人從者下手者令進、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

兩人ノ從者齋院ニ於テ鬪亂ス榮光ソノ從者ノ負傷ヲ償リ報復スル下手人ヲ進メシム

九日、辛丑、左馬頭藤原保昌ノ牛童、上總介平維衡ノ下人ト爭フ、尋デ、追捕ノ間ニ濫行アリシヲ以テ、檢非違使左衞門尉正輔ヲ勘問セシム、

保昌藤原道長ニ訴フ

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　閏四月

十日、壬寅、保昌(藤原)愁申云、昨日從家罷出後、宅南方下人有聲(有下人聲イ)、令案内(問)、維衡(平)朝臣草苅与

正輔ノ家ニ入リテ濫行ス　昌保ノ従者

昌保牛童成論、云々間（間イナシ）従維衡宅左衛門尉正輔（遣イアリ）（政イ）隨身二人、又下人入保昌宅成濫行間、太皇（藤原彰子）大后宮召使男令問案、（太）（内脱カ）令成濫行後、以（左馬寮）寮允行方、維衡許遣牛飼童、

保昌左馬允行方ヲ使トシテ牛童ヲ召問シテ勘ス

（裏書）「十日、維衡示有義由、童歸送、（返送童イ）正輔行方付馬捕男、（政イ）（捕イアリ）（捕イナシ）令候獄所、是使官人爲隨身成濫行者也云々、件下人入保昌宅後、良久行方來向、（問イ）彼間無行方侍者、（無イナシ）（不候イ）仍召正輔令問案内、所申事悉相違、以此旨令問、如無所申、仍令候行方者從令免、（政イ）（仍イナシ）（免）（レ（イナシ））又四位宅令入隨身仰不當由、」

維衡ノ差出スノ許ニ正輔行方ノ投獄ス

五月

廿三日、甲申、朝間雨降、左衛門尉正輔昌保（レ）依朝臣家濫行事、於使廳被召問、申病由不參、仍付別當（藤原頼宗）可問之宣旨云々、（下イアリ）

正輔検非違使廳ノ召問ニ應ゼズ勘問ノ宣旨ヲ下ス

〔小右記〕○前田家本　閏四月

十日、壬寅、○中略

昨日保昌牛童與維衡草刈男鬪亂、左衛門尉正輔入隨身火長・郎等々于保昌宅令追捕、保昌縛牛童、差左馬允行方遣維衡許、維衡返送、其後正輔搦行方從者、禁獄責調、行方從者土御門殿木守云々、依其事忽召正輔被勘當、免行方從者了、更於使廳可被勘問云々、

維衡保昌ノ牛童ヲ免シ歸ラシム　行方ノ從者ハ上東門第ノ木守之ヲ放免ス

十一日、癸卯、太皇太后御所（弘徽殿）ニ渡御アラセラル、東宮モ亦、コヽニ行啓アリ、

公卿以下扈從ス

〔左經記〕閏四月

十一日、癸卯、○中略未剋許、御幷東宮（敦良親王）渡御大宮（太皇太后藤原彰子）御方、（弘徽殿及晩各還御）殿上人・上達部（倍）多被參候、

○六日、太皇太后御所ニ於テ、管絃ノ興アルコト、便宜左ニ合敍ス、

太皇太后御所ニ於テ通夜管絃アリ

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　閏四月

六日、戊戌、參太内（大イ）、候宿、大后（太）御方參上達部（參イナシ）・殿上人等、通夜有管絃（絃イ）事、盃酒數巡云々、

七日、己亥、從内退出、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

上卿源俊賢

新造内裏遷御後ノ政始、

申文請印

〔左經記〕閏四月

十一日、癸卯、參結政所、遷宮之後始有政、源大納言（後賢）率群卿被著廳之後、左大辨（源道方）令召使可著廳之由被申上卿、許諾了左右兩大辨（道方・藤原朝經）令史結申南申文之後、被著廳、次申文、次請印、々々了出立、次上卿以下出立、作法了被著南所、有申文、食了、引被參陣、○下略、祈年穀奉幣使定ノコトニカヽル、本月十

六日ノ第一條ニ收ム、

五月

一日、壬戌、參結政、無政、刻限了參陣、晴儀、

十七日、參結政、

〔日本紀略〕後一條院　閏四月

十一日、癸卯、政始、

○五月一日及ビ十七日、結政ノコト、便宜合敍ス、新造內裏ニ遷御アラセラルヽコト、四月二十八日ノ條ニ見ユ、

十二日、甲辰、一條天皇御願圓教寺、燒亡ス、

〔小右記〕○前田家本　閏四月

十二日、甲辰、○中略戌剋許、乾方有火、雜人所申太以縱橫、仍宰相同車馳參內之間、途中雜人等云、西土御門堀河邊者、依遼遠從待賢門外廻車、其後隨身保重（六人部）參來云、圓教寺燒亡者、初說既虛僞矣、藤原實資乘車參內セントス

十三日、乙巳、去夜圓教寺燒亡有實、御塔・幢・僧房等悉以燒了、無所遺云々、件寺故一條院御願也、火元遠方ナルニヨリ歸ルヲ知ル第スヽニ隨身ノ報ヨリ圓教寺ナル全燒

〔日本紀略〕後一條院　閏四月

十二日、甲辰、辰刻（マヽ）、圓教寺燒亡、失火、○百練抄異事ナシ、失火トノ說

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　六月

十九日、庚戌、○中略、一條天皇ノ奉爲ノ法華御八講料ノ經卷ヲ調フルコトニカヽル、六月二十二日ノ條ニ收ム、御八講料ノ經卷燒失ス

○下略、同上、全文ハ六月二十二日ノ條ニ收ム、

○一條天皇、仁和寺中圓教寺供養ニ行幸アラセラルヽコト、長德四年正月二十二日ノ條ニ、法華御八講ヲ、圓教寺ヨリ、圓融寺ニ移シ行フコト、本年六月二十二日ノ條ニ、陰陽寮ヲシテ、圓教寺再建ノ日時ヲ勘申セシムルコト、四年六月二十二日ノ條ニ見ユ、

十六日、戊申、祈年穀奉幣、

〔小右記〕○前田家本　閏四月

十六日、戊申、○中略

今日被立諸社使、祈年穀御幣使云、大納言俊賢（源）行之云々、（々脫カ）上卿源俊賢

奉幣使ヲ催ス　小舎人ハ所藏人或ハ摂政隨身ヲ用フ　藤原實資外記局ノ任ノ他ニ移ルヲ歎ク

廿日、壬子、○中略、吉田祭ノコトニカ、ル、四月十三日ノ條ニ收ム、兩度○今一度ハ、四月十六日、新造内裏遷御御祈ノ八社奉幣ヲ指シタルナラン、源大納言俊賢、行奉幣使事、外記只一度催仰、若申故障、不可强仰、其後以藏人所小舎人・摂政隨身被令催仰者、此事奇怪事也、以外史局政、移行藏人所并摂政隨身所、未知可、不求賢政歟、

〔左經記〕閏四月

日時并ニ使定　新造内裏遷御ノ後ノ神事始

十一日、癸卯、○中略、政始ノコトニカ、ル、本月十一日ノ第二條ニ收ム、源大納言於左仗座、定祈年穀奉幣使、加日時文、令余奏、々了、下給、來十六日、時未若申、件奉幣、還宮之後、○新造内裏ニ遷御アラセラルヽコト、四月二十八日ノ條ニ見ユ、爲被行神事、有定、所被立也云々、

〔日本紀略〕後一條院　閏四月

二十一社

十六日、戊申、奉幣廿一社、祈年穀、

前太政大臣藤原道長、病ニ依リテ、法性寺五大堂ニ參籠ヲ始ム、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　四月

心神不例

廿九日、壬辰、○中略、參上、心神不宜、不座（候イ）卽退下、

閏四月

室源倫子仁王講ヲ修ス

九日、辛丑、○中略、藤原道長、上東門第ニ赴クコトニカ、ル、六月二十七日ノ第二條ニ收ム、晚景歸來、後非心神例（心神非例イ）、從此日女方（源倫子）（房）

初仁王講、

心響ヲシテ修善セシム　四尊法ヲ始ム

十五日、丁未、從戌時許通夜惱胸、心神不覺、曉方（マヽ）

十六日、戊申、心神尙惱不覺、入夜參法性寺五大堂、

十七日、己酉、心響前僧都初修善、

十九日、辛亥、請四人闍梨、令修四尊法、

廿四日、丙辰、右大臣（藤原公季）被來、心地依宜、出爲對面、

廿七日、己未、左大臣（藤原顯光）被、來（來イアリ）此日惱重、不自會、摂政（藤原頼通）會之、

廿九日、辛酉、心地依無惱氣、出從寺、於東河以吉平（安倍）解除、還來後、又惱胸、極難堪、從

小康ヲ得テ歸宅ス　再發ス　再ビ心響ヲシテ修善セシム

孔雀經法ヲ修ス

五月

十三日、甲戌、○中略、藤原道長家法華三十講ノコトニカ、ル、五月一日ノ條ニ收ム、早朝摂政從内來云、孔雀經善修間（レ）、非可着座、仍今日非可候者、○中略、今日朝間參（欲イアリ）太内思（イナシ）つるを（大イ）、依此修善不參入、○内裏ニ死穢アルコト、五月十二日ノ條ニ見ユ、

胸病

公卿以下參集ス

十八日、己卯、又胸發動、極不堪(難イ)、

廿一日、壬申、心身頗宜、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕○前田家本　閏四月

十五日、丁未、宰相(藤原資平)宅有轉展產穢、○コノコト、便宜附載ス、

十六日、戊申、寅時許、出納元春令申云、大殿(藤原道長)自夜間重惱給御胸、上達部及上下人々被參集者、元春宅在大殿邊云々、即令案內、事已有實、卯剋許、與宰相同車參入、宰相(資平)宅有產穢、其穢交來、仍不著座、乍立、相對左將軍(敦通)○藤原々々云、昨日坐土御門第、其間被命胸痛由、乘昏被歸、無殊事、即罷出、戌剋許有惱給之告、乍驚馳參、通夜不覺惱給、今間令休息、乍立暫清談、歸登迺歸出、傳命云、去夜胸病重發、已不可存、今猶難堪者、少時退出、今夜大殿引率北方(倫子)被參法性寺云々、依御胸未平損歟、

胸痛烈シ

倫子付添ウテ參籠ス

(頭書)「滅門」

十七日、己酉、早旦召左京進祐基、問大殿案內、申云、昨日御胸午上頗宜坐、午後發惱給、御心地不宜坐由云々、從今日爲被行御修法、去夜亥剋參法性寺給、北方同參給、以心譽僧都(前僧都也)被行之者、攝政幷家子卿相近習公卿同被候云々、

藤原頼通以下ノ公卿法性寺ニ候ス

參詣法性寺、依觸穢俳徊大門邊、以懷信(源)朝臣達左將軍(敦通)、々々即來傳大閤(道長)命云、昨日午後重被發惱、仍俄思立被參、乘車之後御胸平復、但御心地頗有惱氣者、余退出(藤原實資)之間、侍從中納言(藤原行成)、右大辨朝經(藤原)、參入、於大門暫談、於河原相逢按察大納言、齊信(藤原)、各留車語雜事、大殿御心地太思惱、去夜惱給之間、叫給聲甚高、似邪氣、夢想不靜者、移剋歸家、今日宰相在余車後、

邪氣有ルニ似タリ

廿日、壬子、早旦大納言(公任)御消息狀云、昨日參法性寺、彼御心地甚似熱氣、自昨被始五壇修法者、去十七日相遇按察大納言(齊信)、示彼御修法一壇甚無力由、納言同所存歟、有響應詞、若洩達歟、宰相云、參法性寺、巳剋許歸來云、乍立參入、穢今日許、相逢新中納言、能信(藤原)、御病躰似熱氣、飲食不受給、夜部邪氣託人、不稱名、氣色似故二条相府靈、道兼(藤原)、御修法從去夜被始四壇、初一壇、合五壇、阿闍梨前僧都心譽、夜部四壇阿闍梨寺座主(法性寺)大僧都慶命・法橋叡効(教カ)・阿闍梨仁海(マヽ)東寺・阿闍梨仁海云々、日來當任・去任吏各一人、上達部・殿上人・女房・諸大夫・隨身・雜色所・御修善僧幷家子・侍者・雜色等饗饌・大破子各朝夕辨備、粥・强飯同儲云々、愁苦無極云々、

飲食不通

故藤原道兼ノ怨靈現ルノ慶命等ヲ阿闍梨トシテ五壇法ヲ始ム

所司饗饌ノ調備ニ苦辛ス

廿一日、癸丑、早朝宰相(資平)來云、今日又可參法性寺、大納言(公任)告送云、昨日大殿宜坐者、晚頭宰相從法性寺來云、今日已似被復尋常、清談御聲太高、但不出御前、昨日右府被參詣

一進一退

苦惱ノ聲高シ加持シテ靈氣ヲ他人ニ移ス

身體枯槁

云々、

廿二日、甲寅、早旦參法性寺、宰相同車、以新中納言能信、被言出云、從去夜心神太惱、不相逢者、其後攝政被出逢、家子上達部幷源中納言經房、・二位宰相兼隆(藤原)、在此座、良久清談、而申出給日、攝政被答云、日次不宜、但數日不可坐、今月內可出給者、巳剋許歸家、

廿四日、丙辰、○中略宰相來、言今日參法性寺之由、衝黑重來云、按察大納言・四條大納(公任)言及他卿相多參入、於簾前被談雜事、如尋常、不幾俄御胸病發動、重惱苦給、聲太高如叫、僧等相集加持、靈氣移人被平復、諸卿每日恪勤、下官何爲、又々案內可參入、但明日不可參、明後日隨狀可參詣、

廿五日、丁巳、○中略宰相(資平)來、稱可參法性寺退去、可參法性寺哉否事、決大納言、報云、縱雖無殊事、明日參入尤佳歟、取夜來案內、未聞左右者、○中略臨昏宰相從法性寺來云、如尋常、無惱氣、卿相多參、主人乍簾中被雜事(談脫カ)、

廿六日、戊午、參法性寺、宰相同車、隔簾謁談、從昨飲食如例、然而枯槁彌倍、無力殊甚者、源大納言俊賢、・左大將教通、・左衞門督頼宗(藤原)、・中宮權大夫經房、・新中納言能信、・右衞門督實成(藤原)、・二位宰相兼隆(藤原)、・修理大夫通任(藤原)、等被候、余晚景退、

廿九日、辛酉、巳剋許、大殿從法性寺被歸二條第云々、大殿御心地案內問大納言(公任)、報書云、未時許參入、大殿猶有邪氣々分之由、傳承侍、臨暗爲重朝臣從大殿來云、御心地不快、既有苦給、近習人等有祕藏氣、攝政昨今堅固御物忌、

二條第ニ歸ル

五月

一日、壬戌、早朝宰相來、卽參大殿、歸來云、夜部惱給、今朝尙不快坐、且被行三十講事、○五月一日ノ條參看、又有吟給聲、人々有憂歎氣、冒雨參大殿、宰相々從、○中略、道長家法華三十講ノコトニカカル、五月一日ノ條ニ收ム、余退出之間、以左大將被示云、冒雨過訪、太爲恐、所煩未平復、不能相逢者、彼是云、御心地有惱氣、左將軍云、猶苦給、

二日、癸亥、宰相來、卽參大殿、向晚來云、○中略、同上、今日御心地頗宜云々、去夕惱給云々、或云、三條院御靈云々、縱橫多端、昨日源大納言同談此由、

四日、乙丑、○中略、大僧都尋圓、藤原實資ヲ訪フコトニカカル、本月二十二日ノ第二條ニ收ム、此間天台座主被任光儀(慶圓)(任カ)云、爲奉訪大殿、昨日下山、昨夕先詣攝政殿謁談、被演彼御病根元、次臨昏參大殿、無謁退歸、今夕可登山者、

三條天皇ノ御靈ノ所爲トモ風評ス

天台座主慶圓見舞ノ爲ニ下山ス

呵梨勒丸ヲ服シタルニ更ニ惱ム

七日、戊辰、○中略、實資、道長家法華三十講ニ參ルコトニカ、ル、五月一日ノ條ニ收ム、今朝服給呵梨勒丸、惱給云々、以左大將敎通、被消息云、服呵梨勒丸、心地乖亂、不能相逢者、

十一日、壬申、○中略臨歟所昏宰相來云、講說間、○五月一日ノ條參看、大殿出居如尋常、明後日可參內給之由、被命彼是云々、

藤原賴通病ム

十二日、癸酉、○中略入夜宰相來云、大殿曰、於家修孔雀經法、內裏穢、○五月十二日ノ條參看、仍明日不可參內、

十七日、戊寅、或云、大殿去夜頗坐惱氣、又攝政被惱云々、宰相來云、今日參內、○藤原資平、實資ノ姉ノ服ヲ著スルコト、三月二十二日ノ第二條ニ見ユ、先參攝政殿、可聞被惱之案內、宰相臨晚來云、參攝政殿、被云出風病發動由、大殿出給講說席如尋常、○藤原賴通ノ病ノコト便宜附載ス、

發作ナホ頻リナリ

十九日、庚辰、酉剋許、中務錄義光來云、大殿重發煩給、吟苦給聲極高、

廿一日、壬午、○中略宰相來云、○中略今日大殿被參內、早出云々、被復尋常云々、○中略、道長家法華三十講ノコトニカ、ル、五月一日ノ條ニ收ム、

道長ノ衰弱先年ニ倍ス

今日主人（道長）云、今朝參內、極無力、近日枯槁殊甚、陪（倍）自去年、又一昨胸病發動、惱苦間彌無力者、

廿七日、戊子、○中略未剋許、義光從大殿來云、御胸重發給、攝政及家子・近習卿相等馳參、殿中不靜、小（少）時頗復尋常、

廿八日、己丑、晚景宰相從大殿來云、御胸昨日晚以來無殊事、

〔左經記〕閏四月

修法結願後歸第スベシ

十六日、戊申、今晚參大殿、自夜部依有御惱氣也、今夜令籠法性寺五大堂給云々、

勅使藤原兼綱ヲ遣シテ慰問シ給フ

十七日、早旦參法性寺、御惱頗宜、御胸物（惱イ）氣云々、晚歸宅、

菅原爲職ノ小舍人寺內ノ堂中ニ頓ノ死ス

十八日、庚戌、參法性寺、御惱猶不宜、從七夕（去九）有御修法云々、阿闍梨心譽僧都、

廿五日、丁巳、參法性寺、

廿八日、庚申、早旦參法性寺、大殿御心地頗宜、明日御修法等結願了可令出給云々、今朝有自內御訪、勅使藤中將兼綱、傳聞、一日本堂乃東ナル堂北面ニ大炊頭爲職（菅原）朝臣乃小舍人童晝寢、其容已如死人、忽令舁出宅之後、不幾死云々、或人云、件童於堂中女犯云、仍係

道長歸宅ノ途次祓ヲ修ス

病後初メテ參内ス

此禍歟云々、○菅原爲職ノ從者死スルコト、便宜附載ス、

廿九日、辛酉、參法性寺、已剋許大殿令出京給、其次於二條末有御祓事、御共上達部・殿上人・諸大夫多從、

五月

一日、壬戌、○中略、結政ノコトニカ、ル、本月十一日ノ第二條ニ收ム、頃之參大殿、惱猶令發給、

十六日、丁丑、早旦參攝政殿、依有御惱氣也、

十七日、○中略、同上、次參攝政殿、日來有御惱氣、不出給簾、

廿一日、壬午、早旦大殿御共參内、御惱後今日始令參給、頃之令退出給、

〔日本紀略〕後一條院　閏四月

十六日、○中略、祈年穀奉幣ノコトニカ、ル、本日ノ第一條ニ收ム、今日前(道長)太政大臣依病令參籠法性寺五大堂、

〔五壇法記〕五壇法例　隨見及注之、

○上略後一條

寛仁二年

小右記云、潤四月廿日、御修法、去夜被修四壇、又初一壇、合五壇、阿闍梨前僧都心譽、○園城寺

五大尊法ヲ修シタルニハ非ズトノ說

御在所ノ咫尺ノ間ニ拔刀スベキヲ獄ニ下スヲ免ス

夜部四壇阿闍梨座主大僧都慶命・法橋叡効(山)・阿闍梨仁海(東寺)・阿闍梨仁海(マヽ)云々、同廿一日、大殿王(已カ)似被祓(復カ)尋常云々、○延暦寺

私云、仁海二人如何、若同名歟、可尋之、又夜部四壇、又一壇始之云々、若是非五大尊法、只修法合五壇被修之哉如何、猶可勘見記也、

〔頭書〕「慶命官途・年齡共以上齡也、不勤中壇之條、尤不審也、」

○五壇法日記等、異事ナキヲ以テ略ス、道長病ムコト、四月九日ノ第二條及ビ六月二十日ノ第二條ニ見ユ、

二十一日、癸丑、瀧口藤原光任等、内裏ニ於テ鬪亂ス、仍リテ、之ヲ追卻ス、

〔小右記〕○前田家本　閏四月

廿二日、甲寅、○中略

昨夜瀧口藤原光任・同長實、各拔刀鬪亂、御在所已咫尺、須給獄所、然而瀧口退候者也、仍殊寛宥、直以追却云々、

二十二日、甲寅、中宮、除服シ給フ、

僧ニ屏風等ヲ賜フ

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　閏四月廿二日、甲寅、此日中宮（藤原妍子）除御服、可然僧等給御屏風等、

〔榮花物語〕十四　○梅澤義一氏所藏三條西本　一条（妍子）の宮には、おまへのさくらのをそきことを、おまへよりはしめたてまつりこゝろもとなかりのたまはすれは、つちみかとの御大藏卿正光（藤原）女くしけ殿、

さきさかすおほつかなしやさくらはなほかのみたらん人にとはゝや、弁のめのと、（禎子内親王）陽明門院乳母、前加賀守藤原順時女、母越後守敦經（紀）女、

おほかたのさくらもしらすこれをたゝまつよりほかのことしなけれは、弁のめのと、そのころさとにまかつるに、三条の院のまへをわたれは、こたかかりし松のこすゑもすこしいろかはりてこゝちよけなるに（にイナシ）、ついひちにはなに（なイアリ）となきものゝしけくはひかゝりたれは、いみしうあはれにて、むかしおもひいてられて、小侍從○小侍從、一本、江侍從ニ作ル、のきみさとにあるにいひに（にイナシ）やる、くるまとゝめたるほとも（すイ）すき（きイ）〳〵しう（てイ）おかし、

むかし見しまつのこすゑはそれなからむくらはかとをさしてけるかな、返事、小侍從○小侍從、一本、江侍從ニ作ル、君、

辨の乳母三條院ヲ過リテ懷舊ノ歌ヲ詠ム

君なくてあれまさりつゝむくらのみさすへきかとゝおもひかけきや、あはれなり、三月廿日のほとに、○廿日、富岡本、十ヨ日ニ作ル、一条のみやにさくらをまいらせて、道命阿闍梨、（道綱○藤原男也、）

いかならんきかはやしてのやまさくらおもひこそやれきみかゆかりに、とあれは、中將のめのと、御返し、

きみゆへにかなしきけさのにほひかないかなるはるかはなをおり（しイ）けん、○中略、藤原長家、同行成ノ女

つかはしける、

むかし見し松の梢はそれなからむくらの門をさしてけるかな

○三條天皇崩御ノコト、元年五月九日ノ條ニ見ユ、

道命中宮ニ櫻花ヲ獻ル

ナホ華麗ノ色彩ハ憚リ給フ

〔千載和歌集〕十七雜中　三條院かくれさせ給うて後、かの院のまへを過けるに、松の梢はおなしさまにて、ついかき所々くつれたるに、むくらの茂りたるを見て、其うちに江侍從か侍けるに

辨のめのと

つかはしけるる、

むかし見し松の梢はそれなからむくらの門をさしてけるかな

○三條天皇崩御ノコト、元年五月九日ノ條ニ見ユ、

盜人二人ニ頭ヲ打破ラルト申ス

實資檢非違使安倍守良ニ報ズ

守良別當ノ命ヲ受ケテ堀河邊ヲ調査ス

乘車シテ左大臣ノ門前ヲ渡リテ投石セラルトノ證言

大納言藤原實資ノ牛童、堀河邊ニ於テ、暴行セラル、仍リテ、檢非違使ヲシテ、檢問セシム、

〔小右記〕○前田家本　閏四月

廿二日、甲寅、○中略

牛付三郎丸・石童丸等、臨夜隨身車、爲運歩板、向堀河、度左府（藤原顯光）門前之間、盜人二人出來、以大刀打破頭、血流出、放叫言、今一人牛付童三郎丸、少後從堀河東邊同行、聞叫聲走向、盜人二人走入堀河西邊小屋閉戸、其間左府男出來、見驚石童丸・三郎丸等、參來所申也、卽差副出納男於石童丸、遣右衞門志守良（安倍）所、令申云、明旦申別當（藤原頼宗）可糺行者、所推量者非盜人歟、以大刀不可打、若乘車度門前之間、爲彼殿雜人被打歟、夜及深更、不能尋問耳、

廿三日、乙卯、早朝守良來云、夜前事申別當、仰云、可糺行者、仍罷向指申堀河邊宅、尋問之處、侍尙侍殿（藤原威子カ）稱侍從之女住件宅、申云、無一人男、又無走入者、但去夜乘空車者渡左府門前、彼殿人擲石打破頭、放叫聲、宅下女等出涼戸外之間、驚叫聲歸入宅內、此外無事者、侍醫相法（和氣）宅隔壁、仍問案內、申彼宅無男由者、又令實檢牛童疵、守良申云、

守良疵ヲ檢シテ刀創ニ非ズト申ス

下手人ハ朝久法師ノ童子トノ說

非以大刀打損、若以石打破歟、覆問童、申云、不知大刀・杖、只從彼宅來俄打破也者、初申全以大刀打破之由、今所令申者大刀與杖間不愜見者、事頗荒凉、至今已被疵、可尋糺之由、仰守良了、其後致行（藤原）朝臣參、問此事、申云、前佐渡守爲行子法師朝久童子、以石打破頭之由所承也、臨昏侍醫相法（和氣）來云、今朝守良問案內、答不知由、令尋聞者、朝久法師童子石犬丸以石打破云々、可無事隱者、

廿四日、丙辰、召守良仰致行・相法等證申童事、

〔小記目錄〕十七　臨時七　鬪亂事付刃傷・謀殺・罪科　○京都御所東山御文庫本

同年七月廿日、打破牛童首人令推問事、

尋圓ノ童子實資ノ牛童ト論ス

實資牛童ヲ捕縛セシム

大過ナシ

尋圓牛童ヲ免スベキ由ヲ申ス

○五月三日、實資ノ牛童、權大僧都尋圓ノ童子ト爭論スルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔小右記〕○前田家本　五月

三日、甲子、○中略　衝黑飯室僧都尋圓來、余（藤原實資）牛童從者與彼童子聊有少論、不及相毆、依途中之恐、便所來也者、參大殿（藤原道長）之間、非無怖畏云々、召問其事最可事也、然而召捕令縛侍（候カ）、僧都云、此童無指過、持杖追來車後許事也云々、童所避申又有其理、爲後令縛候也、四日、乙丑、尋圓僧都來云、去夕童早可免也、尋問由緒無指事、又無所過者、子細不記、

二十三日、乙卯、内裏觸穢ノ疑アリ、尋デ、陰陽家ヲシテ、コレヲ占セシム、

〔小右記〕○前田家本　閏四月

廿四日、丙辰、○中略昨日綾綺殿板敷下有鳥物、令見之處、有狼者、大怪歟、

廿五日、丁巳、○中略宰相來、○中略又云、一日狼怪、陰陽家占申可有御藥之由、先日大外記文義朝臣（小野）云、内侍所神鏡鳴、御占云、可令慎火事者、行幸以後○新造内裏ニ遷御アラセラルヽコト、四月二十八日ノ條ニ見ユ、内女房等裹雑物、稱可有火事、通夜不寢、極不宜事也、此事有前跡、能々可被慎歟、

〔左經記〕閏四月

廿四日、丙辰、雷雨、午後晴、參法性寺、○藤原道長、法性寺ニ參籠スルコト、本月十六日ノ第二條ニ見ユ、人々被示云、内狼死、定穢、依藏人仰諸陣立札云々、是甚無故事也、已不入六畜、何爲穢哉者、仍候内人々皆被入云々、不可爲穢之由改定已了、

廿五日、丁巳、參法性寺、頭左中辨（藤原經通）被示云、一日依狼死有御卜、御藥云々、頗不決（快カ）事也、

綾綺殿下ニ狼死ス

占シテ御藥ノ由ヲ申ス

内侍所ノ神鏡鳴ル

内裏ニ火アラン、トノ浮説アリ

女房等雑具ヲ纒メ眠ラズ

一旦ハ陣ニ觸穢ノ札ヲ立ツ

狼ハ六畜ニ非ルニヨリ穢無シト改定ス

〔日本紀略〕後一條院　閏四月

廿三日、乙卯、未剋大風、雨氷、又雹散如石、今日内侍所板敷下狼死、仍内裏有犬死之穢、

○内侍所ノ神鏡鳴ル怪異ヲ占セシムルコト、便宜合敍ス、

初メ犬死ノ穢ト爲ス

五月 大 壬戌朔 盡

一日、壬戌、前太政大臣藤原道長家法華三十講、

〔小右記〕○前田家本　五月

一日、壬戌、早朝宰相(藤原資平)來、即參大殿(藤原道長)、歸來云、○中略、藤原道長、病ムコトニカ、ル、閏四月十六日ノ第二條ニ收ム、且被行三十講事、○中略、同上、冒雨參大殿、宰相々從、今日三十講始、申剋許講說始、講師律師懐壽、問律師明尊、臨昏行香、○中略、同上、今日參入卿相大納言俊賢(源)・中納言行成(藤原)・教通(藤原)・頼宗(藤原)・實成(原)・參ー道方(議)(源)・公信(藤原)・通任(藤原)・三位中將道雅(藤原)・參ー資平(議)、攝政(藤原頼通)著直衣在太閤(道長)邊云々、證義者法印院源・大僧都慶命・前僧都心譽・講師懐壽・律師明尊・律師實誓・律師定基、

二日、癸亥、宰相來、即參大殿、向晩來云、講說間、大納言齊信(藤原)已下多參會、主人(道長)於簾中被許定(評カ)論義、今日御心地頗宜云々、○道長、病ムコト、閏四月十六日ノ第二條ニ見ユ、

三日、甲子、宰相來、即參大殿、晩頭來云、講說間、主人出居如尋常、

五日、丙寅、○中略、

宰相云、參內次參大殿、講說間、主人出居如尋常、

六日、丁卯、○中略、乘晩宰相來云、參大殿、講說了罷出、今日坐簾中、被判論義、

發願

道長簾中ニ在リテ論義ヲ定ム

道長ノ病少康ヲ得

七日、戊辰、○中略、

參內、宰相同車、源大納言俊賢、・左兵衛督頼定(源)、參入、暫候仗座、是彼相共參大殿、源大納言更改著直衣、從家參入、○中略、道長、病ムコトニカ、ル、攝政被參、申時許、講說・論義、講師阿闍梨遍救、問者教圓、懺法了、黄昏退出、今日見參攝政・按察大納言齊信・太皇太后宮大夫俊賢・侍從中納言行成・左大將教通・左衛門督頼宗・新中納言能信(藤原)・右衛門督實成・二位宰相兼隆(藤原)・左大辨道方・左兵衛督頼定・右兵衛督公信・三位中將道雅・侍從宰相、資平、律師明尊・實誓任僧綱後、○明尊、權律師ニ任ゼラレ、實誓、律師ニ轉ズルコト、元年十二月二十六日ノ第二條ニ見ユ、有座次論、凡僧時明尊著上、被問遣延暦寺、々家勘申云、同日受戒、實誓朝座受戒、明尊夕座者、今日著座了後、延暦寺勘文出來、仍實誓起座、著明尊上、稠人處頗無便、

懺法

明尊實誓ノ座次ヲ延暦寺ニ問フ

受戒ノ先後ニ依ル

八日、己巳、○中略、

宰相來、入夜又來云、○中略、右近衛府眞手結ノコトニカ、ル、本月六日ノ條ニ收ム、其後參大殿、大納言齊信・俊賢・公任(藤原)・中納言・參議多參、讃岐守濟政(源)儲僧俗饗饌者、

源濟政饗饌ヲ儲ク

十一日、壬申、○中略、

臨歟

所昏宰相來云、講說間、大殿出居如尋常○中略云々、

十二日、癸酉、宰相來、廼參卅講所、

五卷日

十三日、甲戌、參大殿、（五卷日也、）以左衛門督（頼宗、）被命云、只今相逢者、僧俗入堂、次諸卿著佛前座、次主人著座、此間諸卿動座、堂童子頒花莒、了主人已下退下、次僧、々先立、次

行道

薪等、次主人・余（藤原實資）次第列、（上達部、次殿上人、次地下辨・小納言（少）、次地下四位、次五位外記・史、次地下五位、次六位外記・史、次諸司六位、）各持捧物三廻、主人・上達部七条袈裟、了復座、召人給主人并上達部捧物、次敷長莚階前、置殿上人已下捧物、其外捧物等諸大夫・近衛府官人已下取置了、次說講（講說カ）・論義、（講師律師定基、問律師實誓、）了居僧前、（懸盤饗、次主人高坏、朱漆、已次懸盤、）一巡了（僧座無酒事、）僧退下、次以各弟子令撤僧前、先是諸大夫取立書置僧前、卿相云、今日饗事春宮亮惟憲（藤原）所設、立書者是解文、（證者三人米廿石、講師僧綱十五石・凡僧十石、）又播磨守廣業（藤原）以紙并米與請僧、帋上結付文、帋又有等差、米數如惟憲云々、

講說論義

藤原惟憲饗ヲ儲ク惟憲及ビ藤原廣業布施ヲ調フ

今日參入卿相大納言齊信・俊賢・中納言行成・教通・頼宗・經房（源）・能信・實成・參ー道（議）方・公信・通任・三位中將道雅・參議朝經（藤原）・資平、攝政不被參、籠內裏穢云々、（○內裏觸穢ノコト、本月十二日ノ條ニ見ユ、）兩頭并重上人等（藤原經通・同定頼）多不參、（雲カ）候內歟、酉剋許余退出、

參列ノ公卿

十四日、乙亥、宰相來、小（少）時參大殿、（○中略）臨昏宰相重來、談卅講事、

平維時僧ニ頒ツ馬二十疋ヲ獻ズ

十五日、丙子、宰相來、參三十講、臨夜重來云、常陸介（介平）維時三十講僧新馬廿疋獻之、引出件馬令乘、自請僧數馬二疋剩、仍加法印院源・大僧都慶命、（各二疋、）又別貢上馬四蹄、

僧ニ裝束ヲ贈ル

十七日、戊寅、（○中略）宰相臨晚來云、（○中略）大殿出給講說席如尋常（○中略）云々、

廿一日、壬午、（○中略、藤原實資、吉書宣旨ヲ下スコトニカ、本月二十一日ノ第一條ニ收ム、）小（少）時參大殿、講說已始、主人烏帽出居、大納言道綱（藤原）已下在座、余暫居渡殿、以左中將朝（源）任被呼、卽進之間、主人入簾中、冠歸出、著上達部上首、初坐圓座頗（脫アルカ）、已有菅圓座、講師順命、問教圓、論義了後、有僧俗饗、盃酒一巡了、褁請僧藝（褻カ）裝束、置各々前、從僧等撤前物・裝束、次僧等退出、次卿相起座、

結願

參入卿相大納言道綱・齊信・俊賢・公任・中納言教通・頼宗・經房・能信・參ー（議）兼隆・道方・頼定・三位中將道雅・參議資平、

廿四日、乙酉、宰相來、臨昏又來云、明日卅講結願可早之由、大殿有命者、

廿五日、丙戌、（○中略）未剋許參大殿卅講結願、大殿出客亭、攝政已下祗候、僧等參入之間、主人入簾中、僧侶著座、次攝政及諸卿著座、下﨟依無座席在渡殿座、立平張庭前、積誦經布、（百端、講說・論義如例、講師律師明尊、問律師實誓、）攝政及卿相行香、其後余已下執袈裟・大褂、

誦經

行香

（藤原彰子）太皇太后五卷日新所令儲、而依内裏穢、○本月十二日ノ條參看、彼日不被奉云々、授僧侶、大殿布施生絹、褁帋、有等差、殿上人執之、置各々前々、○中略　參入卿相大納言齊信・俊賢・中納言行成・教通・頼宗・經房・參ー議兼隆・道方・頼定・公信・三位中將道雅・參ー議資平、余申剋許先退出、

捧物穢ニ觸レタルニ依リ結願ノ日ニ之ヲ奉ル

講師

非時ヲ奉仕スル人々

〔左經記〕五月

一日、壬戌、○中略、結政ノコトニカヽル、閏四月十一日ノ第二條ニ收ム、頃之參大殿、惱猶令發給、依例被始卅講、證上、院源法印・慶命（心譽脱カ）兩僧都、講師、懐壽・明尊・實譽（誓）・定基等律師、日助・遍救・□（教カ）圓・良明・順明・慶範（命）・貞圓・憐因（東大寺）・永昭・經救、已上（興福寺）山階、

廿五日、丙戌、參大殿、卅講結願也、講論了上達部・殿上人取被物等施請僧等、各白褂一重・大袈裟一具・布施物等也、件袈裟攝政殿被調五卷日捧物料也、而彼日依觸穢不令參給、仍今日被加引也、又有御誦經、布施信乃百端、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　五月

十三日、甲戌、此日三十講五卷日、（也イアリ）早朝攝政從内來云、○中略、道長、孔雀經法ヲ修スルコトニカヽル閏四月十六日ノ第二條ニ收ム、仍今日非可候者、捧物袈裟不觸穢（令イアリ）、可奉者、

廿二日、癸未、

（裏書）「三十講間、濟政・泰通（藤原）・廣業・惟憲・經相（源）・頼任（藤原）・清通（大江）・頼光（源）・知光（藤原）、件等人非時奉仕（時イ）、又維時馬廿獻（馬廿イ）、僧新、大僧二人（都脱）二疋、自余一疋、」○陽明文庫所藏古寫本、コノ裏書ノ文ヲ、二十五日ノ記ニ續ケ記ス、

從フベキニ似タリ、

廿五日、丙戌、三十講結願、從大皇太后宮（太イ）（藤原彰子）廿重給、又從攝政許送大袈裟（大イナシ）十八、是等五卷日捧物、而彼（日脱カ）觸穢、仍今日被送也、事了參中宮（藤原妍子）・院（小一條院敦明）、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

四日、乙丑、右近衛府荒手結、

〔小右記〕○前田家本　五月

四日、乙丑、○中略

右荒手結、下毛野公利（故府生公頼子）、可入射手由、以將曹正方（紀）仰遣將等許、射手闕多數云々、入夜府生正武（清井）持來手結、隨身近衛秦武晴前腋、而不載手結、問案内、申云、不承左右、但不中一的者、仰云、不中的者下手之例也、點（默カ）而出射手如何、往古不聞事、又申云、前三近衛下毛野安行不中一的者、仍下後三歟、攝政（藤原頼通）御隨身也、此度手結如兒女子戯、近衛播磨貞保前六手、而立後腋、以大殿（藤原道長）御隨身所立歟、大殿・攝政隨身多立高手、又隨身番長身人部保重不射、先日令申云、已有府生闕二人、當可罷成之運、數年一手、又余隨身（藤原實資）也者、雖未仰左右、依無可比肩之者、今般不射歟、隨身男等云、依所塞不可供節之由所申也、保重者前一手也、後一手番長秦親利度左府、仍前後一手闕、須以後二隨身高扶武

手結ノ妄兒女ノ戯ニ等シ

藤原道長及ビ同頼通ノ隨身ヲ高手ニ立ツ

射手ノ闕員多シ

番長六人部ニ立ツ

保重府生ニ任ゼラレ以テ射手ニ立タテルベキヲ

大將藤原實資手結ノ失誤ヲ指摘ス　著行ノ諸將ハ皆年少ノ人

馬場ヨリ實資ニ酒ヲ進ム

手結ヲ改メ書スルコト不可ナリ

手結ヲ下ス

可立前一手、而以後三攝政御隨身秦武方立前一手、以扶武立後一手、遍頗（偏カ）揭焉、不足言、不可仰左右、但武晴事以正武云遣將等所、同不中的之安行、只前後手許相改、武晴被出射手如何、以此趣云遣耳、著行將中將兼經（藤原）・公成（藤原）・長家（藤原）・少將師經（藤原）・良頼（藤原）、皆是年少人等也、口猶乳臭、只以兩所隨身立高手、尤可然矣、使口如鼻、可無事也、但至武晴事、依玄隔所示也、手結書過太多、明日可仰、

五日、丙寅、馬場進藤薇糟酒等、

府生正武令申中將兼經返事云、武晴書載手結、清書之間書落歟、大失錯也、返賜手結可令書入者、加封返送之、傍者不中的不下幾手、事既同、可無愁之樣可定立之由示送了、晩景正武持來手結、以武晴立前四手、改書本手結、將等新署、須不改書本手結、只書入武晴、只（衍）書入武晴（カ）出射手一人、而更改書不可然、手少（年カ）人々所爲、不可謂善惡、武晴・安行共不中一的者也、而將等所行極矯餝、手結明日可下、

六日、丁卯、下賜手結、

○右近衛府眞手結ノコト、本月六日ノ條ニ見ユ、

五日、丙寅、小一條院、禎子内親王ニ藥玉ヲ贈リ給フ、

御歌

御返歌

祿及ビ饗料米ヲ馬場ニ送ル

垣下著行ノ次將手結ヲ下ス

〔榮花物語〕十四　○梅澤義一氏所藏三條西本　五月五日、院（小一條院敦明）よりひめ宮（禎子内親王）の御方にとて、くすたまたてまつらせ給へり、

このころをおもひいつれはあやめくさなかるゝおなしねにやともみき、○富岡本、結句ヲ、ねにやともみよ作ル、御返し、○富岡本、コノ次ニ、中宮研子○藤原ノ二字アリ、

いにしへをかくるたもとをみるからにいとゝあやめのねこそしけゝれ、○富岡本、二句ヲ、かくるたもとは作ル、

六日、丁卯、右近衛府眞手結、

〔小右記〕○前田家本　五月六日、丁卯、下賜手結（荒手結）、○本月四日ノ條參看、府生保（紀）方申云、中將兼經（藤原）・少將師經（藤原）有障、不可著手結、少將宗（源）國未到、○源宗國、右近衛少將ニ任ゼラルルコト、正月二十七日ノ條ニ見ユ、中將公成（藤原）・長宗（家）（藤原）・少將良頼（藤原）可著者、將祿大褂、射手官人六人祿絹六疋、物節已下祿布八十九端等遣馬場、饗新米朔比送之了、垣下五位・六位差遣之、○中略　入夜府生保方持來手結、中將公成・長家・少將良頼等著、七日、戊辰、下給手結、夜部中將公成消息云、武晴手不能上高手者、不致矢也、抑隨示可立高手者、然而不令改立也、

藤原頼通ソノ隨身ノ愁ヲ傳フ

八日、己巳、中將兼經使將監扶宣（藤原頼通）云、攝政曰、隨身下毛野公武無故下四手之由有愁申、可改立本手者、隨示可左右者、答云、攝政命尤可然、武晴前二手、而出射手、依余咎（藤原實資）後立四手之間、○本月四日ノ條參看、以公武改下五手也、持（將カ）等所行每事背理、昨日攝政淸談次有此事、手給（結カ）了、今又可改者、面可相定、以人不可傳示、

參議路上ニ攝政ニ逢フ時ノ作法

宰相（藤原資平）來、入夜又來云、參大殿（藤原道長）之間、攝政相逢途中、舁下車不立榻相過、兼所示、相從參彼殿、被談雜事之次、被示公武事、將等所行太不足言者、

中將藤原兼經追從スル者ヲ高手ト立ツト評セニ

九日、庚午、○中略中將兼經昨今無音、仍以將曹（紀）正方問遣案內、今日計也參院（三條天皇）御法事歟、○三條天皇周忌御法會ノコト、本月九日ノ條ニ見ユ、仰明旦可示由訖、兼經所爲極不便云々、就中手結以前官人已下來會、於其前以追從者、不論是非可立高手者、正方所申也、正方有大奇氣、又從者濫行無比、饗饌間下部不可堪、又責預者取續松無算、傍將等從者慣之濫吹、府下部等不可預奉雜事者、

兼經ノ從者ノ濫行甚シクノ府下ノ人ノ難澁ス

十日、辛未、正方云、中將朝臣令申云、明旦參入者、

十一日、壬申、○中略中將兼經來言手結事、攝政隨身公武可立本手之由、有攝政仰者、所被命有道理、可立本手乎、武晴可立後四年（手カ）、以後四高扶明可立前五手、扶明今年習手者也、似超越、余隨身也、然而武晴前二手也、而改立五手、彌可有愁、仍所定仰也、相觸著手結之將等、著陣、摩三人名可書改之由同示了、書入了可見由相含又了、

習手

十七日、戊寅、○中略府生保方持來改直手結、昨日將等參陣改書者、只可摩直歟、加封返賜、著眞手結之將等加署、權中將兼經不加署、依不著眞手結歟、

大將藤原實資手結ヲ改メシム

○右近衞府荒手結ノコト、本月四日ノ條ニ見ユ、

封ヲ加ヘテ再ビ下ス

九日、庚午、三條天皇周忌御法會、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　五月

九日、庚午、此日三條院（三條院）周忌御法事、本院修之、有內藏寮御諷誦、五百端、使右近中將兼經（藤原）、度者使左近少將良頼（藤原）、中宮幷余三百端、比女宮（藤原道長）幷一位（藤原妍子）二百端（藤原道長）、施入御裳（藤原頼子內親王）具法性寺（源倫子カ）、

三條院ニ於テ修ス御諷誦

度者ヲ賜フ藤原道長病ニ依リ參ル能ハザルヲ歎ク

行香間雨降云々、依有惱事不參（自カ）、○藤原道長病ムコト、閏四月十六日ノ第二條ニ見ユ、歎思不少、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕○前田家本　五月

九日、庚午、今明多武峯物忌、只開東門、○コノコト、便宜附載ス、

多武峯物忌

今日三條院御周忌御法事、於本院被修云々、一昨日主典代信理（錦）來、申可參之由、依物忌不參入、

七僧ニ法服ヲ賜フ

七僧有法服、題名注僧カ、○注ハ百口カ、

参入ノ公卿

十一日、壬申、宰相(藤原資平)來云、一日院御法事参入卿相大納言俊賢(源)・中納言經房(源)・能信(藤原)・参議兼隆(藤原)・道方(源)・公信(藤原)・通任(藤原)・朝經(藤原)・資平、

御正日

〔榮花物語〕十四　あさみとり　○梅澤義一氏所藏三條西本　○上略、中宮、除服シ給フコトニカ、ル、閏四月二十二日ノ第一條ニ收ム、九日(五月)は御正日にて、○一本、コノ次ニ御經佛の事ノ五字アリ、御らんするもいとあはれなり、

○三條天皇崩御ノコト、元年五月九日ノ條ニ見ユ、

十日、辛未、延暦寺舍利會、

〔小右記〕○前田家本　五月

十日、辛未、○中略今日天台(延暦寺)舍利會、

十一日、壬申、東大寺別當大僧都深覺、大和大安寺ノ再建ヲ圖リテ、大納言藤原實資ノ内意ヲ問フ、

〔小右記〕○前田家本　五月

十一日、壬申、○中略東大寺別當僧都深覺、使已講朝靜示送云、一日從東大寺向大安寺、奉拜釋迦佛悲歎、○大安寺燒亡シテ、僅ニ釋迦像等ノミヲ殘スコト、元年三月一日ノ條ニ見ユ、興福寺・圓教寺燒亡、○興福寺五重塔及ビ東金堂等、燒失スルコト、元年六月二十二日ノ第二條ニ、圓教寺、燒亡スルコト、本年閏四月十二日ノ條ニ見ユ、依如此事、公家忽難被造歟、誠唱上下欲奉造御堂、須申公家、而若事可叶欲申請、先内々相催、隨氣色可經申請、清廉朝臣・助實宿禰被等所可仰遣案内者、以兼成朝臣令仰遣、其書便付朝靜、

廣ク勸誘シテ堂ヲ再興セントス

深覺大安寺ニ詣デ釋迦像ヲ拜シテ悲ム

朝廷ニ申請セントシテ豫メ實資ニ見込ヲ問フ

廿二日、癸未、○中略東大寺別當僧都消息狀云、大安寺事、如被仰先公家可申事由也、而材木未出來以前申請、可荒凉、一定之後可令申付者、

用材ヲ調達シタル後ニ申請スベシ

○造大安寺司ヲ任ズルコト、十二月二十七日ノ條ニ、大安寺司、同寺造營料材木ヲ註進スルコト、治安三年八月五日ノ條ニ見ユ、

十二日、癸酉、瀧口所ニ於テ、雜仕女頓死ス、仍リテ、内裏觸穢、

瀧口所ノ部屋ニテ死ス

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　五月

十二日、癸酉、午時許、藏人頼信(宣イ)(藤原)來云、攝政(藤原頼通)消息云、瀧雜士女(ロイアリ)(任イ)彼所衆等領守(預カ)衣候部屋、

藤原道長夜ヲ待チテ死ヲ體ヲ出スベキ由ヲ命ズ

○彼所以下十字、陽明文庫所藏古寫本、預守彼所衆等衣候戸屋ニ作ル、而今一人女來見之、已死去、爲之如何、返事云、於陣中前々有如此事度々、入夜可取出者、雖其所無便、可待夕也、又瀧口(召)者等、可令候者也、

○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕○前田家本　五月

藏人頭處置ノ先例ヲ藤原實資ニ問フ

十二日、癸酉、〇中略未剋許、藏人頭左中辨經通（藤原）消息狀云、今朝瀧口女於本所內頓死、臨暗可令取捨侍、但可用北陣門歟、將如何、前々有如此之時、如何侍乎、北腋門并（式カ）乾門等如何、報云、不知案內、申兩殿（藤原道長大殿・攝政殿）可進止、但腋門宜歟、入夜宰相（藤原資平）來云、大殿曰、

藤原貞孝ノ死ヲ除キ御在所最近ノ場所ニテ死スルコト前例ナシ

於家修孔雀經法、〇閏四月十六日ノ第二條參看、內裏穢、仍明日不可參內、前々希有於禁中有死者、而藏人貞孝（藤原）外、〇藤原貞孝、殿上ニ於テ頓死スルコト、天元四年九月五日ノ條ニ見ユ、於御在所最近處、未聞事也、可謂恠歟、

十三日、甲戌、參大殿、五卷日也、〇中略、藤原道長家法華三十講ノコトニカ、ル、本月一日ノ條ニ收ム、攝政不被參、籠內裏穢云々、兩頭并重上人（經通・藤原定頼）等多不參、候內歟、

瀧口及ビ衛士ヲ召シテ守ラシム

女ハ狂亂シテ頓死ス

〔左經記〕五月

十二日、參內、瀧口所戶屋中雜仕女頓死、仍召御瀧（仰カ）（口カ）等令候其邊、兼入召誠（又カ）左右衛士等、入夜自北陣歟（被カ）取出云々、件女獨居戶屋中、而已剋許他女參見處、忽狂亂、仍走歸告瀧口等之間、已死去云々、

三十日ノ穢玄輝門ヨリ死體ヲ出ス

〔日本紀略〕後一條院　五月

十二日、癸酉、瀧口陣雜仕女於本所夜頓滅、仍內裏并日穢出來、以左右衛士令取出玄輝門方、

〇內裏觸穢ニ依リテ、月次祭及ビ神今食ヲ延引スルコト、六月二十一日ノ條ニ見ユ、

內裏化德門內等ノ怪異ノコト、便宜左ニ合敍ス、

女官等化德門內ニ吟聲アリト申ス內侍所ニ鬼物現ル

〔小右記〕〇前田家本　五月

十七日、戊寅、〇中略宰相臨晩來云、〇中略又云、日來化德門內有吟聲之由、宮人普申、又近曾鬼物來內侍所、是女官所申云々、

殿上人等モ吟聲ヲ聞クト人聲高キ時ハ吟ズルコトナシ

十八日、己卯、〇中略侍從經任（藤原）云、化德門內吟聲所聞、他殿上人同聞者、奇也恠也、人聲高時不吟、無音時吟者、

十三日、甲戌、讃岐善通寺、東寺ニ寺家修理等ノ雜事ヲ申請ス、

善通寺司解案

〔東寺百合文書〕ヲ五十六號〇山城

（端裏書）「東寺別院善通寺文」

□（讃）岐國多度郡善通寺司解　申請本寺（東寺）裁事

□（言カ）上雜事三箇條（マヽ）

一、請被申成於公家、以先日付僧賢由所言上、寺家所領田一處事

寺領内作人等ノ地子ヲ辨濟セシムルコト

右、寺家領田、住郡(多度郡)并那珂郡兩郡之間分散、卽作人等雖預作、所當地子物辨濟無心者、寺家修理不堪修造、仍以先日注其由、言上已了、仍請裁、

本寺ノ威ニ依リ國役ヲ免除セラルルコト

一、依本寺領勢免除國領事

右、寺代々國掌(宰カ)御任中、爲廿八箇寺內、依國定勤行公役、而依本寺勢、被免除公役已了、爰以去年准諸寺被差遣國使、令撿知寺家雜事者、言上國前、次國免又了、仍請裁、

告書ヲ下シ破損ヲ修理スルコト

一、請被令下給御告書、修理寺家破壞事

右、寺成本寺別院以後、雖送年序、寺司不修理一所者、寺司不了也、望請、被下給御告書、以令勤仕破壞并被令辨申年々地子物辨等、但去年寺田所免四町余也、卽所當地子物貳拾余石也、而破壞修理料更以不可足、加以廿余石內寺家例用十余石者、大以不足、因之國勘之旨難遁、就中僧令命作一町、不辨申甚(其カ)地子者、不足煩尤有此、被聞於國衙、以可省寺司責、仍請裁、

免田ノ地子ハ修理料ニ足ラズ

一、請被令聞國衙、勞成下宛仕寺家修理雜役浪人貳拾人事

右、寺國內第一二爲寺、建立堂塔房舍勝他、而田薗地子乏少、雜役下人等已以無一人、若被下給浪人免符、和誘比國人勤仕寺務、但奉爲當國非可有損事、仍請裁、

免符ヲ給ヒ隣國ノ浪人ヲ招致シテ修理ノ雜役ヲ勤メシムルコト

以前雜事、粗注事由、言上如件、抑件寺爲弘法(空海)大師御建立、其靈感尤揭焉也、法花三昧六時念佛讀經之勤尤盛也、立願祈禱之無不滿足、丁病苦立願自然除滅、蒙愁惱成念消散、斯則大師御靈所致也、政安忝爲末孫門徒、被定下寺司、欲成功能之勵尤切也、望請、本寺裁、相加正法之威王法之力、被令勤仕件寺務、將留東流之法、致南海之勤矣、仍注事狀、以解、

寛仁二年五月十三日　權別當僧政安

藤原實資辛嶋牧ノ駒ヲ見ル

十四日、乙亥、競馬アリ、

〔小右記〕○前田家本　四月十日、癸酉、○中略　辛嶋(河內)牧千端里牝馬子七夕(去カ)牽進、三歲、長四寸餘、件駒有千里骨、千端里產件駒卽斃了、駒令返放本牧了、今秋可令立飼、○中略

馬寮馬ニ藁ノミヲ飼フ實資ノ馬ノ痩衰ヲ見テ麥ヲ飼ハシム去冬以來秣闕乏ス

令飼馬寮之馬引遣見之、疲痩殊甚、口付男申云、寮御馬今年不飼秣藁、僅飼藁、左寮如此者、未聞之事也、不遣馬寮令立厩、先於前飼秣麥草、從今日厩馬飼麥草、去冬以來世間無藁、去月攝政參春日、○藤原頼通、春日社ニ詣スルコト、三月二十二日ノ第一條ニ見ユ、大和國人壞萱屋、以萱積置馬

馬寮御馬競ノ文ヲ奏ス
一通ハ藏人所ニ一通ハ御監ニ進ム

殿上人競馬ヲ行ハントス

節後ノ競馬

馬寮奏文ヲ進ル

藤原頼通前ニ右馬允爲政ニ給ヒシ

蒭新云々、

閏四月

五日、丁酉、馬寮進御馬走奏、前例挿板書杖、而無杖直進、史生ム丸、仰違例由、件奏一通進藏人所、令一（今カ）通進御監之例也、月來不進寮官上日、仰其由訖、

十一日、癸卯、○略中

馬寮進御馬競文、六番、今日挿書杖、依一日咎仰歟、

十五日、丁未、○略中

右中辨定頼（藤原）藏人頭、送宰相（藤原資平）之書狀云、今月廿餘日、可有殿上人競馬事、可借鼠毛馬者、許諾訖、

五月

十四日、乙亥、○略中　申剋許府生保（紀）方來云、今日節後御馬競、馬頭輔公（藤原）參入、而將等皆稱故障不參者、問將等故障、少將師經（藤原）故障不明、仍差保方仰遣事由、報可參由、○略中　入夜馬屬光忠・爲正等參來、所令召也、又進御馬競奏、馬允爲政前頭能通（藤原）時給御馬、而當時頭輔公稱攝政（藤原頼通）仰取遣、依爲政愁申、一日差光忠仰遣、其返事云、陸奥交易御馬、能通給

陸奥交易御馬ヲ返納セシム

十日内ニ肥滿セシメテ返納スベシト命ズ

輔公ニ下馬敬禮セザリシコトノ報

先ニ爲政ガ右馬頭藤原

允爲政・忠兼等、○陸奥交易御馬御覽ノコト、元年十二月五日ノ條ニ見ユ、申御馬散用之間、攝政聞食、有可取返之仰、仍所取遣、至忠兼乍承此由、罷下美乃國、仍差使取遣了者、余仰云（藤原實資）、件交易馬給允延利了云々、事既駭白如何、光忠等申云、事已實也者、仰不可然之由、夜深宰相來云、輔公參入所申云々、事頗失理、又今朝爲政申云、召返御馬、今夕輔公返送云、攝政殿仰云、如元勞飼、十个日内令肥滿可奉者、尤足爲奇、仍令返寮了、至給馬不可仰痩疲歟、事似私愁、仰其由、輔公只稱攝錄（錄）命、又云、隨仰可令飼寮者、不仰左右、内々云、件爲政先日相逢途中、不下馬相過、輔公同騎馬、依其怨卽日申攝政所行也、事極有憚、然而事實如此者、依其報答所行云々、依致敬禮必可下馬、何況寮頭乎、太無禮事也、但寄事於給馬、不可責煩、只召寮底可召勘歟、

○四月十日、藤原實資、馬ヲ見ルコト、閏四月五日及ビ十一日、馬寮、馬競奏ヲ上ルコト等、便宜合敍ス、

十六日、丁丑、位祿目錄ヲ奏ス、又、賑給使ヲ定ム、

〔左經記〕五月

十六日、丁丑、○略中　未剋□（參カ）内、左左（於カ）仗座令藏人（藤原）頼宣奏位祿目祿、返給之後、令左大辨（源道方）書

殿上分禁國

懸紙アリ

位祿所ノ史ニ下ス

殿上分國々、所賜禁國人々等、召余下給、□（原經賴）□（齋力）宮事、○齋宮嬉子女王群行ノコト、九月八日ノ條ニ見ユ、齋宮行事辨ハ權左中辨藤原重尹ナリ、□（衍カ）辨也、而○辨也ノ二字ハ、或ハ當ニ大字ニ作ルベキナラン、而今日依行紙、下卷籠懸紙下給、即命云、先例雖無懸紙、猶以有爲善者、給之結申、於陣腋召位祿所史下給、被定賑給使、令賴宣奏、返□（給カ）外記、

十八日、己卯、大納言藤原實資、養父故太政大臣藤原實賴ノ忌日ナルニ依リテ、法事ヲ修ス、

阿闍梨證空ヲシテ代リテ齋食セシム

東北院ニ於テ修ス

實資家政所饗饌ヲ儲ク

經ヲ新寫ス

參列ノ人々

〔小右記〕○前田家本　五月

十八日、己卯、今日故殿（藤原實賴）御忌日、數日清食太無力、仍不堪自齋、以證空阿闍梨相讓令齋、僧前只以新物施、讀經僧三口、增運・念賢・興昭、午剋參東北院、宰相（藤原資平）同車、侍從經任（藤原）別車相從、東北院聊儲饗饌、家政所（藤原公任）々儲、大納言被參、別當僧都慶命亦著横座羞食、是例也、一巡後下箸、了令打鐘、次入堂、供養新寫經、修諷誦等事如恒、行香了退歸、今日參入人々大納言・宰相・四位八人經任・方正（藤原）・政職（源）・忠道（紀）・懷永・道守・隆輔（橘）公（藤原）・五位九人爲盛（藤原）・兼賢（源）・內位（橘）・成順（高階）・敦親（藤原）・登任（源）・爲成（源）・有信（清原）・資信（藤原）・六位若干、

○阿闍梨證空ノ事蹟、便宜左ニ合敍ス、

證空ノ事蹟

〔園城寺傳法血脈〕乾（朱書）「智辨」智觀權僧正授十三人（朱書）「十」修學院根本、千光院○中略、諡號智觀、諱號勝算、

法系

常住院

師智興病ム

證空師ノ命ニ代ラント請フ

老母ヲ省シテ後ニ死セントス

證空（常住院、正曆二―十一―十四、法輪院記云、禪光坊者、常住院前坊號也、）

〔寺門高僧記〕一　智興內供

運昭內供弟子、證空阿闍梨之師也、

〔寶物集〕四　○最明寺本

薗城寺內供智興、炎天ニ病患をうけて、惱亂すること前後をしらす、時の名師晴明（安倍）を請して、且ハ祈請し、且ハト筮せさするに、定業かきりあり、いのるともいくへからす、たゝし、このおほくならひゐ給へる御弟子の中に、いのちをハかるくし、ならふ所の經論をはおもくして、師にかはらむと申人あらは、まつりかへむといひけれハ、智興無心なれハ、かはれとはいはねとも、病のせむるまゝに、めを見まわしてみるに、一人もかはらむといふものなし、これを見るかかなしくおほえけれハ、證空阿闍梨とて、いまたとしわかくして、ならふ所の正教（聖）いくはくならすといへとも、師弟子ハ多生のちきりなり、このみハゆめまほろしのことし、このたひ師ニかはりて、後生に三寶のあはれみをもかふらむとおもひて、我師にかはりたてまつらんといふ、智興なやめる眼ニなみたをうかへて、歡喜のいろをあらはす、老母堂にあり、よはひ八旬なり、いま一度今生のす

安倍晴明術ヲ以テ智興ノ病ヲ移スモ不動尊ニ證空ヲ護ヲ加ヘテ病ヲ癒ユ

かたを見えて、かへりきたるへしといひていてぬ、母このことをきゝて、全ゆるすことなしといへとも、生死の無常のありさまをこしらへいひて、なく〳〵かへりきたりて、すてに師ニかはる、晴明いふかことくにまつりかえつ、證空たちまちに重病をうけとりて、惱亂すること智興かことし、證空年來の本尊繪像不動尊ニむかひて、今生のいのちをは師ニかはる、ねかはくは明王臨終正念にしてころし給へといふ、ぬかをつきけれハ、○いふ以下十字、流布本、云ヲル息ヲツキケレハニ作ル、繪像の不動尊まなこよりくれなゐのなみたをなかして、汝ハ師ニかはる、われハ行者ニかはらむとの給て、證空やまひやみ、智興いのちいきぬ、

〔發心集〕六　證空替師命事

中來、三井寺ニ智興內供ト云テ、タウトキ人有ケリ、年タカク成テ、イカナル宿業ニテカ、世ノ中コヽチヲシテ、限ニ成ケレハ、弟子トモ集リテ泣カナシム時、晴明ト云テ、神如ナル陰陽師有ケリ、是ヲ見テ云ヤウ、此度ハカキリアル定業ナリ、イカニモ叶フヘカラス、其ニトリテ、志深カラン弟子ナントノ替ラント思ヘルアラハ、祭リ奉リテン、其外ニハ、イカニモ〳〵力及ストナン云ケル、ヲホクノ弟子トモサシツトヘル程ニ、此事ヲ聞テ、內供ハクルシミノタヘカタキマヽニ、若カハル人ヤアルト、竝ヒ居タル弟子トモヲ次第ニ見マハセト、言ニコソイヘト、誠ニハ捨カタキ命ナレハ、各色ヲツクリテフシ目ニ成ツヽ、獨トシテ我カハラント思ヘル氣色ナシ、其時證空阿闍梨ト云人、年若クテ弟子ノ中ニ有ケリ、弟子ニトリテハ末ノ人ナレハ、誰モ思ヨラヌ程ニ、進テ內供ニ申ス樣、我カハリ奉ラントナリ、其故ハ、法ヲオモクシ命ヲカロクスルハ、師ニツカフル習也、イカテ此事ヲ聞ナカラ身命ヲ惜ン、イタツラニ捨ヘキ身ヲ、今三世ノ諸佛ニ奉リテ、人界ノオモヒテニセン、更ニイタマシカラス、但年八十ナル母今ニ侍リ、我ヨリ外ニ子ナシ、若ユルサレヲ蒙ラスハ、ミツカラ身ヲ捨ルノミニアラス、フタリカ命ツキヌヘシ、能々コトハリヲ申キカセテ、暇ヲ乞テ歸リマイラント云テ座ヲ立ヌ、內供ヲ初コレヲ聞人々、涙ヲナカシテ哀ム事限ナシ、母ノモトニ至リテ、此由ヲカタル、願クハ歎給フ事ナカレ、タトヒ本意ノ如ク御跡ニ殘テ、後世ヲ訪タテマツルトモ、カク程ノ大ナル功德ヲツクラン事キハメテ難シ、今師ノ恩ヲオモクシテ命ニカハリナハ、三世ノ諸佛モアハレミ、天衆地類モ驚キ給フヘシ、其功德ヲカサネテ、母ノ後世菩提ニ廻向シ奉ラン、是マコトノ孝養ナレハ、則アヤシキ身一ツ捨テ、フタリノ恩ニムクヒテン、況ヤマタ老少不定ノサカヒナリ、若イタツラニ命ツキテ、御サキニタツ事モ侍ハ、其時クヤ

母ニ理ヲ說キテ暇ヲ請フ

老母ノ激勵

ミテ何カセン、何事ヲヤ此世ノ思出ニセント、泣々云ヲ聞ツヽ、涙ヲナカシ、驚キ悲ムモコトハリ也、ワカ愚ナル心ニハ、功德ノ多クナラン事ヲモ思ハス、君イトケナカリシ折ハ、我ニハクヽマレキ、我年タケヨハヒカタフキテハ、君ヲ憑ム事天地ノ如シ、ノコリノ命ケフ明日トモシラヌ時ニイタリテ、我ヲ捨テ心トサキタタム事コソイト悲ケレト、其志フカキ事ヲ思フニ、師ノ命ニカハリナハ、君カ後世ニヲキテハ不可疑、モシ此事ヲユルサスハ、佛モヲロカニオホシメシ、君カ心ニモタカヒナン、誠ニ老少不定ノ命也、思ヘハ夢マホロシノ前後ナリ、ハヤク君カ心ナリ、トク淨土ニ生レテ、我ヲスクヒ給ヘヨトイフ、(イナシ)涙ヲ押ヘテイヒケレハ、證空ナク〳〵悅テ歸ヌ、ヤカテ年名乘カキツケテ、晴明カモトヘヤリツ、コヨヒ祈リカヘ奉ルヘキ由云リ、カクテ夜ヤウ〳〵フケ行程ニ、此ノ證空カシラ痛ミ心地アシク、身ホトヲリテ、堪カタク覺ヘケレハ、我房ニ行テ、ミクルシカルヘキ文ナト取シタヽメツヽ、年來モチ奉リケル繪像ノ不動尊ニ向ヒ奉リテ申スヤウ、我年ワカク身サカリナレハ、命惜カラサルニアラネト、師ノ恩ノ深キ事ヲ思フニヨリテ、今ステニ彼命ニカハリナントス、ツトメスクナケレハ、後世キハメテヲソロシ、願ハ明王アハレミヲ垂テ、惡道ニヲトシ給フナ、病苦ステニ身ヲセメテ、一時モタヘシノフヘカラス、本尊ヲ拜ミ奉ラン事、只今ハカリ也ト泣々申ス、ソノ時繪像ノ佛眼ヨリ血ノ涙ヲナカシ、汝ハ師ニカハル、我ハ汝ニカハラントノ給フ御聲、ホネニトヲリ肝ニシム、カナキシト掌ヲ合テ念シ居タル間ニ汗ナカレ、ヌル身(ミイ)サメテ、スナハチ心地サハヤカニナリニケリ、內供モ其日ヨリ心地ヲコタリニケレハ、此事ヲキヽテ愚カニ思ハンヤハ、後ニハ人ニスクレテ相タノミタル弟子ニテナムアリケル、彼本尊ハ、ツタハリテ、後、白河院ニヲハシマシケリ、常住院ノ泣不動ト申ハ是也、御目ヨリ涙ヲナカシタル形チ、ケニサヤカニ見ヘ給ヘリケルトソ、證空阿闍梨ト云ハ、空也上人ノ臂ノヲレ給ヘルヲ、餘慶僧正ノ祈リナヲシ給ヒタリケル(時イ)トテ、法器ノモノナリトテ、聖ノ奉ラレタリケル小童ナリ、

智興證空ヲ信賴ス

常住院ノ泣不動

空也證空ヲ餘慶ニ薦ム

〔園城寺傳記〕六　一、泣不動事

智興內供者、蓮照(運照)內供之弟子、證空阿闍梨之師範也、智興廿五重病之時、醫療無驗、安部晴明(倍)曰、有相代人者、可移其病云々、雖聞其術、詎敢得代、爰證空欲代、爲法捨身、豈菩薩之行、代師受病、非菩提之道乎、但我有老母、命期旦暮、若不相告、定懷愁悶歟、卽往母所語件事、母聞不愁、還作隨喜、泣辭母家不再面、急還尊師欲代、晴明卽傳病患、

陰陽ノ祕術
明王ノ效驗

證空已病、尊師平安、有一本尊、不動明王也、非夢非幻告證空、汝既代師範、我當代行者、一持祕密呪、生々二[而力]加護、文、卽畫像明王悲涙餘眼、病氣遍體也、師弟互平安、陰陽之祕術、明王之効驗揚[揭]焉矣、

〔元亨釋書〕十二 忍行五　三井證空

釋證空、事三井智興、興有病、醫治不効、時膳部郎中安晴明、究陰陽術、權死生柄、其徒乞救、晴明曰、法師病不起、而我有祕符、若以人相貿、其方可試、初興之徒、患興之疾者多矣、皆曰、我等若有命之可代者、亦不辟焉、及聞此事、蹇縮而不應、空謂、爲法捨身、大士之常、況貸師死、我何遜乎、便報安氏、同侶無不嘆伏、空曰、我尚有一母、年甚老矣、若不往辭、恐懷愁恨、我又欲一見赴死耳、乃往母所陳事、母曰、我老命在旦暮、唯憑汝、汝其先我乎、然思汝生替師、雖死、不遺妾於地下矣、如汝勇勤、我欽歆之、空歸房、安氏施方、興疾立愈、空早受病、身心惱逼、空生平持不動尊、此日非夢非覺、明王告曰、汝已代師取死、我豈不換持者乎、空感喜禮像、熟見其像、似有病質、涙滴在眸、應時空疾卽痊、都下傳爲奇事、其畫像涙痕如新、後又不滅、世號泣不動尊、門屬祕授、今尙存焉、

〔三國傳記〕九　第六、三井寺智興內供事　明三常住院ノ不動事一也、

和云、中比、園城寺智興內供云貴人有、法水三井流酌、記蒭三會曉期、年闌後、何宿業有ケル、瘧病受、既沈見ケレハ、受法相承門人集、上下神祇禱爾セントソ悲ケル、其比清明云、神如成陰陽守、[頭]是見云ケルハ、御病定業故、唯平愈給事可レ難、但志深カラン[晴、下同ジ]御弟子壽代給、祭替申トソ申ケル、內供立願不レ果故、今度命惜、若我命代云弟子有尋ケレトモ、誠難レ捨命ナレハ、皆氣色替見タリ、爰證空阿闍梨云弟子有、其時未年若末座候タリケルカ、思樣、我經論旨見、藥王燒レ手、普明刎レ頭、縱一日三捨ニ恒沙身一、尙不レ能レ報ニ一句之力一、復兩肩荷負百千萬劫ストモ、寧報ニ佛法之恩一哉云ヘリ、所以法恩重、身命輕スルハ、師孝法ナリト觀、我御命代奉思也、但八十有餘老母、我外無レ子、若免蒙ハ、自身捨而已ナラス、二人命盡ナントス、能々理ヲ申披、暇乞可ニ歸參一ト云テ座ヲ立ケル、內供ヨリ始、宗トノ弟子達迄モ、彼ノ志感、皆泪ヲソ落ケル、去程、證空母許到、此事語、願莫ニ歎給一、設我本意如、御跡殘、後世訪奉トモ、カホトノ大功德ヲ作ラン事難カルヘシ、今師恩重、其命代事、三世佛哀、天衆地類可レ有ニ納受一、其功德惣母後世菩提廻向奉、是誠孝養ナレハ、則カリナル身捨、二人深恩酬奉可レ成、況老少不

定境也、若先立奉徒命盡、其時悔テモ何甲斐有申ケレハ、母此事聞、涙流驚悲云ケルハ、
吾愚ナル心ニハ、功徳大ナラン事不レ覺、我三磐崩辛苦不レ憚、一條凝血劬勞不レ辭事、
君幼ナカラン程吾養育セラレ、我年闌君我孝養アラント賴事天地如、然ヨハイ明日知サ
ルニ、今正我捨先立事コソ悲ケレ、雖レ然師命代ナハ、汝後世菩提成佛可レ無レ疑、若此
事免サスハ、佛愚成見玉ヒ、君心ニモ違ヌヘシ、誠老少不定世、前後相違習、夢幻中シ
テ爭是以非セン、早君心任〔セカ〕、速淨土生我導給ヘト、涙押曰給ケル、證空悅泣々歸リヌ、
清明則年名字書付、今夜可レ奉二祈替一由申ケル、夜漸々深行程、證空首傷心塞身ホヽメ
キテ、難レ堪覺ケレハ、我宿坊往、見苦敷物共取納、年來持奉ケル畫像不動尊奉レ向申樣、
我年若身大盛ナレハ不レ非レ惜トモ、師ノ恩深事思依、今ステニ彼命欲レ替、兼行業ナレハ、
後世キワメテ怕、願大聖明王哀成、惡道不レ可二落給一、病苦既身責、一時不レ可二堪忍一、
本尊拜奉事只今計也、泣々申、其時畫像御眼涙流給、汝師代、我行者替言御音、骨徹肝
染、彌合レ掌念誦イリタル間、遍身汗流ヌルミサメテ、則サハカニ成ケリ、內供其夜ヨ
リ、瘧心地平愈、難レ有カリケルタメシ也、御本尊後白河殿ヲワシ鳥リ、常住院泣不動
申是也、御目ヨリ涙ノコホレタル跡今在、此證空阿闍梨ト申ハ、空也上人臂折給タリケ

ルヲ、餘慶僧正祈直給タリケル時、上人法器者也トテ、僧正進給シ小童御事也、上人能
御覽有貴カリケルト云云、

〔小右記〕○前田家本　寛仁元年七月

二日、戊戌、從昨大雨、○中略尼君日來度住證空闍梨中□〔川カ〕車宿、水定入彼宅歟、○下略、全文ハ元年七月
一日ノ第一條ニ收ム、

○證空、藤原實資若シクハソノ姉（藤原實資姉）・妻子等ノ病ニ、加持修善ヲ行フコト、永延元
年・同二年・永祚元年・正暦四年等ノ各年年末雜載、疾病、生死ノ條及ビ長保元年
九月十五日ノ條ニ、實資姉ノ佛經供養ニ請ゼラルヽコト、永祚元年年末雜載、諸家
ノ條ニ、實資家ノ佛事ニ請ゼラレ、或ハ實資ニ代リテ忌日ニ齋食スルコト、永祚元
年・正暦四年・長保元年・長和元年・同三年ノ各年年末雜載、諸家ノ條幷ニ同四年
年末雜載、宗教ノ條及ビ長德四年九月是月ノ條ニ、藤原公任ノ爲メニ修善ヲ行フコ
ト、正暦四年年末雜載、諸家ノ條ニ、皇后藤原遵子御出家ノ儀ニ奉仕スルコト、長
德三年三月十九日ノ條ニ、太皇太后昌子內親王ノ御惱ニ依リテ、御修法ヲ行フコト、
長保元年十一月二十日ノ條ニ、同內親王御生前ノ御願ニ依リテ、大威德法ヲ修スル

コト、同年十二月十二日ノ第一條ニ、藤原行成家ノ佛事ニ請ゼラルヽコト、同四年十月二十三日ノ第一條及ビ寛弘元年年末雜載、諸家ノ條ニ、故東三條院藤原詮子ノ周忌御法事ニ、散花ヲ勤ムルコト、長保四年十二月二十一日ノ條ニ、中宮藤原彰子ノ御修善ニ奉仕スルコト、寛弘六年六月二十八日ノ第二條ニ、藤原道長ノ爲メニ、修善ヲ行フコト、同七年十一月四日ノ條ニ、故一條天皇ノ御葬送ニ供奉スルコト、同八年七月八日ノ條ニ、同ジク七々日御法會ニ、堂達ト爲ルコト、同年八月十一日ノ第二條ニ、三條天皇ノ御惱ニ依リテ、大威德法ヲ修スルコト、長和元年七月二十二日ノ第一條ニ、同ジク、七佛藥師法ニ候スルコト、同四年五月一日ノ第一條ニ、故太皇太后藤原遵子ノ七々日御法會ノ七僧ト爲ルコト、寛仁元年七月十九日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔四箇大寺古今傳記〕園城寺僧傳　中　證空傳云々、（元享釋書）卷之十二、忍行、

鳴不動、或書云、從畫像尊頂煙薫出、眼中血涙滴痕尺寸餘、證空其年十八云々、

〔寺門傳記補錄〕八聖跡部丙　不動堂南院、

常住院不動堂、證空阿闍梨之所創也、寺有不動尊畫像、證空常深歸之、父師智興供奉年二十五、嬰於重病、醫術力述無驗、追日逼惱甚焉、命在危急、證空不堪悲歎、跪明王前、誓請我代師命、時明王尊像苦相現面、血涙餘雙眼而滴于心上、應時父師病立愈、弟子亦免焉、大悲拔苦之力、師資俱脫、奇哉、明王之涙痕、至後尙在、世字之言泣不動尊、證空遂構一堂于院內、安置件尊像、其後花王院覺助僧都亦歸於此尊、僧都寺內無水、常以爲憂、或時僧都誓祈明王、一夜庭上潔水湛湛涌出、汲之不竭、僧都感喜之餘、改易曰法泉坊、○中略

補曰、常住院始祖者、證空阿闍梨也、脈譜證空下曰、法林院記云、常住院前坊號者、禪光坊也、○中略

耆老傳曰、昔時法泉坊在于南院花谷、常住院在琴尾谷、中古兩寺交易、今法泉坊是常住院地也、

常住院ニ不動堂ヲ建立ス

常住院ハ後ニ法泉坊ト寺地ヲ交換ストノ說

〔寺門傳記補錄〕九聖跡部丁　三院圖說

三井三院寺刹、○中略　次圖南院者、寺廓東立摠門、○中略　摠門內西行二町許、至三尾社前通大路、○中略　又路北勸學院西上常住院、廓內西方有不動堂、是智興內供弟子證空阿闍梨之草創、本尊世上所謂泣不動尊是也、○中略　三尾西上花谷、山脚有花王院、廓內○中略　又有

不動堂ハ常住院境內ノ西部ニ在リ

井、名法泉水、院主覺助阿闍梨憂寺無水、祈請常住院泣不動尊所得井水也、依之後改寺號法泉坊、

〔寺門傳記補錄〕十五僧傳部己　阿闍梨證空常住院、

證空　智興阿闍梨弟子、常住院始祖也、空有不動尊畫像、生平深歸、○中略空構一堂于常住院廓內、安置件尊像以崇奉、正曆二年十一月十四日、拜權僧正智觀受職灌頂、

〔本朝高僧傳〕六十六淨忍七　江州三井沙門證空傳○傳文略ス、

贊曰、世間在纏之士、尚蹈義善死、況出世之人、平生之功夫不切于茲乎、空公之志操可貴焉、賢哉其母之訣辭、與王孫賈之母可併案也、

二十一日、壬午、大納言藤原實資、吉書宣旨ヲ下ス、

〔小右記〕○前田家本　五月

廿一日、壬午、○中略、實資、姉ノ服ヲ除クコトニカカル、三月二十二日ノ第二條ニ收ム、未剋許參內、宰相(藤原資平)相從、暫候左仗、藏人典藥助保相(藤原)下給內藏寮請申臨時公用新米十石奏、卽下左中辨經通(藤原)、今日除服初參入之日也、兼示左中辨朝臣、下吉書宣旨之、

右近衞大將藤原實資ノ隨身等、參議藤原資平ノ從者ヲ負傷セシム、

師鑾ノ贊

內藏寮臨時公用料米請奏

除服後最初ナル故豫メ吉書ヲ儲ク

仍リテ、實資、隨身三名ヲ勘事ニ處ス、

〔小右記〕○前田家本　五月

廿一日、壬午、○中略、隨身等打宰相(藤原資平)從者國武云男、以了(マヽ)突破頭、依參內間不召問、此間宰相來云、以刀被突之由、被疵男申者、以馬允長明令實檢疵、非刃傷之疵者、明日可尋訊、

廿二日、癸未、以將曹亮範(若倭部)令勘問隨身等、事起自番長保重(六人部)、々々・近衞扶明(高)・吉正等無所避、進過狀、三人勘當、令差進替隨身、扶明・吉正等令候本府、至扶明殊召候府戶內、可禁出入之由、召仰亮範、打頭破者也、

廿四日、乙酉、宰相來、臨昏又來云、○中略、藤原道長家法華三十講ノコトニカカル、本月一日ノ條ニ收ム、又云、隨身等勘事可免者、仍召遣府生亮範仰之、

頭ヲ破ル

馬允長明疵ヲ檢シテ刀傷ニ非ズト申ス

將曹ヲシテ勘問セシム

過狀ヲ徵シ身ヲ解ク

卻テ隨身ヲ下ス

高扶明ヲ府ニ監禁ス

資平ノ言ニ依リテ免ス

二十四日、乙酉、是ヨリ先、炎旱ニ依リテ、神祇官ニ於テ雨ヲ祈リ、併セテ丹生・貴布禰ノ兩社幷ニ諸國ニ令シテ、仁王般若經ヲ轉讀セシム、是日、丹生・貴布禰ノ兩社ニ祈雨奉幣使ヲ發遣シ、七大寺・延曆寺及ビ大和龍穴社等ニ於テ、御讀經ヲ修セシム、

〔小右記〕○前田家本　五月

藤原實資參内シテ暑熱ニ堪ヘズ氷ヲ飲ム

廿一日、壬午、○中略、藤原實資、吉書宣旨ヲ下スコトニカ、ルル、本月二十一日ノ第一條ニ收ム、参上殿上、不耐苦熱、飲氷水、

略

今日頭辨經通（藤原）云、依旱魃可被行七大寺・延暦寺・龍穴御讀經之事、大納言俊賢（源）承行之、

自來廿四日可被行、前例以近衛次將爲延暦寺勘文（勅使カ）、而依内穢○内裏ニ死穢アルコト、本月十二日ノ條ニ見ユ、不可遣歟者、又云、從一昨限三个日、於神祇官有御祈者、

廿四日、乙酉、○中略

今日於陣外被立丹生・貴布禰使、依内穢、右衛門督實成（藤原）行之、

廿六日、丁亥、○中略

從酉剋許、已有陰雲、而臨夜天晴雲散、一昨日被立祈雨使、又於所々被行御讀經、天灾力强、御禱無驗歟、

廿八日、己丑、○中略　伊勢守兼資（源）來云、明日罷下者、又云、只今無旱魃愁、六七八日降雨、

就中八日洪水、苗少々流、

内裏觸穢ニ依リテ延暦寺ニ勅使ヲ差遣セズ

十九日ヨリ神祇官御祈ヲ行フトノ說

穢ヲ避ケテ左衛門陣外ヲ奉幣使ヲ遣ス

伊勢守源兼資赴任ス

降雨

〔御堂關白記〕

○陽明文庫所藏　四月

廿六日、己丑、○中略　從申時許雨降、下人等爲慶、

廿七日、庚寅、終夜深雨無間、巳時許有晴氣、

閏四月

四日、丙申、從夜半許雨、申時有晴氣、

五月

廿一日、壬午、○中略　去月立間（以後イ）雨一兩降（度イアリ）後久不降、仍神祇（官イアリ）御祈并七大寺御讀經・龍穴御讀經等宣旨下云々、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

御讀經ノ宣旨ヲ下ス

〔左經記〕　五月

廿一日、壬午、○中略　今朝左中辨（經通）承仰、爲祈甘雨、於七大寺并（延カ）歷（暦）寺・龍穴社等、可修御讀經之由、七大寺・延暦寺大般若、龍穴仁王經、龍穴扶公率七口僧可讀之由、給宣旨、仰源大納言（後賢）、令勘日時、可賜宣旨等云々、以本寺カ可爲供云々、但延暦寺・龍穴等別有供、大和・近江給宣旨、又召仰齋主輔朝（親脫カ）臣（大中臣）、於神祇官可有御祈云々、依宮中穢無奉幣等事也、又下知二社（丹生・貴布禰）・諸國、轉讀般若可祈請可雨（甘カ）之由、有宣旨、

七大寺延暦寺ハ大般若經

龍穴社ハ仁王經

〔日本紀略〕　後一條院　五月

廿一日、壬午、於所々有甘雨御讀經定事、

廿四日、乙酉、奉幣丹（丹生）・貴二（貴布禰）社、依祈雨也、但於左衛門陣外被發遣之、宣命以不穢紙用セズ

御讀經定

宣命ハ穢ニ觸レザル紙ヲ用ヒ奏聞セズ

之、不奏聞、

〔祕密宗要文〕第十五、僧正仁秉、○中略寛仁二年戊午歳、炎旱渉旬、苗稼炬種、因之○中略、大極殿ニ於テ、仁王經ヲ轉讀セシムルコトニカヽル、六月三日ノ條ニ收ム、始從天台・南京、處々靈驗都鄙有靈諸神社奉幣祈雨、○下略、仁海、請雨經法ヲ修スルコトニカヽル、六月四日ノ條ニ收ム、

〔園太暦〕觀應元年十月

五日、晴陰不定、官・外記匡遠（小槻）宿禰・師茂（中原）・清澄（小槻）・神祇官兼員（卜部）宿禰・兼豐（卜部）宿禰・明法明清（坂上）・明成（坂上）・章有（中原）等、勘文被下之、大祀事可申所存之由被仰下之也、○中略

兩局

仙洞卅ケ日觸穢時、御禊大嘗會院中御沙汰可有憚否准據例事、

○中略

寛弘（仁）二五廿四、丹生・貴布禰社奉幣、内裏穢、陣外發遣、

○中略

右准據例、管見所覃、粗注進如斯、○中略仍言上如件、

十月四日　大外記師茂

○中略

兼豐宿禰

被仰下二ケ條、

一、大嘗會條々穢中其沙汰可爲何樣哉、可注進先傍例事、

○中略

寛仁元（二）五廿四、祈雨奉幣、權中納言實成、依〔内カ〕不穢於左衞門陣外行之、

○中略

右管窺攸覃如此、○中略仍注進如件、

觀應元年十月四日　神祇權大副卜部兼豐

○伊勢守源兼資、赴任スルコト、便宜合敍ス、丹生・貴布禰兩社ニ、重ネテ祈雨奉幣使ヲ發遣スルコト、本月三十日ノ第一條ニ見ユ、

大納言藤原實資第ノ倉代、燒亡ス、

〔小右記〕○前田家本　五月

廿二日、癸未、○中略

實資季仁王講ヲ始ム

西南隅ノ倉代無風

雜人廐舍ノ庇ヲ破壞シテ延燒ヲ阻止ス

近邊ノ人々及ビ藤原道長ノ使來訪

倉代ハ殆ド空虛ス

放火

實資仁王經ノ功德ニ依リ大災ヲ免レシヲ喜ブ

安倍吉平ヲシテ占セシム

公卿等ノ見舞

從昨夜始奉讀仁王經、以增暹大德爲師、昨日歸宿之後、行仁王講了、夜深所奉讀始依吉日也、

廿四日、乙酉、○中略

夜半許坤角倉代燒亡、廐舍太近、然而依風不吹、雜人相集、壞廐舍南庇禦止、廐舍人今兼走來告申、侍男等向其處、余相次走問、小時宰相來、左中將朝任・左衞門權佐資業・丹波守頼任等朝臣來、依近邊所來歟、遠處人不可知、大殿使家業朝臣有御消息、倉代納物問兼成朝臣云、信乃布十餘端許用遣歟、今兼丸云、初到火處、乳垸盛火置倉代下、此事左右思慮未得其意、倉代無納物、不知案內之奸者所爲歟、將傳火於無人所歟、太可怖畏、日來夢想不閑、仍俄修當季仁王講、依經王威驗、脫大災也、彌可奉歸依、余自一昨奉讀仁王經、又其力揭焉也、

廿五日、丙戌、去夜火事思慮難廻、仍令吉平朝臣占、々云、奸心者所爲者、卿相達訪送、大納言俊賢・公任・中納言行成・參議頼定・通任、余參大殿之間、頼定卿來云々、非參議人々來、未剋許參大殿卅講結願、○中略、藤原道長家法華三十講ノコトニカヽル、本月一日ノ條ニ收ム、今日大殿去夜火事數度被命、有芳意之御詞、

○二十七日、堀河邊ニ火アルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔小右記〕○前田家本　五月

四條堀河ノ邊一町餘燒亡ス

藤原實資ノ多武峯物忌ニ於テ寶石院ニ行フ等身六觀音ヲ安置ス坐像二體立像四體實資僧膳ヲ調進ス

廿七日、戊子、曉更堀河東、油小道西、四條大路以南々行一町餘燒亡、

二十九日、庚寅、故太皇太后藤原遵子周忌御法會、

〔小右記〕○前田家本　五月

廿九日、庚寅、今明多武峯物忌、只開東門、今日前太皇大后周忌御法事於寶石院被行之、件院未被奉供養、若此次被供養歟、先日大納言云、安置等身六觀音、而二躰居、今四躰立、未得其意者、若行事人仰佛師等、不仰起居事、奉令造歟如何、僧前一前調備奉之、高坏十二本、加打敷、大破子三荷、手作布廿端、破子四荷出來、而宰相同調備僧前破子二荷云々、仍分遣今一荷、

今日依物忌不可參入之由、度々申達大納言了、

○遵子崩御ノコト、元年六月一日ノ第二條ニ、遵子ヲ山城木幡ニ改葬シ奉ルコト、本年七月十九日ノ第二條ニ見ユ、

三十日、辛卯、丹生・貴布禰兩社ニ、重ネテ祈雨奉幣使ヲ發遣ス、

〔小右記〕○前田家本　五月

卅日、辛卯、○中略

今日重被發遣丹生・貴布禰使云々、雨澤不降、多涉旬日、

左衛門陣前ヨリ發遣ス　馬寮ヲシテ穢ニ觸レザル黑馬二匹ヲ奉ラシム　神祇官人ヲ使トス

〔左經記〕五月

卅日、辛卯、今朝爲祈雨、於左衛門陣前、〔被進カ〕進被奉黑馬二疋於丹生・貴布禰兩社、各一疋、件馬令（藤原重尹）權辨立左衛門陣架中催行、不立床子等云々、宣命清書了不奏、直召使等給之、

〔日本紀略〕後一條院　五月

卅日、辛卯、丹（丹生）・貴（貴布禰）奉幣、各馬一疋、

○兩社ニ祈雨奉幣使ヲ發遣スルコト、本月二十四日ノ第一條ニ、炎旱ニ依リテ、軒廊御トヲ行ヒ、大極殿ニ於テ、仁王經御讀經ヲ修スルコト、六月三日ノ條ニ、二十一社ニ奉幣シテ、雨ヲ祈ルコト、同月十四日ノ條ニ見ユ、

宿莊司櫻原莊ノ下人ヲ毆打ス

中宮大進藤原佐光、大納言藤原實資ニ、中宮御領攝津宿莊司ト同國櫻原莊ノ下人トノ紛爭ニ就キテ、辯疏セントス、

〔小右記〕○前田家本　五月

卅日、辛卯、○中略

中宮大進（藤原）佐光來、不相逢、攝津國櫻原庄下人二人、爲中宮（藤原妍子）宿御庄司大學（屬歟）局正邦（藤原）被打調、

宿莊ハ佐光攝津守ノ任中ニ立ツ　櫻原莊ノ寄人ヲ宿莊ニ編入ス

佐光藤原資平ニ陳辯ス

其事佐光朝臣所爲也、先日示送事由、又遣愁文、無是非、件宿御庄佐光爲攝津守之時所立也、○藤原佐光、攝津守ヲ辭セントスルコト、長和三年二月十六日ノ條ニ見ユ、櫻原庄寄人十人、佐光放免符、而其後可爲宿御庄人之由、改放國符、奇怪事也、

六月

八日、己亥、○中略

（藤原資平）宰相來云、去夕佐光朝臣來、言櫻原庄事、所陳無首尾、頗似無所避、

六月（小盡　壬辰朔）

一日、（壬辰）造酒司、酒ヲ大納言藤原實資ニ頒ツ、

〔小右記〕○（前田家本）六月

一日、壬辰、○（中略）

造酒司進醰一瓶、

三日、（甲午）炎旱ニ依リテ、軒廊御トヲ行ヒ、又、大極殿ニ於テ、仁王經ヲ轉讀セシム、尋デ、僧綱申請シテ、大極殿ニ於テ、重ネテ同經御讀經ヲ修ス、

〔御堂關白記〕○（陽明文庫所藏）六月

三日、甲午、八省被修百口仁王經御讀經、（藤原頼通）攝政參之云々、歸參（大）太內間無御前云々、

八日、己亥、八省御讀經結願後、又僧綱申請無供（初イアリ）御讀經初（初イナシ）、五百口云々、此日雨降、從未時及戌時、二御讀經有盛（感イ）應、○（中略）百口御讀經給度者云々、攝政參八省者、○（陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、）

〔小右記〕○（前田家本）六月

請僧百口藤原頼通八省院ニ參ル僧綱申請ノ五百口無供御讀經度者ヲ給フ

醰酒一瓶

行事源俊賢

藤原實資ノ言ニ從ヒ上下全卷ヲ轉讀セシム

頼通八省院ヨリ參內スルニ御前儀ナシ

一日、壬辰、（藤原實資）宰相來、謂可參內、頃之退去、

○（中略）

宰相重來云、來三日、於大極殿、以百口僧三个日可被轉讀仁王經、爲祈雨、

二日、癸巳、召使來、申明日八省御讀經發願由、

三日、甲午、○（中略）於大極殿、被行百口仁王經御讀經、（祈雨御祈）未剋許參入、宰相在車後、比到昭訓門、召（使カ）文申云、上達部著大極殿座了者、此間猶打鐘、左大辨（源）道方、參入、余（藤原實資）著大極殿座、先是太皇太后宮大夫（源）俊賢・左大將（藤原）敎通、在大極殿座、行事俊賢卿云、攝政有可被參之御消息、被（候）內、相待被參入可始也、小（少）時被參入、上達部起座給立（列カ）東廊、余・俊賢・敎通等也、道方・資平入壁後、攝政著座、次第著、侍從中納言行成（藤原）・中宮權大夫經房（源）・權中納言能信（藤原）・左兵衞督頼定（源）等相從攝政、僧等自東西壇上參入、御導師律師定基、堂童子執花莒、分花僧等、次第如例、余云、此座可全被轉讀上下卷、攝政云、佳事也、卽行事大納言俊賢仰威儀師二局讀畢、三禮著禮盤、行香等如恒、僧侶退下了、攝政起座、次々如之、攝政立留昭訓門內、被問御前事、彼是云、可被著陣座之時、可奉仕御前、（件事於大極殿余所云出、）俊賢・行成等云、可無御前歟者、未著給陣座、從殿上方可參給、仍可無御前儀歟、上官等列昭訓門外、

藤原道長旱魃ヲ憂フ

諸國司公私ノ勤ヲ濟スハズト上申ス能ハ

但シ道長一家ノ事ノミハ勤ムベシ

三箇日ノ百口御讀經ヲ二箇日延行ス

結願

降雨

續イテ五百口御讀經ヲ修ス

攝政止御前儀、仍上官等跪候、攝政入自修明門、諸卿及上官等相從、攝政及上達部參上殿上口、余參上殿上、即退去、今日參入上達部攝政（内大臣）・大納言俊賢・中納言行成・教通・賴宗（藤原）・經房・能信・參ー道方（議）・賴定・資平、

四日、乙未、宰相來云、今朝參大殿（藤原道長）、深被嘆旱災事、在々國々司等云、今年不可濟公私事、可存自身命、但大殿・攝政殿彼一家事許隨堪可奉仕、其外卿相事一切不可承行者、上達部者以封物宛朝暮雜事、已無其辨、何爲々々、

六日、丁酉、左兵衛督來談、（去四月比、見吉想者、下官大慶之想也、）大極殿御讀經今日可有結願、而今二个日被延行云々、○（源賴定ノ夢想ノコト、便宜附載ス、）

八日、己亥、今日大極殿御讀經結願、不參入、宰相來云、○（中略）今日亦於大極殿被始三百（五力）口仁王經御讀經、是僧綱申請不所得可轉讀之由云々、宰相參入、退出之後、可問案內、○（中略、仁海、請雨經法ヲ修スルコトニカ、ル、本月四日ノ條ニ收ム、）入夜宰相注送云、未時御讀經結願、此間雨脚尤盛、諸卿感歎、攝政召左中辨經通（藤原）仰度者事、即傳仰按察大納言、齊信（藤原）、々々仰威儀師、又申時始僧綱申行御讀經、（南京・天台合五百口云々、仁王經、）攝政以下致禮拜、（十餘度許、中略、同上、）○前僧都心譽可請公請著本座之宣旨下也、○（權少僧都心譽、辭任スルコト、元年十二月是月ノ條ニ見ユ、）卷數不被奏、攝政自內被參入、又被歸參、諸

同結願

度者ヲ給フ

兩度共ニ卷數ヲ奏セズ

卿追從、拜禮准先年千口御讀經歟者、○（疫癘祈禳ノ爲メニ、僧千口ヲ大極殿ニ請ジテ壽命經ヲ供養轉讀スルコト、元年六月二十三日ノ條ニ見ユ、）卷數事左少辨經賴（源）云、千口御讀經之時不被奏者、參入公卿攝政・大納言齊信・俊賢・中納言教通・賴宗・能信・參ー道方（議）・賴定・資平、引見故殿（藤原實賴）御日記、臨時百口御讀經初後、厨家陣頭儲饗、又被奏卷數、如季御讀經、近代之人不知前跡歟、

彼日宰相云、公家被行御讀經行香了、（後カ）攝政退坐大極殿中戶北壇上座、（件壇上敷繧繝（彩）端疊、立廻大宗（宋）御屏風、又敷上達部座、東行、掃部所設云々、）更改敷僧等座、了打鐘後、攝政已下著堂前座者、

十一日、壬寅、○（中略）

今日大極殿御讀經、依心神不宜不參、左少辨經賴來、○（中略）經賴云、御讀經結願了、○（中略）者、宰相來云、先參大殿、大納言公任（藤原）卿被參、相共參八省、諸卿未參、大納言除服初參、○（藤原公任、同實資姉ノ服ヲ著スルコト、三月二十二日ノ第二條ニ見ユ、）稱心神惱、從八省參內即退出、御讀經結願、右少將良（藤）賴（原）進講師邊、仰給度者之由、行香如恒、但上達部數度禮拜如初日、不奏卷數、兩度御讀經不奏卷數、太奇事也、

左大辨道方云、近代不奏者、上卿之不知古實歟、今日參入卿相大納言俊賢卿・中納言行成（卿、下同ジ）、教通、・經房、・參ー兼隆（議）（藤原）・道方、

備後守藤原能通水旱損ヲ愁フ

備前守藤原景齊モ異損ノ由ヲ申ス

僧名定

辨私宅ニ於テ闕請ヲ補ス

祈雨ノ由ヲ威儀師ニ仰ス

十二月

三日、辛卯、備後守能通(藤原)來云、去(ミ)月廿九日夜入京、○去ノ字ヲ抹消シテ七ニ改メタルハ、卻ツテ誤ナルベシ、彼夜參大殿、裝束不合、兩三日蟄籠者、陳國水旱損事、今年公事不可敢濟、大殿邊例進外、不可致他勤者、備前守景齊(藤原)云、米五百石獻大殿、三百石獻攝政、公事無術、國之異損、万倍他國、又山階寺(興福寺)御塔材木三千餘物可採進者、○興福寺塔ノ造作始ノコト、七月十一日ノ第三條ニ見ユ、彌迷手足者、

○是ノ本是ノ日ノ記、燒損ノ箇所アリ、京都御所東山御文庫本ヲ以テ補塡ス、

〔左經記〕五月

卅日、辛卯、○中略、丹生・貴布禰兩社ニ祈雨奉幣使ヲ發遣スルコトニカ、ル、五月三十日ノ第一條ニ收ム、及晩源大納言(後賢)被參左仗、被定御讀經僧名、余○經〔執脫カ〕筆、爲祈雨、於大極殿、三个日可讀仁王經也、

六月

一日、壬辰、不他行、依源大納言御命、於私宅補闕請等、

三日、甲午、始自今日三个日、請百口僧、於大極殿、可被行仁王經、仍早旦參八省、堂裝束如常、東廊上達部・上官座皆如例、但無饗、未剋有仰打鐘、公卿入堂、攝政殿御座、諸僧入堂、々童子著座、次上卿召余仰云、依祈雨被行之由可仰威・從者、余卽召威儀師傳宣此旨、

供米

賴通百口御讀經ヲ延行セントシテ道長ノ指示ヲ仰グ

初メ僧綱僧三十口三箇日ノ御讀經ヲ申請ス

五百ノ僧座ヲ東西ニ分ツ

威儀師進僧綱座、傳仰復座、次發願、事了行香、次公卿引被參內、上官列立東廊外、欲御前之間、有仰被留了、

四日、乙未、參八省、令行諸僧供米、僧綱・從日別六斗、凡僧日別四斗、午後頗雷電、入夜歸宅、

五日、丙申、早旦參八省、令行僧供等、次參內、依攝政殿御消息參大殿、是御讀經被延之由也、卽可被延之由有御返事、仍今二日可延之由蒙仰、且仰諸僧次申上卿、又僧綱等令申云、來八日率三十口僧等、於大極殿三个日之間讀經可祈雨事、仰云、依請、件事僧綱相議、法(濟信)務僧正被申也、

七日、參內・八省等、

八日、己亥、今晩陰雲滿天、暴風頻扇、依御讀經結願、早旦參八省、午刻有仰打鐘、次諸僧入堂、此間雨脚滂沱、會集道俗無不隨喜、行道後攝政殿召經通朝臣御座下、被仰諸僧給度者之由、經通卽仰上卿、々々召威儀師、仰給度者之由、諸僧隨喜、次事了行香、僧出、諸卿暫著東廊、攝政殿御坐北渡殿、兼用意御座等、次加敷僧座等、東二百五十口、西二百五十口、次打鐘、諸卿入堂、諸僧入堂、甚雨、此間次堂童子著座、次行道、出西、經西・北・東廊中、入自東方、等事了行香、及晩甚雨、件御讀經僧綱等相議、爲祈雨所請也、始自今日二个日可讀仁王經也、山三百口、奈良百余口、相分入堂、東山、西奈良、(延曆寺)(三)今日不被奏卷數、上卿直以退出、

未知先例、

十一日、壬寅、參八省、綱所御讀經結願、午刻綱所打鐘、上達〔部〕倍入堂、諸僧入堂、行道了白佛之後、右少將良賴進自東方著導師後、仰給度者之由、諸僧隨喜、去寛弘元年、右中將實成從西居導（藤原）師坤仰之、○寛弘元年八月六日ノ第一條參看、事了緇素分散、

〔日本紀略〕後一條院　六月

三日、甲午、軒廊御卜、令卜申炎旱事、今日於大極殿請百口僧、讀仁王經、依祈雨也、

八日、己亥、細雨灑、今日仁王經御讀經結願也、又請僧五百口、自今日、三箇日讀仁王經、

十一日、壬寅、御讀經終、

〔祕密宗要文〕第十五、僧正仁秉、○中略寛仁二年戊午歳、炎旱渉旬、苗稼炬種、因之、或百僧、或三百〔五カ〕僧、於大極殿行雨〔新脱カ〕御讀經、○下略、仁海、請雨經法ヲ修スルコトニカ、ル、本月四日ノ條ニ收ム、

〔北院御室日次記〕一○山城　十日、〔壽永元年十一月〕丁丑、○中略事歟

大外記賴業（清原）勘申神今食并新嘗會以前被行佛前例、

○中略

神今食以前ニ佛事アリ

五百口御讀經ハ三箇日

予重勘舊記、又有先例、（守覺法親王）

○中略

同二年六月三日、甲午、爲祈雨、以百口僧、三箇日、於大極殿被轉讀仁王般若經、（寛仁）

○神今食ノコト、本月二十一日ノ條ニ見ユ、

○備後等ノ諸國司、水旱損ヲ愁フルコト、便宜合敍ス、炎旱ニ依リテ、祈雨奉幣使ヲ發遣シ、諸社諸國ニ於テ、御讀經ヲ修セシムルコト、五月二十四日ノ第一條ニ、重ネテ祈雨奉幣使ヲ發遣スルコト、同月三十日ノ第一條ニ、仁海ヲシテ請雨經法ヲ、安倍吉平ヲシテ五龍祭ヲ修セシムルコト、本月四日ノ條ニ、大神宮以下ノ二十一社ニ奉幣シテ雨ヲ祈ルコト、同月十四日ノ條ニ、旱害ニ依リテ、相撲節ノ音樂ヲ停ムルコト、七月二十七日ノ條ニ見ユ、

四日、乙未、炎旱ニ依リテ、神泉苑ニ於テ、阿闍梨仁海ヲシテ請雨經法ヲ修セシメ、主計頭安倍吉平ヲシテ五龍祭ヲ行ハシム、又、左右兩獄ノ輕囚ヲ赦ス、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　六月

獄囚二十一人ヲ免ス

降雨

藤原道長同家業ヲ仁海ノ許ニ遣シテ慶賀ス

請雨經法結願

四日、乙未、〔被免左右獄囚者廿一人イ〕左右獄暫犯者廿一被免、是依旱也、又今夜初請雨經法、仁海修、又祭五龍、吉平、〔安倍〕

八日、己亥、○中略、大極殿ニ於テ、仁王經ヲ轉讀セシムルコトニカ、ル、本月三日ノ條ニ收ム、此日雨降、從未時及戌時、二御讀經有盛應、〔感イ〕又仁海御修善等所致也、〔入夜以家業遣仁海許云慶イ〕以家業入夜仁海許遣慶云、〔藤原〕

十二日、癸卯、○中略、從八日後、雖有雨氣、不雨降、

十三日、甲辰、從未時雨降、仁海請雨經御修善結願、尤有感應、

十四日、乙巳、通夜雨降、辰時深、〔雨イアリ〕終天陰、〔日イアリ〕時々微雨降、

十五日、丙午、終日微雨降、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕○前田家本　六月

一日、壬辰、○中略

宰相重來云、〔藤原資平〕來三日、○中略、大極殿ニ於テ、仁王經ヲ轉讀セシムルコトニカ、ル、本月三日ノ條ニ收ム、又從彼日、於神泉苑、可行請雨經法之事、今日被仰阿闍梨仁海了者、

三日、甲午、○中略、同上、今日攝政〔藤原頼通〕曰、從明日於神泉苑、以阿闍梨仁海被行請雨經法、

四日、乙未、○中略

西北ニ雷鳴ヲ聞クモ京洛ニ降雨ナシ

第五日ニ至リテ降雨

仁海初メテ祕法ヲ修シテ驗アリ

諸卿感嘆シテ仁海ヲ僧綱ニ任ズベシト言フ

藤原實資家侍所ノ納涼

阿闍梨仁海行請雨經法、吉平朝臣奉仕五龍祭、皆於神泉苑從今日行之、

申時許、西北方陰雲漸起、雷聲時發、而雨不降、疑丹波若雨歟、

五日、丙申、昨日依旱灾原免左右獄輕犯者云々、申時許、乾方陰黑、小雷、若彼方雨歟、

六日、丁酉、○中略　申剋許、乾・坎・巽方黑雲發、彼方々雷電、若降雨歟、京洛只如塵下、卽厶、〔止カ〕

七日、戊戌、從午剋許、天有陰雲、東風頻扇、午後天晴、無雨氣、子夜以後風吹、

八日、己亥、今日大極殿御讀經結願、○本月三日ノ條參看、不參入、○中略　神泉御修法間、甘雨快降、

〔空海〕弘法大師遺法驗德揭焉、阿闍梨仁海眞言勝輩、今初修祕法、令降甘雨、尤可歸依、仍送書狀、有報也、入夜宰相注送云、未時御讀經結願、此間雨脚尤盛、諸卿感歎、○中略　人々云、仁海靈驗甚以揭焉也、早可被任僧綱云々、○中略

天陰、黑雲西北行、時々小〔少〕雨、午後普雨、入夜止、〔後カ〕被聞、〔藤原道長〕大殿使家業朝臣、被示仁海闍梨所降雨悅事、

十日、辛丑、侍所男等、隨身食物、於泉邊納涼、時々天陰、雨不降、○藤原實資家從者ノ納涼ノコト、便宜附載ス、

雨少キニ依リ請雨経法ヲ二箇日延行ス

結願

十一日、壬寅、傳聞、神泉御修法今日可結願、而依無雨氣、今二箇日被延行云、〇中略左少辨経頼（源）來、〇中略経頼云、御讀経結願了、〇本月三日ノ條參看、但神泉御修法今二箇日被延行者、

十三日、甲辰、今日神泉御修法結願、似有驗、從申剋許雨脚降、時々浮雲起、天氣不靜、從未時許風吹、塵埃如雲、申時剋風止、雨脚始降、終霄不止、非甚雨、

十四日、乙巳、〇中略神泉御修法已有驗、可被賞阿闍梨云々、

朝間雨脚甚密、午後微雨、

十五日、丙寅（午）、〇中略、藤原道長、祇園感神院ニ詣スルコトニカ、ル、本月十五日ノ條ニ收ム、宰相申剋許歸來云、大殿只今歸給、此間雨脚不止〇中略云々、

〔左經記〕六月

四日、乙未、〇中略午後頗雷電、〇中略始自今日、於神泉苑、七个日被修請雨經法、爲祈雨也、以阿闍梨仁海被行也、又被免未斷囚人等云々、是皆依旱魃也、

六日、午後戌亥・北・丑寅等方雨降、不他行、

結願ノ日ヨリ大雨アリ

八日、己亥、今晩陰雲滿天、暴風頻扇、〇中略、大極殿ニ於テ、仁王經ヲ轉讀セシムルコトニカ、ル、本月三日ノ條ニ收ム、及晩甚雨、

十一日、壬寅、〇中略、同上、神泉御修法二个日被延云々、

十三日、甲辰、神泉御修法結願、午後陰雲忽起、雨脚微々降、入夜如泼、終宵不休、御修法靈驗於是揭焉也、誰人不隨喜哉、

十四日、乙巳、甚雨、〇中略降雨終日不休、

十五日、丙午、降雨、

〔日本紀略〕後一條院　六月

四日、乙未、於神泉苑、以阿闍梨仁海修請雨經法、七箇日、今日有五龍祭、免輕犯之者、

六日、丁酉、雷電、北山雨廻、鴨河水僅出、

八日、己亥、細雨灑、

十日、辛丑、請雨經法可終、然而依無降雨之應、二箇日被延之、

十三日、甲辰、神泉苑御修法結願、

〔祕密宗要文〕第十五、僧正仁襲、〇中略寛仁二年戊午歲、炎旱涉旬、苗稼炬種、因之、或百僧、或三百僧（五カ）、於大極殿行雨（新脱カ）御讀經、〇本月三日ノ條參看、始從天台・南京、處々靈驗都鄙有

家業ハ勅使ナリトノ説
三日三夜ノ大雨

靈諸神社奉幣祈雨、○五月二十四日ノ第一條參看、専無感應、爰仁海六月四日俄蒙宣旨、於神泉苑奉修請雨經法、第五日雷起、四方大雨降注、即給慶賀勅使勘解由次官藤原家業、宣旨云、法驗掲焉、雨猶不足、今二箇日可延修者、仍延修矣、始從第九日巳時、三日三夜大雨降注、七道諸國播植苗稼、仍任律師、○八月十六日ノ條參看、

〔祈雨日記〕後一條院

寛仁二年六月一日宣旨、以仁海於神泉苑令勤修祈雨法者、辭退三度、重宣下、仍從四日率伴僧奉修件法、第四日雷一聲、(マヽ)第五日一振、(マヽ)第六日雷響振自愛宕山降雨、七日陰、八日四方黑雲遍滿、降雨至夜半、賀雨勅使勘解由次官家業奉宣云、今二日可延引者、同十三日結願、十三・四・五日大雨、十六日以後旱、○祈雨法記同ジ、

〔請雨經法日記〕勸賞事

○中略

仁海

寛仁二年六月四日修之、于時阿闍梨、七日陰、八日黑雲遍滿、雨至夜半、○中略

請雨經法勤修時代等事

○中略

後一條　仁海四度、

寛仁二年

結願日數事

寛仁二年九ヶ日、

〔江談抄〕一公事　神泉苑修請雨經法事

○中略

又云、阿闍梨仁海寛仁二年六月四日始、五箇日之間雨降、可任律師之狀蒙宣旨、八月十一日任權律師、陰陽師安倍吉平亦勤五龍祭云々、

○覺禪鈔・仁王經法日記・祕鈔問答・元亨釋書・東寺長者補任・東寺王代記・眞言烈祖表白集・東國高僧傳等、異事ナキヲ以テ略ス、炎旱ニ依リテ、大極殿ニ於テ、仁王經ヲ轉讀セシムルコト、本月三日ノ條ニ、二十一社ニ奉幣シテ、雨ヲ祈ルコト、本月十四日ノ條ニ、仁海ヲ賞シテ、コレヲ權律師ニ任ズルコト、八月十六日ノ條ニ見ユ、

十四日、乙巳、大神宮以下ノ二十一社ニ奉幣シテ、雨ヲ祈ル、

丹生・貴布禰両社ニハ藏人ヲ使トス

通例ハ諸社奉幣ノ際ノ両社ノ使ハ神祇官人平野使藤原資平事藤原行成摂政ノ隨身ヲシテ使部ヲ共ニ使ヲ催サシム

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　六月

十一日、壬寅、定祈雨奉幣使云々、

十四日、乙巳、通夜雨降、辰時深、〔雨イアリ〕終天陰、〔日イアリ〕時々微雨降、此日諸社奉幣、丹生・公舟〔貴〕藏〔使〕人使、○陽明文庫所藏古藏人イ寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕○前田家本　六月

十二日、癸卯、○中略

秉燭後宰相〔藤原資平〕來云、○中略　又云、十四日被立諸社奉幣使、祈雨事云々、

十四日、乙巳、今日依〔マヽ〕雨被立諸社使、後聞、以藏人被差遣丹生・貴布禰両社云々、被立諸社使之時、差遣神祇官之例也、殊被立二社之時、遣藏人者也、〔藤原〕行成卿云、近代不聞之事也云々、但被仰有例之由、又非行事人之可〔不カ〕知云々、藏人同於八省給宣命云々、宰相平野使云々、入夜宰相來云、只今自平野罷歸、今日事中納言行成行之、使々多有故障、暮〔參カ〕權門有不勤者、申取〔藤原頼通〕摂政御隨身、相則〔副カ〕使部令召遣、行成〔卿カ〕可云、當時公事上薦被行、還可輕々者、○中略

朝間雨脚甚密、午後微雨、

〔左經記〕六月

十二日、癸卯、早旦有召參內、摂政殿仰云、來十四日可立祈雨奉幣使、廿一社、只今參大殿〔藤原道長〕申此由、即仰侍〔行成〕從中納言可令定使、即參大殿申御消息旨、次參中納言御許、申仰旨歸參、午後中納言令參給天、於左仗召陰陽寮令勘日時、兼被定□筆、○一本、コノ所ノ首附ニ「辨執筆事」ト見ユ、即使定及ビ日時

□〔日カ〕時相加入筥被奏、持參里第、仰依請、印〔即カ〕下奉上卿、次下給外記、入夜退出、丹生・貴布禰〔マヽ〕而兩社ニ黑馬ヲ奉ル

藏人可爲使□〔由カ〕可載宣命、兼又可奉黑馬□〔由カ〕同可載者、

十四日、乙巳、甚雨、早旦參八省、催具幣物等、令裏設如例、及未剋侍從中納言於八省被□〔立カ〕使々如常、但丹生・貴布禰使藏人、丹生兵部丞〔式カ〕頼宣、貴布禰典藥助保相、〔藤原〕同參八省、賜宣命・幣・馬等重日ヲ避ケズ

發行、幣・馬等皆行事所催設也、春日使頼〔藤原カ〕政遲參、仍入夜賜宣命・幣等、□〔使カ〕以下即出、降雨終日不休、

長元元年七月

十三日、丙午、天晴、參關白〔頼通〕殿・內等、○中略　十八日〔辛亥〕於大極殿欲行祈雨御讀經、○長元元年七月十八日ノ條參看、而彼日重日也、重日行如此事之例可令勘者、資〔源〕通仰大夫外記頼〔清原〕隆、々々申云、去寛仁二年七月十四日〔六〕、乙巳、依炎旱被立廿一社幣使云々、

〔日本紀略〕後一條院　六月

十四日、乙巳、奉幣伊勢大神宮、祈雨澤、辭別有御卜之由、大神宮宣命ノ辭別ニ軒廊御卜ノ由ヲ載ス

○炎旱ニ依リテ、丹生・貴布禰兩社ニ、祈雨奉幣使ヲ發遣スルコト、五月二十四日ノ第一條及ビ同月三十日ノ第一條ニ、同ジク、軒廊御トヲ行フコト、本月三日ノ條ニ、天變及ビ炎旱ニ依リテ、仁王會ヲ修スルコト、同月二十七日ノ第一條ニ、丹生・貴布禰兩社ニ、止雨奉幣使ヲ發遣スルコト、七月十九日ノ第一條ニ見ユ、

十五日、丙午、祇園臨時祭、仍リテ、前太政大臣藤原道長及ビ攝政内大臣同頼通、感神院ニ詣ス、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　六月

十五日、丙午、終日微雨降、詣感神院、此間雨下、攝政(藤原頼通)被座、共上達部十一人許、以神馬永獻、別當法印(院源)儲饗、院家修理盛、御堂西立廊(マヽ)雜、自餘非可云、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔小右記〕○前田家本　六月

十四日、乙巳、○中略宰相(藤原資平)從明日二个日宅物忌、明日爲候大殿(藤原道長)御共、今夜不可宿宅、仍宿余居、(藤原實資)

十五日、丙寅、凶會(午)今日祇薗御會、仍奉幣、子女同奉幣、宰相參大殿、緣扈從參給祇薗之御共、左中辨(藤原經通)來云、可騎之馬極凡者、借與厩馬了、

神馬ヲ永ク奉ル

感神院ノ修理

藤原實資ノ奉幣

宰相申剋許歸來云、大殿只今歸給、此間雨脚不止、被奉金銀幣・例幣・神馬幷十列、至神馬被長奉、又有御諷誦、給院家司等祿、法印院源祈(祇)候院、儲饗饌、攝政引率上官等被參候大殿、御共之卿相左大將教通(藤原)・左衞門督頼宗(藤原)・中宮權大夫經房(源)・權中納言能信(藤原)・右衞門督實成(藤原)・伊豫守兼隆(藤原)・左大辨道方(源)・修理大夫通任(藤原)・右大辨朝經(藤原)・資平云々、

〔左經記〕六月

十五日、丙午、降雨、大殿・攝政殿相共令詣祇園給、攝政殿御共上官等供奉如常、及午後令歸給、

十九日、庚戌、彗星現ル、仍リテ、陰陽寮、勘文ヲ上ル、

〔小右記〕○前田家本　六月

十九日、庚戌、今夜亥方有長星、彗星云々、在司天臺勘文、

廿日、辛亥、長星如去夜、

廿九日、庚申、○中略

彗星彌長、此變異前跡不吉云々、

〔左經記〕六月

廿三日、甲寅、○中略自去十八日、戌亥角彗星出、七星乃從上第四星乃下ニ當二坐、長一丈許、傳聞、吉昌(安倍)說云々、如此

諷誦ヲ修ス

藤原頼通政官ヲ從フ

扈從ノ公卿

長星西北方ニ現ル

彌長シ

不吉

七星ノ第四星ノ下ニ當ル

日ヲ経ルモ消エズ

異星、先例〔奉カ〕參勘文之〔後カ〕收、不經幾滅藏云々、而奉勘文之後、及數日不滅藏者、

〔小記目錄〕○九條家本

同〔年〕□○寛仁二年　七月一日、彗星事、

彗星出現後ノ凶事

〔諸道勘文〕四十五彗星上

勘申彗星年々事

略○中

寛仁二年六月十九日、彗星見、經數日長二丈餘、

同年十二月十四〔七〕日、敦康親王薨、○十二月十七日ノ條參看、

同三年三月廿一日、前太政大臣藤原道長公出家、○三年三月二十一日ノ條參看、

同年四月八日、刀伊賊徒來侵由、太宰府言上、○三年四月十七日ノ條參看、

同四年、自春至夏、皰瘡殊甚、○四年是春ノ條參看、

同年八月廿二日、大風、○四年八月二十二日ノ條參看、

同年九・十兩月、天皇煩皰瘡、○四年九月十三日ノ條等參看、

略○中

右依仰、大略勘申如件、

長治三年三月四日（嘉承元年）

〔中右記〕長承元年九月

六日、略○中

延喜以後彗星見年々、

略○中

寛仁二年六月十九日

〔山槐記〕治承二年正月

七日、壬寅、略○中

彗星年々、

略○中

寛仁二年六月廿三日見、

同年十二月、敦康親王薨、

同三年、前太政大臣道長出家、

寛仁二年六月十九日

大外記中原朝臣師遠

○内閣文庫本ヲ以テ校正ス、

四月、刀伊賊來候、(侵カ)

八月廿二日、夜、大風、(四年)

九・十兩日、天皇煩疱瘡、(月)

〔一代要記〕(後一條天皇) 十九日彗星見、長二丈餘、(六月) 經數日、

○天變ニ依リテ、臨時仁王會ヲ行フコト、本月二十七日ノ第一條ニ見ユ、

二十日、辛亥、御體御卜、

〔日本紀略〕(後一條院) 六月

廿日、辛亥、御體御卜、○式日ハ十日ナリ、

○內裏ニ死穢アルコト、五月十二日ノ條ニ見ユ、

前太政大臣藤原道長、病ム、

〔小右記〕○(前田家本) 六月

廿一日、壬子、早旦宰相(藤原資平)來云、去夕大殿(藤原道長)御胸發給、卽平復、從今曉重發惱給者、乍驚辰剋許參入、宰相同車、諸卿多參入、攝政(藤原頼通)被談發給之案內、其彼左大將(後カ)(藤原)敎通、傳御消息、午剋許退出、中宮大夫(藤原)道綱、束帶參入云、○下略、藤原道綱、參內スルコトニカ、ル、本月二十一日ノ條ニ收ム、

長サ二丈餘

藤原實資等ノ見舞

廿二日、癸丑、故宮(大皇太后藤原遵子)御改葬事ノ○七月十九日第二條參看、問達大納言(藤原公任)、御返狀云、○中略 又云、大殿御心地猶重云々、先々早平復給、此度不然、心僧都(心譽)終夜加持無驗云々、左將軍昨日心地重惱退出、今朝頗宜云々、昨日太不便云々、○中略 入夜宰相又來云、先參大殿、御心地未有平復、心譽・源憲等加持聲太高、

廿三日、甲寅、呼懷(源)信朝臣、問大殿御心地案內、猶未快者、又云、去夕種々邪氣顯露之中、有金峯山託宣、被祈申可參給由、于今不參入之督(咎カ)者、此事頗奇而已、或云、爲被祈申召遣彼山撿挍金昭了、若寄名於金峯靈物等所言歟、

廿四日、乙卯、早旦懷信朝臣傳大殿御報云、所惱未快、不似前々頗有熱氣者、是去夕命者、儀(橘)懷朝臣來云、今日大殿白地渡坐土御門、○本月二十七日ノ第二條參看、御心地有平氣歟、

或云、大閤(道長)所惱有貴布禰明神之祟、是院(小一條院教明)御息所(藤原延子)々祈也、謂御息所者左府(藤原顯光)二娘、○小一條院、藤原道長ノ女同寛子ト婚シ給フコト及ビ院ノ女御藤原延子ノ父同顯光、延子ノ髮ヲ切リ、幣ヲ捧ゲテ呪詛スルコト、元年十一月二十二日ノ第二條ニ見ユ、大閤對神明曰、彼人祈願用帋御幣許歟、我者引率子姪參社頭、可奉十例(列カ)等、可有神感乎、可仰外護乎者、有承諾之神答云々、實不難知之事等也、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏 六月

藤原敎通病ム

心譽・源賢等道長ヲ加持ス

金峯山ノ託宣アリ

金峯山檢校金昭ヲ召シテ祈ラシメントス

發熱

貴布禰明神ノ祟

小一條院女御ノ呪詛ナリトノ說アリ

道長一族ヲ率キ參詣セシメント祈リテ許ヲ得タリトノ說アリ

道長熱物ヲ患フ

十二日、癸卯、從土御門參中宮（藤原妍子）幷院、日來冠際物熱不能着冠、仍日來入參（不參入イ）、○陽明文庫所藏古寫本（マヽ）ヲ以テ校ス、

○道長、熱物ヲ患フコト及ビ藤原教通、病ムコト等、便宜合敍ス、道長、胸病ヲ患フコト、閏四月十六日ノ第二條ニ、眼病ノコト、十一月六日ノ條ニ見ユ、

内裏觸穢ニ依リテ延引ス

二十一日、壬子、月次祭・神今食、

〔小右記〕○前田家本　六月

十二日、癸卯、○中略

秉燭後宰相來云（藤原資平）、○中略又云、依内裏穢、可被延行神今食○中略、臨時仁王會ノコトニカ、本月二十七日ノ第一條ニ收ム、之由、有略定云々、

廿日、辛亥、○中略去十一日神今食・月次祭、依内裏穢、今日（マヽ）被延行、

藤原道綱廢務ナルニ參内シテ嘲笑セラル

廿一日、壬子、○中略、藤原道長、病ムコトニカ、本月二十日ノ第二條ニ收ム、乍驚辰剋許參入、宰相（藤原實資）同車、諸卿多參入、○中略、同上、中宮大夫（藤原）道綱、束帶參入云、病後未參内、今日初參入者、今日神今食、廢務、而大納（道綱）言參入、諸卿或屬目、或嘲咲云々、

〔左經記〕六月

辨官不參供給宣旨ニ辨ノ署名無キニ依リ幣使進發スル能ハズ辨追ツテ加署ス

十日、依内裏穢、神今食延引、有大祓事、

廿二日、癸丑、○中略今朝史（津守）致任來向云、右衞門督（藤原實成）御消息云、昨日月次祭幣使供給宣旨、依無著行辨、于今未加署名云々、仍使未進發者、雖不著行、彼宣旨加署有何事哉者、仍供給宣旨加署名已了、

延引ノ由ノ大祓ヲ行フ

〔日本紀略〕後一條院　六月

十一日、壬寅、○中略今日月次祭・神今食延引、依内裏穢也、於八省院東廊大祓、

廿一日、壬子、月次・神今食、去十一日穢限内也、仍延引今日所行也、

○内裏ニ死穢アルコト、五月十二日ノ條ニ見ユ、

圓教寺ノ燒亡ニ依ル

二十二日、癸丑、一條天皇ノ奉爲ノ法華御八講ヲ、圓教寺ヨリ、圓融寺ニ移シ行フ、

〔小右記〕○前田家本　六月

廿二日、癸丑、○中略

今日一條院御八講始、年來於圓教寺被修之、彼寺燒亡、○閏四月十二日ノ條參看、仍今日於圓融院被修云々、聊依有所勞不參入、老人苦熱間、强扶參入不可耐之故也、宰相（藤原資平）來、可披露之由

大臣以下參列ス

結願

藤原道長太皇太后宮ニ在ル法華經ヲ濟信ノ許ニ送ラシム

神今食ノ後ニ仁王會有ルベシ

藤原頼通ノ指示

相含訖、入夜宰相又來云、先參大殿（藤原道長）、○中略 次參圓融寺、左大臣（藤原顯光）・右大臣（藤原公季）及卿相等被參入、

余障傳示左（大）右（源）辨道方了、

廿五日、丙辰、今日一條院御八講畢日、依當八卦忌日不參入、

〔御堂關白記〕

○陽明文庫所藏　六月

十九日、庚戌、源大納言（後賢）相示、候大（太）皇太后宮一條院（奉爲一條院イ）御爲御八講時御經可送仁和寺（濟信）僧正房、是圓教寺（依イアリ）御八講御經燒亡、仍爲用御八講也、又長莚召人々、又可送、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

二十七日、戊午、天變及ビ旱魃ニ依リテ、仁王會ヲ行フ、

〔小右記〕

○前田家本　六月

十二日、癸卯、○中略

秉燭後宰相（藤原資平）來云、○中略、祈雨奉幣使ヲ發遣セントスルコトニカ、ル、本月十四日ノ條ニ收ム、又云、依內裏穢、○內裏ニ死穢アルコト、五月十二日ノ條ニ見ユ、可被延行神今食、○神今食ヲ行フコト、本月二十一日ノ條ニ見ユ、其後可被行仁王會之由、有略定云々、

廿一日、壬子、○中略 今日攝政（藤原頼通）曰、依有彗星變、○彗星現ルヽコト、本月十九日ノ條ニ見ユ、可被行仁王會、廿三日定僧名、廿七日許被行宜歟者、

廿五日、丙辰、○中略

行事所ノ加供ノ廻文校ノ藤原齊信

百ノ高座ヲ立ツ大屋寺故無クシテ不參ノ僧ハ長ク公請ヲ停ムベシ

遷御ノ後未ダ出御無キヲ以テ紫宸殿ノ清涼殿ノ座ナシ

大祓

廿七日仁王會加供廻文、從行事所送之、僧綱一口、凡僧五口、於大極殿可被行之、午二點發願、撿挍

大納言齊信（藤原）・參ー左大辨道方（議、下同ジ）（源）、

（頭書）「天晴、」

廿七日、戊午、今日於大極殿立百高座、被行仁王會、不行御在所并諸宮、但不止神社・所謂大屋寺（大宅）已下、宣旨文云、

依旱魃・天變所修件會也、若故障非分明不參之僧侶、永停止公請、重以科責者、

撿挍（撿挍）大納言齊信・參ー左大辨道方、

今日不參入、加供送文令付行事所、僧綱一口、凡僧五口、

（頭書）「天晴、」

廿八日、己未、早朝宰相來云、昨日大極殿仁王會如恒、但不被行御所、參入卿相右大臣・大納言齊信・俊賢（源）・中納言行成（藤原）・實成（藤原）・參ー道方・頼定（源）・公信（藤原）・通任（藤原）・朝經（藤原）・資平、

日沒事了、

〔左經記〕

六月

廿七日、戊午、○中略、藤原道長、上東門第ニ移徙スルコトニカ、ル、本日ノ第二條ニ收ム、又公家於大極殿被修仁王□（會カ）、□遷宮之後○新造內裏ニ遷御アラセラルヽコト、四月二十八日ノ條ニ見ユ、未出御、仍於南殿無此講云々、又清涼殿同無云々、

〔日本紀略〕

後一條院　六月

廿六日、丁巳、於八省院東廊大祓、

廿七日、戊午、仁王會、

○炎旱ニ依リテ、大極殿ニ於テ、仁王經ヲ轉讀セシムルコト、本月三日ノ條ニ、二十一社ニ祈雨奉幣使ヲ發遣スルコト、同月十四日ノ條ニ見ユ、

前太政大臣藤原道長、新造上東門第ニ移徙ス、

上東門第ノ寢殿ニ鴨集ルノ怪異アリ

豫定セル四月二十八日ハ内裏遷御ト重ナル

〔小右記〕○前田家本　四月

十四日、丁丑、○中略　頼祐（藤原）朝臣云、大殿（藤原道長）移給上東門第不定由云々、去月新造上東門第寢殿上鴨集、其物忌廿七・八日、（廿八日カ）々々渡給日也、其物忌攝政（藤原頼通）重可被慎、破物忌不可被參恠所、依此事可延引由云々、

十五日、戊寅、○中略

遷宮○新造内裏ニ遷御アラセラルコト、四月二十八日ノ條ニ見ユ、并大殿御移事等、問達大納言（藤原公任）御許、其報書狀云、先日前太相府（道長）宣、廿七日滅門、遷宮如何、若是不快、廿八日私移從（徙カ）、非無憚、彼此被申滅門例、○中略　昨日依召參入、此事被定、吉平（安倍）奉勘文、○中略　廿八日遷御可無思者（忌カ）、大略一定也、私御度彼日有晝時者、其時有行幸、夜時度々（之カ）如何者、未被一定、大略如此者、

閏四月

寢殿ノ造營ヲ受領ニ配當スル源頼光一切ノ調度裝束ヲ獻ズ

道長新第ヲ覽ル

十二日、甲辰、資平（藤原）○宰相來稱可參大殿、即退去、黄昏重來云、大殿被召載御車後、坐土御門第覽造作、

六月

十二日、癸卯、○中略

秉燭後宰相來云、參大殿、即坐土御門殿、次參中宮（藤原妍子）幷院（小一條院教明）給、候御共、

廿日、辛亥、○中略

土御門殿寢殿以一間始自南庇至北庇之間也簀子・高欄相加、配諸受領不論新舊撰勘事者（堪カ）、令營（營カ）云々、未聞之事也、造作過差万倍往跡、又伊与守頼光（源）家中雜具皆悉獻之、厨子・屏風・唐櫛笥具・韓櫃・銀器・鋪設・管絃具・劔、其外物不可記盡、厨子納種々物、辛櫃等納夏冬御裝束、件唐櫛笥等具皆有二具、又有枕苞等、屏風二十帖・几帳二十基云々、希有之希有事也、文集雜興詩云、小人知所好、懷寶四方來、姧邪得藉手、從此幸門開、古賢遺言、仰以可信、當時大（道）閤（長）德如帝王、世之興亡只在我心、與吳王其志相同、頼光所獻雜物色目、人々寫書宛如除書、彼日（後カ）寫書注付而已、獻万石數千疋了者多有其輩、未聞如此事、因希有所注付也、

藤原實資雜興詩ヲ想ヒテ慨歎スル道長ノ威帝王ノ如シ人々頼光獻物ノ目錄ヲ爭ヒ寫ス

御帳一具、帷懸角四、鏡二面、御枕御劔一腰、二階一脚、唐匣一口、御鏡幷苞、鏡臺、御泔坏

京中ノ人々擧リテ見物ス

左ヲ右ヲ近シテ衛府ヲ以テ府物場ノ埒ヲ結ハシム

并臺、御硯莒一具、火取一具、銀籠・爇、薫・箸、唾壺并莒、御脇息一本、御厨子五雙、四尺、二雙水納上帋、一雙連子、納檀帋等、二階厨子一雙、番〔蕃〕繪、納薄樣、○番繪ノ二字、當ニ小字ニ作ルベシ、小厨子一雙、蒔繪、納色紙、置物棚厨子一雙、中持辛御櫃二合、納、

御衣櫃二懸、納、御冠莒四合、二合番〔蕃〕繪置口、二合蒔繪張莒、御莒二合、納、搔擧莒一合、香辛櫃一雙、番〔蕃〕繪、納琴絃・足津緒等、御衣莒一合、巾莒一合并臺、御衣柯一本、塗竿一具、御琴二張、箏〔筝カ〕・和、御鞍一具、御屏風廿帖、四尺十二帖、五尺八帖、御几帳廿本、三尺二、四尺十八、御器一具、加子、銚御臺十四本、大十、小四、御盤十枚、大・中・小、朱高坏六十、懸盤三十、御手洗十四、大・少〔小〕、御椋廿口、大・少〔小〕、打敷・貫簀等、炭取一合、燈爐五、加網、御大壺一雙、御桶一具、尾箒二枚、

或云、中持辛櫃・衣櫃等夏冬朝衣并宿衣・冬直衣等相分納、或有唐綾等裝、直衣用唐綾云々、件物當日以數多夫運進上東門第云々、連日京中人到彼第見風流、不能比肩、還可謂恠歟、彼〔後カ〕々可驗、

廿三日、甲寅、○中略　將曹正〔紀〕方申云、中將兼經〔藤原〕召仰云、大殿被仰云、土御門埒廿七日以前可令結構者、新物可用府物者、令採埒木可經數日、遣日不幾、何平〔拳カ〕仕乎者、左近府同相分令結者、

道長鋪設及ビ作庭ノコトヲ指揮スル數百ノ夫ヲ以テ大石ヲ曳ク民家ヲ壞リテ轉ニ用フ

田ノ用水ヲ第内ニ引入ル

廿四日、乙卯、○中略、藤原道長、病ムコトニカ、ル、本月二十日ノ第二條ニ收ム、儀懷〔橘〕朝臣來云、今日大殿白地渡坐土御門、御心地有平氣歟、

廿六日、丁巳、○中略

入夜宰相重來云、參大殿、被坐上東門第、被行寢殿御裝束并立石・引水等事、攝政已下被參入、主人〔道長〕昇降容易、甚以輕々、卿相追從、寸步不志〔去カ〕、家子達令曳大石、夫或五百人、或三四百人、法間〔此カ〕京中往還人不靜、追執令曳、不示堪〔可カ〕、男女亂入下人宅、放取戸并支木・屋壓木・敷板等、以敷板・戸等敷石下、爲轉新、日來東西南北曳石之愁、京内取煩愁苦無極、又止養田之水、强奪入家中、嗟呼々々、不念稻苗死歟、可詠文集雜興詩、尤爲鑒誡、

家司藤原惟憲宅モ新造シテ同時ニ移徙ヲ行フ

戌刻移徙

廿七日、戊午、○中略

今夜大殿移給上東門第云々、春宮亮惟憲〔藤原〕宅在大殿西隣、新造、○藤原惟憲ノ宅ヨリ出火シテ、上東門第等燒亡スルコト、長和五年七月二十日ノ第三條ニ見ユ、今夜同時移徙、万人所奇、○下略、法興院法華八講ヲ延引スルコトニカ、ル、七月二日ノ條ニ收ム、

廿八日、己未、早朝宰相來云、昨日、○中略、仁王會ノコトニカカル、本日ノ第一條ニ收ム、日沒事了、行成〔藤原〕已下參大殿、依御移徙事、兩大納言〔藤原齊信・源俊賢〕先參上東門第、待候移給云々、戌剋移給也、於西門外整移徙

一家ノ中藤原頼宗ノミ參ラズ
第一日參列ノ公卿

衆人頼光獻物ノ搬入ヲ見物ス
實資第二日ニ參入ス

饗饌

擲采ノ賭物ハ薄様紙

第三日

雑具、反閇等事如恒、家子次第列、以攝政爲上首、左衛門督頼宗(藤原)不參入、人々疑云、依可家子次第連濫歟(違歟)、或卿不甘心者、於西對有諸卿・雲上人饗、又有擲采之戯、參入諸卿攝政・大納言道綱(藤原)・齊信・俊賢・中納言行成・教通(藤原)・經房・能信(藤原)・實成(藤原)・參議兼隆(藤原)・道方(源)・頼定(源)・公信(藤原)・通任(藤原)・資平、頼光進獻御調度、以件物等皆爲新殿之用、悦氣殊甚云々、從頼光宅持連進獻、觀者如堵、道路以目云々、西剋許參大殿、此間小雨、々卿(公カ)兩三參入、以二位宰相兼隆、被命云、只今裝束可相對、小(少)時攝政被參入、主人出居西對西面、攝政以下坐列、令居上達部・殿上人饗、西對南庇爲上達部座、康辰(廊カ)爲雲上人座、秉燭後主人著彼座、次攝政及諸卿次第著座、其後居主人御前物、朱漆折敷、作付高坏四本、攝政前相同、以次三本、殿上人懸盤、皆是頼光朝臣所獻云々、被立四尺屏風、是又頼光朝臣所獻云々、一巡後居汁物、下箸、次二巡了有擲采之遊、以薄様帋・上帋等爲賭物、了時剋推移、各々分散、參入諸卿攝政・大納言道綱・齊信・俊賢・中納言行成・教通・經房・能信・實成・參議兼隆・道方・公信・通任・朝經(藤原)・資平、々々乘余車尻(藤原實資)退出、

今日巡行、主人、次余、次攝政、次大納言道綱、余著外座、攝政・道綱卿在奥座、仍主人先擬下官、

廿九日、庚申、○中略、内裏ニ落雷スルコトニカ、ル、本月二十九日ノ第二條ニ收ム、參内、○中略西終上達部相共參大殿、

○中略臨秉燭之間、參著大殿、先是卿相多參、其後攝政被參、頃之主人出客亭、攝政及諸卿著饗座、殿上人同著如昨、巡行又如昨、三獻了打攤、更闌各々分散、○中略參大殿卿相攝政・大納言道綱・齊信・俊賢・中納言行成・教通・頼宗・經房・能信・實成・參議兼隆・道方・頼定・公信・通任・朝經・資平、

源經頼第三夜ノ饗ヲ儲ク

道長作事ヲ見ル

〔左經記〕六月

廿七日、戊午、○中略今夜大殿令渡□□(土御カ)門殿、依有障不參、

廿九日、庚申、○中略、大祓ノコトニカ、ル、本月二十九日ノ第一條ニ收ム、次參大殿、上達陪(部)(源經頼)饗余集攤事、上達陪(部)所奉仕也、

〔御堂關白記〕○陽明文庫本　元年十二月

六日、庚午、行土御門、作造作事、四條(公任)大納言被來、

十六日、庚辰、從内罷出、行土御門、

十七日、辛巳、行土御門、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　二月

四日、戊辰、○中略行土御門、

獄囚ヲシテ池ヲ掃除セシム

雑事定

十六日、庚辰、〇中略行土御門、
廿日、甲申、〇中略行土御門、〇中略入夜還來、
廿三日、丁亥、早朝行土御門、
廿四日、戊子、〇中略行土御門、入夜還來、
廿五日、己丑、〇中略行土御門、
廿七日、辛卯、〇中略行土御門、召囚人令掃池、
廿八日、壬辰、行土御門、
三月
二日、乙未、〇中略行土御門、
十一日、甲辰、〇中略可渡土御門〔定イアリ〕定雑事〔定イナシ〕、
十四日、丁未、行土御門、
十八日、辛亥、行土御門、
十九日、壬子、〇中略行土御門、還來、
廿日、癸丑、〇中略行土御門、

造作四月二十八日ニハ完了セズ

安倍吉平ヲシテ移徙ノ日ヲ改勘セシム

廿二日、乙卯、〇中略行土御門、
廿四日、丁巳、〇中略行土御門、
廿七日、庚申、〇中略行土御門、
卅日、癸亥、〇中略、道長、參内スルコトニカヽル、又行土御門、午時還來、
四月
一日、甲子、〇中略行土御門、
二日、乙丑、〇中略行土御門、
三日、丙寅、〇中略行土御門、
九日、壬申、〇中略行土御門、
十五日、戊寅、〇中略行土御門、入夜還來、
十七日、庚辰、〇中略行土御門、造作猶荒涼、〔作合廿八日可難イ〕廿八日作合難見、參院、還來、
廿四日、丁亥、〇中略行土御門、
廿七日、庚寅、〇中略召吉平朝臣、令勘申可渡土御門日時、六月廿七日者、
閏四月

三日、乙未、○中略行土御門、

五日、丁酉、參太内、從土御門參院、

七日、己亥、○中略行土御門、

九日、辛丑、○中略行土御門、晩景歸來、

五月

廿一日、壬午、○中略行御門、〔土イアリ〕

卅日、辛卯、○中略行土御門、

六月

十二日、癸卯、從土御門參中宮幷院、

十八日、己酉、○中略、道長家講經ノコトニカカル、年末雜載、宗教ノ條ニ收ムニカ、了行土御門、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、

〔御堂關白記〕○陽明文庫本　七月

四日、甲子、初參大内、

廿日、庚辰、初土御門修法・讀經等・念誦等、（マヽ）

「（頭書）修法源賢、」

道長移徙後初メテ參内ス

新第ニ於テ修善ヲ行フ

八月

二日、辛卯、○中略、相撲等、道長ノ許ニ參ルコトニカ、ル七月二十七日ノ條ニ收ム、相撲等見泉感云々、

三日、壬辰、廣業（藤原）獻舟一雙泛池、

六日、乙未、○中略早朝右大將（實資）來、不示消息、廻見所々來泉方、

泉

藤原廣業舟ヲ獻ズ

實資新第ヲ巡覽ス

〔榮花物語〕○十四梅澤義一氏所藏三條西本（あさみとり）　はかなう六月にもなりぬ、京極殿はをとゝしの七月にやけにしを、その八月よりよるをひるにてつくらせ給へれは、いてきて、けふあすわたらせ給、大宮（大皇太后藤原彰子）内におはしませは、○太皇太后、新造内裏ニ移リ給フコト、四月二十八日ノ條ニ見ユ、殿（道長）の御まへ

○一本、コノ次ニ、（源倫子）うへノ二字アリ、殿の御まへ、富岡本、北政所ニ作ル、・かんの殿（藤原威子）わたらせ給、いよのかみ（頼光）よりみつそ、すへてとのゝ内の事さなからつかうまつりたる、殿の御まへの御てうとゝも、上の御く、かんのとのゝ御かたも、すへてのこる物なうつかうまつれり、○富岡本、殿の御まへの御てうとゝも以下ノ四十二字ナシ、女房のさうし〳〵の物のくとも、みす○富岡本、コノ次ニ、たれノ三字アリ、・たゝみ・はんさう・たらひ、なにくれの物のくすへてさふらひ、くら人ところ・すいしんところなとの殿のうちに、○なとの、一本、まてすへてニ作ル、このものこそなけれとおほしのたまはすへきやうなし、いかてかくおもひよりけむとまて御らんせらるゝそめてたかりける、御丁・御屏風のしさま（しわさイ）、からう

藤原威子モ共ニ移徙ス

頼光女房藏人所隨身所等ノ雜具モ悉皆進獻ス

道長頼光ノ丹誠ヲ喜ブ
黄牛ヲ絹ノ幄ニ飼フ
舊第ハ古風ニテ屋低シ
道長意ニ任セテ新造ス
大木燒失シタレバ若樹ヲ植ウ

つのしさま、まきゑ、をきくちまて、○一本、御丁ノ次ニ御几帳ノ三字、からうつノ上ニ厨子ノ二字アリ、めつらかにつかうまつれり、〔はイ〕いかてかうしけむと殿もおほせられ、殿はらもいみしうかんし給、三日のほと、よろつの殿はら○殿はら、富岡本、上達部殿上人ニ作ル、まいり給て、うちあけあそひ給、まへにきぬやつくりて、あめうしかはせ給、れいのことなからもめてたし、○めてたし、一本、目留められたりニ作ル、殿のつくりさま、はしめはこたいのむ〔にイ〕かしつくりなりしかは、やのたけいとみしかく、うちあはぬ事おほかりしを、このたひは殿の御心のうちあふかきりつくらせ給へは、○御心以下十七字、富岡本、御こゝちにあふかきりつくらせ給へれはニ作ル、よにいみしき見物なり、山のおほきなとうせにしこそくちをしきことなれと、いまひきうへさせ給へるこ木なとは、〔ゆくイアリ〕すゑはるかにおひさきありて、たのもしきわかえたおほえてみ〔くイ〕ところまさりてなむありける、殿はこれにつけても枇杷とのゝをそけなる事をおほしめすへし、いまはかしこをいそかせ給、○富岡本ヲ以テ校ス、枇杷第造作始ノコト、三年二月二日ノ條ニ見ユ、

〔陰陽吉凶抄〕○東京大學史料編纂所所藏　十二、移徙法○注略ス、

吉日○中略

例　戊午、○中略寛仁二六廿七、戊午、大殿京極殿渡御、

○上東門第燒亡スルコト、長和五年七月二十日ノ第三條ニ、上東門第造作始ノコト、同年八月十九日ノ條ニ、道長、上東門第ニ於テ競馬ヲ行フコト、元年八月二十三日ノ第五條及ビ同年九月十三日ノ第二條ニ、上東門第造立ノ功ニ依リテ、源齊ヲ四位ニ敍スルコト、本年七月十一日ノ第一條ニ、上東門第ニ文殿ヲ造立スルコト、三年二月二日ノ條ニ見ユ、

上卿藤原實成
藤原實資ノ祓

二十九日、庚申、大祓、

〔左經記〕六月

廿九日、庚申、○中略著朱雀門、行大祓事、上左兵衛督、（藤原實成）

〔小右記〕○前田家本　六月

廿九日、庚申、○中略

未剋許解除、

〔日本紀略〕後一條院　六月

廿九日、庚申、大祓、

〔樗囊抄〕大祓○中略

不參〇中略

寛仁二六内侍不參、

雷、内裏宣陽門等ニ震ス、仍リテ、東宮及ビ太皇太后、弘徽殿ヨリ清涼殿ニ遷リ給フ、

〔小右記〕〇前田家本　六月

廿九日、庚申、午終許暴雨雷電、々々殊甚、經二三剋止、申剋許將曹(紀)正方差使申送云、雷震裂宣陽門柱、亦放式曹司内(之カ)々牛二頭被震者、乍驚參内、宰相(藤原資平)同車、比到陽明門、左衛門督頼宗(藤原)卿參會、相共參入、雷裂宣陽門南中柱、陣官不知、奏時内竪於日華門邊見之云々、余(藤原實資)・左金吾(少)・宰相參雲上、小時右大辨朝經(藤原)參入、酉終上達部相共參大殿(藤原道長)、按察大納言卿(藤原齊信)・左大將教通(藤原)卿相逢左兵衛陣内、按察云、日來依恠異住他處、今日本宅政屋(所脱カ)雷落、下人二人夫婦、臥戸屋、雷到其所無事還昇、左衛門尉宗相(藤原)朝臣云、雷落式曹司、損牛二頭、又落舊東宮、將曹正方云、落馬場馬留、又落處々云々、今日雷鳴不似近代、太可怖也、臨秉燭之間、參著大殿、〇中略、藤原道長ノ上東門第移徙第三日ノ儀ノコトニカ、ル、本月二十七日ノ第二條ニ收ム、今日大閤被問相撲樂事、〇七月二十七日ノ條參看、中略、今日雷電可有事問、依仁王會驗、〇本月二十七日ノ第一條參看、似無事者、延長八年外、〇雷、清涼殿等ニ震シ、大納言藤原清貫等、震死スルコト、延長八年六月二十六日ノ第三條ニ見ユ、無霹靂於宮中、最不吉之事也、〇中略彼日同雷落大藏省・大膳職、宮中數所有此事、奇也恠也、

暴雨數刻
宣陽門ノ柱裂ケ職曹司ノ牛震死ス
藤原實資等參入ス
藤原齊信ノ第ニ震ス
舊東宮御所及ビ右近馬場ノ馬厩等ニ落雷ス
大害無キハ仁王會ノ效驗
延長八年ノ他宮中落雷ノ例ナシ

或云、太皇太后藤原彰子太后雷電間、忽奉令内藏人範永(藤原)抱東宮(敦良親王)、大后相共白晝從弘徽殿參清涼殿給、參上御所、雷百倍從他所云々、可有御占歟、寂而無音、執柄臣不思得歟、彼日同有勅計、而不遣使於帶刀陣、尤違例事也、攝政(藤原頼通)被參被行歟、攝政被退出之後、余參入殿上、六位二人外又無人云々、其後近衛次將等不參、只左中將兼綱(藤原)・朝任(源)等參入、又公卿太爲奇、又不被問近衛次將不參、諸陣官人等云々、

大藏省大膳職等ニモ震ス
太皇太后藏人ヲシテ東宮ヲ抱キ奉ラシメテ清涼殿ニ移リ給フ
勅計ニ帶刀陣ヲ除ク
殿上ニ人無シ
近衛次將ノ不參ヲ咎メズ

〔左經記〕六月

廿九日、庚申、午剋雷雨殊甚、左兵衛陣門坤角柱雷落懸、柱所々破損、又式御曹司雷落、牛二頭被蹴殺、又前坊西門内□落懸、木皆破損、又按察亞相御家落、又右近馬場落云々、

七月　小　辛酉　朔　盡

二日、壬戌、法興院法華八講、

〔御堂關白記〕○陽明文庫本　七月

二日、壬戌、不參法興院、依未他行、○藤原道長、新造上東門第ニ移徙スルコト、六月二十七日ノ第二條ニ見ユ、例此日御八講終、而依會仁王會、○仁王會ヲ行フコト、六月二十七日ノ第一條ニ見ユ、以今日爲初、

六日、丙寅、依心神宜、不歟○道長、病ムコト、六月二十日ノ第二條ニ見ユ、不參法興院、

〔小右記〕○前田家本　六月

廿七日、戊午、○中略、道長ノ上東門第移徙ノコトニカ、ル、六月二十七日ノ第二條ニ收ム、法興院御八講從今日被始行、（可脫カ）而依御移徙事、來月二日可被行、彼日大入道殿（藤原兼家）御忌日、

三日、癸亥、施米ノコトヲ定ム、

〔日本紀略〕後一條院　七月

三日、癸亥、定諸寺施米事、

〔小記目錄〕六月　○九條家本　施米事

同二年七月三日、施米定事、（寛仁）

藤原道長新第移徙後他出セザルニヨリ不參仁王會ニヨリ延引ス

道長第ノ移徙ニヨリ延引ストノ說發願ハ藤原兼家ノ忌日ニ當ル

四日、甲子、廣瀨・龍田祭、

〔日本紀略〕後一條院　七月

四日、甲子、廣瀨・龍田祭、

七日、丁卯、新所旬、

〔日本紀略〕後一條院　七月

七日、丁卯、遷宮之後、始有旬事、無庭立奏、

十一日、辛未、節會、天皇出御南殿、○下略、造宮敍位ノコトニカ、ル、本月十一日ノ第一條ニ收ム、節會以下ノ八字ハ、當ニ七日丁卯ニ係クベキモノナルベシ、

庭立奏ナシ

出御

〔小右記〕○前田家本　六月

廿九日、庚申、○中略、藤原道長、相撲節ノ音樂ノ有無ヲ諸卿ニ諮ルコトニカ、ル、本月二十七日ノ條ニ收ム、大閤（藤原道長）猶有可有樂之氣色、（七月）七日、初可出御南殿、而彼日當御物忌、相撲以前可出御也者、

〔小記目錄〕○九條家本

同年七月七日、旬儀事、（寛仁二）

〔小記目錄〕日次事　○九條家本

幼主ノ例
官奏及ビ見參ナシ

寛仁二年七月七日、無被行吉事事、

〔中右記〕天永三年十月

廿三日、丁未、天晴、○中略今日於新造大炊殿初有旬、仍午時許參入、○中略今日旬儀、寛仁二年七月七日、新造内裏初被行之次第云々、是幼主遷御新造皇居之例也、彼日無官奏・庭立・見參事者、

○新造内裏ニ遷御アラセラルヽコト、四月二十八日ノ條ニ見ユ、

上東門第造立ノ功ニ依リ源齊ヲ四位ニ敍ス

十一日、辛未、造宮敍位、

〔御堂關白記〕○陽明文庫本　七月

十一日、辛未、被行造宮賞、以齊敍（源）四位、土御門造作預功也、○藤原道長、新造上東門第ニ移徙スルコト、六月二十七日ノ第二條ニ見ユ、

源章任ニ昇殿ヲ聽ス

廿三日、癸未、○中略被聽散位章任（源）昇殿、是大后（太皇太后藤原彰子）度々仰者、

〔日本紀略〕後一條院　七月

十一日、辛未、○中略、新所旬ノコトニカカル、本月七日ノ條ニ收ム、造宮之人各預爵級、

〔公卿補任〕七

造宮行事ノ賞
造南殿ノ賞

賀茂行幸行事ノ追賞

權中納言正三位藤實成、四十四、七月十一日敍從二位、造宮行事賞、○一代要記異事ナシ、

參議正三位源道方、五十一、宮内卿、左大辨、七月十一日敍從二位、造南殿賞、

參議正四位下同朝經（藤）、四十六、七月十一日從三位、造宮行事、

〔公卿補任〕七長元二年　參議正四位下藤重尹、年、寛仁二年七月十一日敍正四位下、臨時、

〔辨官補任〕後一條院

左大辨從二位源道方　七月十一日從二位、修理職別當、此年造宮賞、

右大辨從三位藤朝經　七月十一日從三位、造宮行事賞、

權左中辨正四位下同重尹　七月十一日正四位下、賀茂行幸行事追賞之、○賀茂社ニ行幸アラセラルヽコト、元年十一月二十五日ノ條ニ見ユ、

〔中古歌仙三十六人傳〕源道濟　寛仁二年七月十一日敍正五位下、造宮賞、

〔小記目錄〕○九條家本

同年七月十一日、造宮敍位議事、

〔小記目錄〕二年中行事二敍位議事付臨時　○九條家本　正月下王爲式部輔代

同年（寛仁二）七月十二日、昨敍位間事、以五位王爲式部輔代事、敍位尻付事、見敍位、

○源章任ニ昇殿ヲ聽スコト、便宜合敍ス、造宮撿挍・行事ヲ定ムルコト、長和四年十二月二十七日ノ第一條ニ、同行事ヲ改定スルコト、元年六月十九日ノ條及ビ本年四月十四日ノ條ニ、造八省院ノ功ニ依リテ、但波奉親ヲ正五位下ニ敍スルコト、元年十一月二十五日ノ條ニ、新造内裏ニ遷御ノコト、本年四月二十八日ノ條ニ見ユ、

御修善、

〔御堂關白記〕○陽明文庫本　七月

十一日、辛未、○中略、興福寺塔ノ造作始ノコトニカヽル、本日ノ第三條ニ收ム、又於大内被修善、又於捻持院初熾盛光法、

藤原道長總持院ニ於テ熾盛光法ヲ修ス

女方〔房〕參、（源倫子）

○前太政大臣藤原道長、總持院ニ於テ熾盛光法ヲ修スルコト、便宜合敍ス、

使藤原惟憲

攝政内大臣藤原頼通、興福寺塔ノ造作ヲ始ム、

〔御堂關白記〕○陽明文庫本　七月

十一日、辛未、○中略、造宮敍位ノコトニカカル、本日ノ第一條ニ收ム、此〔日脱〕攝政初作山階寺（興福寺）御塔、爲使惟憲（藤原）朝臣、（藤原頼通）

用材ヲ備前ニ徵ス

〔小右記〕○前田家本　十二月

三日、辛卯、○中略　備前守（藤原）景齊云、○中略　國之異損万倍他國、○諸國司、水旱害ヲ愁フルコト、六月三日ノ條ニ見ユ、又山階寺御塔材木三千餘物可採進者、彌迷手足者、○是ノ本、燒損ノ箇所アリ、京都御所東山御文庫本ヲ以テ補塡ス、

使藤原惟憲

〔小記目錄〕九佛事上　造寺事　付覆勘修造顚倒鑄鐘改名號事　○九條家本

寛仁二年七月十一日、興福寺幷塔始作事、

○興福寺五重塔及ビ東金堂等、燒亡スルコト、元年六月二十二日ノ第二條ニ、日向國ヲシテ、同寺塔料トシテ古塔ノ念物ヲ進ラシムルコト、治安元年五月二十八日ノ條ニ、同寺塔及ビ東金堂供養ノコト、長元四年十月二十日ノ條ニ見ユ、

十四日、甲戌、盂蘭盆、

〔御堂關白記〕○陽明文庫本　七月

十四日、甲戌、女方〔房〕曉從内渡二條、供瓮、還來、女方〔房〕同之、（源倫子）

藤原道長二條第ヨリ盆供ヲ送ル

十九日、己卯、丹生・貴布禰兩社ニ奉幣シテ、止雨ヲ祈ル、

〔日本紀略〕後一條院　七月一日、辛酉、朔比以來、陰雲久凝、暴雨頻降、十九日、己卯、奉幣丹生（丹生）・貴布禰（貴布禰）二社、依祈晴也、使殿上六位、

暴雨頻リナリ

〔小記目錄〕止雨事　○九條家本

藏人ヲ使トス

同〔寛仁〕二年七月十九日、被立雨奉幣事、使藏人、〔止脱カ〕〔使脱カ〕

源俊賢御改葬ノ要無シト言フ
藤原實資反駁ス木幡山ハ藤氏一門ノ墓所
藤原公任參仕ス
御骨ヲ壺ニ納ム

〔陰陽吉凶抄〕○東京大學史料編纂所所藏　三、神吉日

○中略

戊日不解祠神、不饗、

寛仁二七十四甲戌、（止カ）祈雨奉幣、○本書、奉幣ヲ十四日ニ係ケタルハ疑フベシ、

○炎旱ニ依リテ、二十一社ニ奉幣スルコト、六月十四日ノ條ニ見ユ、

故太皇太后藤原遵子ヲ、山城木幡ニ改葬シ奉ル、

〔小右記〕○前田家本　六月

十六日、丁未、○中略　大納（藤原公任）言書云、一日源大納（後賢）言書云、故宮子（太皇太后藤原遵子）孫不御坐、仁和寺（敦實親王）親王御骨爲粉失了、其彼（マヽ）可爲善、不可必奉移木幡者、此事如何者、答對云、仁和寺例非一門事、先祖占木幡山爲藤氏墓所、仍奉置一門骨於彼山、專不惡也、藤氏繁昌、帝王國母于今不絶、抑有御遺命有何事乎、無指事不可被背前跡哉、抑可在高慮歟、

廿一日、壬子、○中略

今日故太皇大（太）后御改葬、（藤原教通）左將軍云、大納言公任、拂曉詣其所了、

廿二日、癸丑、故宮御改葬事、問達大納言、御返狀云、御骨入壺了、爲來月奉移木幡也

檢非違使御器ヲ中宮ニ返進ス
十物ヲ失フ
祿ヲ賜フ
宇治陵

者、

〔小記目録〕二十一院宮凶事附御法事

太皇大（太）后遵子　太政大臣頼忠（藤原）公女、圓融院后、○中略

同年（寛仁二年）七月十九日、前大后御骨奉移木幡事、

○遵子崩御ノコト、元年六月一日ノ條ニ、般若寺ニ葬送シ奉ルコト、同月五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔陵墓要覽〕六四　圓融天皇

皇后遵子　宇治陵　京都府宇治郡宇治村大字木幡字中村、

圓墳

二十日、庚辰、檢非違使、中宮ノ御器ヲ盜ム法師ヲ捕フ、

〔御堂關白記〕○陽明文庫本　七月

廿日、庚辰、○中略　与女方（房）參入中宮（藤原妍子）間、左衞門尉正輔・右衞門志宣（紀）明・守（良カ）（安倍カ）等參、令申云、

搦中宮御器給法（盜カ）師、持參御器等者、十九物、本廿九物也、給祿、

旱害ニ依リテ音樂ヲ停ム　召仰上卿藤原公季

御前内取

召合ニ出御太皇太后及ビ東宮御覽

代始ニ最手ヲ御覽ズベキニ依リ夜ニ入ルモ停メズ

二十七日、丁亥、相撲召合、

〔御堂關白記〕○陽明文庫本　七月

十七日、丁丑、此日相撲樂有無、諸卿等申依旱損（不）可有由、○諸國司、旱害ヲ愁フルコト、六月三日ノ條ニ見ユ、仍只召仰了、右大臣（藤原公季）承之云々、初聞食度無樂例、延喜（醍醐天皇）・圓融院○天祿元年七月二・十七日ノ條參看、・先朱雀院御時○承平二年七月二・十八日ノ條參看、云々、

廿五日、乙酉、此日有内取事、太后（太皇太后藤原彰子）上（藤原威子）給、女御（藤原）候御、東宮（敦良親王）依御物忌不參上給、并昨夜御小惱氣也、○東宮御惱ノコト、八月十九日ノ第二條ニ見ユ、女御方（房）女方等候石灰壇方二間、召左大臣（將カ）、經通（藤原）朝臣（藤原教通カ）召之、右中將兼經（藤原）又候、同經通召之、

廿七日、丁亥、曉大宮（彰子）御南殿、尚侍（威子）・三位（藤原嬉子）・母々（源倫子）候御共、午時御出、次東宮參上給、經弘徽殿并承香殿北廂馬道・仁壽殿東廂等、亮（藤原惟憲）・學士（藤原廣業）・大夫（藤原教通）・傅（公季）候御前、未時事初、右大臣（藤原顯光）候御前、後左大臣參入、申案内候座、未見事、可尋前例、一番左勝、無論、二番右勝、三番云右突手、左相撲入了、右又入、件番五度取離、無殊事、左經興（宇治カ）、右富永（越智）、件番良久、日暮後々番久時召次番、入夜申障者被免、須留、而依初聞食度依可御覽寂手、左數二勝、

抜出

弘徽殿ニ於テ俄ニ公卿ニ酒肴及ビ祿ヲ給フ

公卿二十一人

左相撲人等藤原道長第ニ參ル瓜ヲ給フ公侯常時最手官符ヲ申請ス藤原頼通道長ノ意ヲ伺フ

廿八日、戊子、候宿、○中略未時御出、五番、東宮參上、其儀如常、事了還御、東宮又下給、大后依御物忌不御南殿、東宮着弘徽殿、參入宮御前給、供奉公卿等召殿東廂、給酒肴、非本自本意、早卒事也、突重等不合也、以御衣給公卿、攝政（藤原頼通）左祿大將取、右府祿（藤原道長）我取云、子孫被（マヽ）難堪云々、有有興氣色、我不着座、候公卿廿一人、以御衣皆給、於忽事甚大也、事了還御、女方（房）相具退出、○中略此日天陰雨不降、入夜時々微雨降、

八月

二日、辛卯、○中略左寂手常時（公侯）・腋衆則・自余者十人許參來、召泉下給瓜・糒等、洗泉、相撲等見泉感云々、常時申寂手官符、

三日、壬辰、○中略攝政命云、左寂手常時申官符如何、答、年勞成給有何事、

〔日本紀略〕後一條院　七月

廿五日、乙酉、相撲内取、

廿七日、丁亥、相撲召合、

廿八日、戊子、同御覽、

〔小右記〕○前田家本　六月

道長音樂ヲ停ムルヲ惜シム

廿九日、庚申、○中略、藤原道長ノ上東門第移徙第三日ノ儀ノコトニカヽル、六月二十七日ノ第二條ニ收ム、今日大閤(道長)被問相撲樂事、諸卿不申一定、大閤猶有可有樂之氣色、七日(七月)初可出御南殿、○新所旬ノコト、本月七日ノ條ニ見ユ、而彼日當御物忌、相撲以前可出御也者、

音樂ノ有無ノ仗議

〔小記目錄〕六年中行事六七月相撲事○九條家本

同二年(寛仁)七月八日、代初相撲、無音樂事、
同月十七日、相撲音樂有無有仗議事、
同日、相撲召仰事、
同廿二日、相撲遲參事、
同廿五日、御前內取事、
同廿七日、相撲召合事、
同日、下薦大臣候簾下後、上薦參入事、
同廿八日、相撲拔出事、
同八月五日、拔出日、右方將脫衣、不可然事、
同六日、最手官符事、

還饗

左右大將奏ヲ執ル儀ヲ異ニス

同十一日、相撲還饗事、

〔江次第〕八七月相撲召仰　相撲召合

○中略

取奏之儀

寛仁二年有論、二條(教通)大關白先挿笏、次取奏文見之、次挿次將所持杖後取、實資大臣見文畢之後、取將所持杖自挿文云々、挿笏取文、或左腋挿笏見文、

○右近衞府、相撲使ヲ定ムルコト、四月二十七日ノ條ニ見ユ、

八月大 庚寅朔盡

三日、壬辰、律師仁也寂ス、

〔三會定一記〕一 維摩講師次第

勅使右少辨廣業〇原藤 同三年四月九日、〔寛弘〕〔五カ〕〔宣〕講師仁也七十四 東大〔寺〕、法相〔宗〕、略〇中 東大寺僧 法相宗 八十六歳

〔僧綱補任〕三〇興福寺本 長和六〔寛仁元〕三任律師、寛仁二八三卒、八十六歳、〇東大寺雑集錄同ジ、 官歴 已講

講師仁也 東大寺、法相宗、寛弘三年四月五日宣旨、「七十四、」〔朱書、下同ジ〕寛仁元年三月十五日任 華嚴宗 法藏ノ弟子

權律師、「八十五、」十二月廿五日轉正、同二年「八月日入滅、八十六、」

〔僧綱補任〕〇乾〇彰考館本 律師仁也 華嚴宗、東大寺、寛仁元年三月十五日任、三會勞、寛弘三年講師、少僧都法藏入室弟子、同二年八月日卒、七十五、〔マヽ〕 河内國ノ人

〔維摩會講師研學竪義次第〕

寛弘三年、丙午、講師仁也、年七十四、藕、河内國人、「四月五日宣、廿六日請、」法相宗、東大寺、

〔權記〕寛弘三年四月

五日、丙子、〇中略維摩講師宣旨被奏下、東大寺、仁也、三論宗、

〇仁也、維摩會講師ノ擧狀ニ載セラルヽコト、長保元年十月十日ノ條ニ、藤原行成ノ世尊寺供養ノ衲衆ト爲ルコト、同三年二月二十九日ノ條ニ、一條天皇七々日御法會ノ百僧ニ定メラルヽコト、寛弘八年六月二十五日ノ條ニ見ユ、

五日、甲午、北野祭、

〔御堂關白記〕〇陽明文庫本 八月

五日、甲午、天晴、出東河、立北野宮神馬使、右兵衛尉、 藤原道長神馬ヲ奉ル

六日、乙未、桂芳坊ニ斃馬アルニ依リテ、朔平門ノ吉上ヲ獄ニ下ス、

〔御堂關白記〕〇陽明文庫本 八月

六日、乙未、參內、候宿、先參中宮、〔藤原妍子〕〇中略 參內後經通〔藤原〕朝臣來云、桂芳坊板敷上馬斃者、 放レ馬 坊ノ母屋ノ板敷ニ死ス

令問案內、從初放馬者、仍令問朔平門吉上、無所申、仍給獄所、

七日、丙申、見昨日斃馬藏人保相〔藤原〕問案內、入母屋後足踏入壁斃云々、從內退出、

〔小記目錄〕十六〇九條家本 臨時六 觸穢事